

5 Facing "King's Singer" 機巧少女は傷つかない



海冬レイシ



機巧少女は傷つかない5

海冬レイシ



ISBN978-4-8401-3854-3  
C0193 ¥580E



定価：本体580円(税別)  
メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない5

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。機巧都市リヴァールは、自動人形の祭典を明日に控えて華やかでいた。だが一方で、〈夜会〉参加者たちの自動人形が次々に消失していくという事件が起きる。硝子の命令により、事件の鍵を握る人形師・エリアーデ教授に接触する雷真。しかし、彼女は雷真と同じ歳の少女(ただし全裸に白衣)だった! さらに彼女は、夜々を自分に譲るよう、雷真にあの手この手で迫ってきて——! 「やっぱり……体を差ししないとだめ?」「差し出しても駄目だ!」シンフォニック学園バトルアクション第5弾!

「夜々はどこにも  
行きません」

コミック2巻との  
同時購入  
キャンペーン  
実施!

MF文庫J

580



コミック版 機巧少女は傷つかない  
『機巧少女は傷つかない』  
月刊(毎月27日発売)  
コミックアライブで大好評連載中!!  
アライブコミックスより  
『機巧少女は傷つかない』2巻  
も同時発売! 8/23  
文庫5巻と  
コミック2巻  
同時購入  
キャンペーン実施!  
詳しくは裏面を見てね!  
最新情報はこちらをチェック!  
<http://www.machine-doll.com/>

消失してゆく自動人形。機巧都市に迫る魔の手。  
華やかな祭典の影に、雷真は何を見るのか——?

MF文庫J

【著者】



海冬レイジ

かいとう・れいじ

いろんなひとに支えてもらって——  
たくさん幸せをもらいました。  
だから、今度は僕が返す番。

……ところで、ツケはききますか？

いまだに新人気分が抜けないキャリア7年目の職業作家。  
札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

るろお

海冬さん、幸せゴチになってます！！

さて、フリーになって、もうすぐ一年。  
そろそろ職業はイラストレーターと書っても  
大丈夫かな？ なんて考えるお年頃です。

カバーイラスト／るろお 装丁／宮庭屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

# 機巧少女は傷つかない

Facing "King's Singer"  
Mechikage Shōjo wa Itadaki ni Yaru



海冬レイジ 著

機巧少女は傷つかない

海冬レイジ

VI

580



ISBN978-4-8401-3854-3  
C0193 ¥580E

定価：本体580円（税別）  
メディアファクトリー



## 機巧少女は傷つかない5

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。機巧都市リヴァプールは、自動人形の祭典を明日に控えて華やいでいた。だが一方で、〈夜会〉参加者たちの自動人形が次々に消失していくという事件が起きる。羽子の命令により、事件の鍵を握る人形師・エリアード教授に接触する雷真。しかし、彼女は雷真と同じ歳の少女（ただし全裸に白衣）だった！さらに彼女は、夜々を自分に譲るよう、雷真にあの手この手で迫ってきて——!? 「やっぱり……体を差し出さないとだめ？」「差し出しても駄目だ！」シンフォニック学園バトルアクション第5弾！

## J 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"  
[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"  
[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speeder"  
[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kevaller"  
[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kevaller"  
CD(Side-A)付き特装版  
[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない5 Facing "King's Singer"  
[イラスト るるお]

マシントレース

# 機巧少女は傷つかない5

Facing "King's Singer"

海冬レイジ



機巧少女は傷つかない5

海冬レイジ

VI







5 Facing "Ring's Singer" 機巧少女は傷つかない

海客レイヴ

NO.19

「雷真  
夜々だって！  
夜々だって  
脱ぎますー！」



遠く心をむき出しに  
下着に手をかける夜々。







「……誤解を生むような発言はせよ」

「わわわ私は私心など微塵もなくっ」

如さま

やっぱり



「さあて、夜々……」  
付き合ってもらおうぜ」

「派手にぶちかますわよ、  
ラスターカーン！」

ラスターカーン！





「おともします 雷真——地獄までも」

「蹴散らせばいいだけだ

——ケルビム！」

「浅い……か。」

さすがに若いな」

# contents

Prologue 夜会、ほころびて # 1 .....p11

Chapter 1 賢者の資質 .....p24

Chapter 2 黒き者、誘う者 .....p54

Chapter 3 絶対王権 .....p87

Chapter 4 虎に挑む少年 .....p115

Chapter 5 出撃 .....p152

Chapter 6 肉を斬らせよ .....p182

Chapter 7 天の玉座を謳う歌姫 .....p215

Epilogue 夜会、ほころびて # 2..... p245



Unbreakable  
Machine-Doll

マシンドール  
**機巧少女は傷つかない5**  
Facing "King's Singer"

海冬レイジ

MF文庫 

目録・本文イラスト●るろお

編集●庄司智

# Prologue

## 夜会、ほころびて#1



「うつつ、ひどいです雷真……夜々は「嫌です」って言ったのに……」

乱れた着物を胸の前に引き寄せ、夜々は涙ながらに訴えた。

夜々が泣いているのはベッドの上。黒い髪がかかる、真っ白な肩がなまめかしい。

雷真はバツが悪そうに目をそらし、

「いや……その……悪かった。でも、まあ、突っ込んででも無駄っぽかったし」

「突っ込んでください！ 放置は嫌ですって、いつも言ってるのにっ」

夜々は「YES」と書かれた枕を振りかざし、非難がましく詰め寄ってきた。

「ひどいです雷真！ 自分のベッドに半裸で横たわる可憐な美少女をスルーして、廊下の

ソファで一夜を明かすなんて！」

「いつの間にか怪我人のベッドを占領してる方がひどいと思うぞ」

「雷真は大事な体なのに！ 風邪でもひいたらどうするんですかっ？」

「だったらベッドを占領するな！ 大事な体を誘惑するな！」

じやきつ、と金属音がして、雷真の首筋に背後から刃が当てられた。――自動人形ケル

ビムのブレードだ。



仕切りのカーテンが開き、となりのベッドから不機嫌な顔がのぞく。

真珠色の髪 of 少年、ケルビムの使い手ロキ。

「自習の邪魔だ。痴話喧嘩は外でやれ極東バカ」

「何だとこの……………わ、わかったよ」

ぐっと自制し、雷真は反論をのみ込んだ。十日ほど前、「夜々奪還作戦」の際に、ロキには借りを作ってしまった。それ以来、かつてのようには強く出られない。

邪魔にならないよう病室を出る。夜々もそれに従い、乱れた着物を直して、とことことついてきた。廊下を突っ切り、エントランスへ。窓の外はいい陽気だ。雷真は夜々と二人、陽気に誘われるまま戸外へ出た。

目差しを浴びながら、大きく伸びをする。

気持ちがいい。通りの方を眺めると、道行く学生たちが見えた。

日曜礼拝が終わった時刻だ。学生たちは連れ立って、楽しげに笑いながら、足取りも軽く、一様に〈ゲート〉の方へと向かっていた。

「何か……………浮かれてるな。何かあるのか？」

「知らないんですか雷真。明日からお祭りが始まるので、街は大賑わいなんです」

「……………祭り？ 夏至はとくに過ぎたよな？」

「Auto-Matton Expo at Liverpool 2014」

「自動人形エクスポ？」

「夜会が魔術師の競演なら、こちらは自動人形の祭典です。欧州の名立たる名工たちが、自作の自動人形を持ち寄って、その腕を競うんです。即売会やオークション、大きな商談会なども開かれるそうです」

「へえ……機巧都市らしいイベントだな」

「はいー 何でも今回は、大英帝国の皇太子さまもいらっしゃるそうで、街は復活祭みたいな盛り上がりだそうですよー」

「復活祭って、おまえ知らないだろ。誰に聞いたんだ？」

「えへへ……全部、シャルロットさんの請け売りです」

夜々は頬を染め、白状した。

「へえ。つてことは、シャルと仲良くなったんだな。よかったよかった」

「仲良くなってるってません。一時的な停戦協定です」

「……何だそりゃ」

「小娘同士、つぶし合っている場合じゃないとわかりましたから……」

ふふ……、と暗い含み笑いを漏らす。何と言うか、目が危ない。雷真は身の危険を感じ、先回りして言った。

「いや、硝子さんのあれは違うからな？ 硝子さんに限って、おまえが想像してるような

意味合はないからな？ 郷に入りては何とやらで、洋風の挨拶を——」

そこが地雷原だった。夜々の笑顔はたちまち砕け散った。

「雷真は馬鹿ですっ！ 家族でもない男女のマウス・トウ・マウスは挨拶の域を超えるんです！ シャルロットさんがそう言っていました！」

「くっ！ シャルのやつ、余計なことを……！」

夜々はよよと泣き崩れ、着物の袖で顔を覆った。

「うつつ、夜々にはしてくれないのに……硝子とは接吻……！」

「いや、あれは別に、俺からしたわけじゃなくてだな……！」

「じゃあ夜々からすればいいんですかっ？」

「そういう意味じゃない！ 事故みたいなもんだと言ってるんだ！」

「だったら夜々も事故を起こします！ 窒息させます！」

「そっちの事故を起こしてどうす——うわっ、やめっ、落ち着け！」

迫りくる桜色の髯。雷真はとっさに飛び退いてかわす。その途端、とすんっ、と誰かに背中がぶつかった。

「おっと、悪い！」

雷真の気もゆるんでいたが——

それ以上に、それは気配を感じさせない存在だった。

緑色の髪の乙女。小柄で、線が細い。肌の色は白く、見るからに北欧系の顔立ち。美貌の持ち主だが、何と言うのか……どこか、冷たい感じがする。

乙女は医学部の校舎から出てきたところだった。抱えていた書類の束を盛大にぶちまけてしまう。雷真はあわてて、拾うのを手伝おうとした。

「お気遣いなく。わたくしは自動人形です」

乙女は雷真を手で制し、機械的な口調でそう言った。

「へえ、そうなのか」

雷真は手を止めない。夜々もまた、黙々と手伝う。

乙女はばかんとして、雷真の作業を見守った。

「ほらよ、これで全部だ。ぶつかって悪かったな。……どうした、じっと見て」

「いえ……」

乙女は書類の束——学生の名簿だ——を抱きしめ、興味深そうに雷真を見つめた。

「質問してもよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「わたくしは自動人形だと申しました」

「ああ、聞いた」

「それなのになぜ、貴方はわたくしを手伝ってくださったのですか？」

「なぜって、そりゃ……別に、普通だろ？」

「普通……ですか？」

雷真が答えるより早く、夜々がおどろおどろしい気配をまといつつ、

「はい、普通です。雷真は女の子と見ると、いつも普通に……見境なく……」

「ちょ……落ち着けよ夜々？ 他人さまの前だからな？」

緑髪の乙女が、遠慮がちに口を開く。

「わたくしはエヴァンジェリンと申します。よろしければ、貴方のお名前を」

「俺か？ 俺は赤剥雷真、日本の傀儡師だ」

「その妻、夜々」

「そのネタはもういい」

「ネタじゃないです……」

「ライシンさま……」

乙女は舌の上で転がすように、その名前を繰り返した。そして、

「ライシンさまは、面白い方ですね」

「誉めてないよな？」

「愉快な方ですね。笑えます」

「悪化してゐるだろ！」

「ご機嫌よう」

「せめて否定していけ！」

乙女は至つてマイペースで、べこりとお辞儀をして、去つて行つた。

どこか懐かしい、優しい曲をハミングしながら――

「やれやれ、何なんだ。見ない顔だったが」

「ふふ……雷真ったら……また変な女にコナかけて……ふふふ」

「ちょ……夜々？ 何でそんな羅刹の顔……待て……落ち着けえええ！」

夜々は雷真の首を絞めようとしたが、今朝はいつもより少しだけ余計に傷ついていたようだ。目尻に涙がにじんだかと思うと、しくしくと泣き出した。

「ひどいです雷真。夜々の気持ちを知ってるくせに、ほかの女と乳繰り合つて……」

「乳繰り合つてはいないからな？ 全部おまえの妄想だからな？」

雷真はげんなりした顔で、とりあえず、おぎなひなツツコミを入れた。

その日の夕刻。グリフォン女子寮、プリュー姉妹の部屋にて。

シャルは机にテキストを広げ、昨日の講義の復習をしていた。

だが、身が入っていない。ペン先はノートの上をさまよっているだけだ。

初めぐちゃぐちゃに動いていたペンは、気がつく、人面のような軌跡を描いていた。

それが誰の顔に見えたものか、シャルは赤面してノートを破り捨てた。

その様子を、ベッドの上に腰かけて、妹アンリが眺めていた。エプロンドレスの膝の上には、丸くなった仔竜——シグムントがいる。

アンリはシグムントと顔を見合わせ、うなずき合った。そして、

「お姉さま。ひよっとして、ライシンさんのお見舞いに行きたいんじゃないや……？」

「なっ、こっ、ばっ——どうしてそうなるのよ！ 知らないわよ、あんなやつ！ あんな変態……年増にキスされて鼻の下を伸ばしてればいいわ！」

叱られて縮こまるアンリに代わり、シグムントが口を開く。

「シャルよ、意図地になつてもいいことはないぞ。世間は機巧の祭典で大賑わいだ。雷真の外出許可が下りるようなら、彼を誘って遊びに行けばいい」

「どっ、どうして私がそんなこと……ああもう、暑いわね！」

シャルは火照った顔をこまかすように、乱暴に窓を開けた。

刹那、ざわつと悪寒に襲われる。

本立ちの奥に目を凝らすと、夕闇の中に、不可思議な一団が浮かび上がった。

十数体の自動人形が、列をなして行進している。いずれも無表情で無言。あたかも亡霊のように、ふらふらと安定しない。

「自動人形？ でも、あれ……（手袋持ち）の持ち物だわ！」

何か、異変が起こっている。シャルは直感し、相棒を振り返った。

「きなさい、シグムント。あれを見——シグムント!?」

シグムントはアングリの膝の上で、四肢を突っ張って硬直していた。修復されたばかりの前肢が、翼が、びくびくと不自然に痙攣している。

「どうしたの!? 大丈夫!?」

姉妹が心配して見守る中、しばし、シグムントは荒い息をついていた。やがて、少しは落ち着いたので、あえぐように言った。

「案ずるな。どうやら、脅威は去ったようだ」

「脅威?」

「上手く言葉にできんのだが……。持っていかれそうになった」

「持っていかれる……。? どういうこと?」

「抗い難い……。誘惑のようなものだった。己の内側から、こう……。いや、言葉にすると嘘が混じるな。このようなことは、一五〇年のあいだ、ついぞなかった」

「ひょっとして……。誰かの魔術?」

「おそらくは」

では、先ほど行進していた人形たちは「持っていかれた」のだろうか。

嫌な感じがする。シャルは決断し、シグムントを抱き上げた。



「学院に報告した方がよさそうね。今すぐ夜会執行部に出向きましょう。アンリ、貴女はこの部屋を動いちゃだめよ？ いいわね？」

不安げなアンリに念を押し、シャルはシグムントを抱いて、部屋を飛び出した。

同刻。雷真は夜々とふたり、病室で夕食を摂っていた。

鴨とレンズ豆のスープに、ミートローフというメニュー。黒胡椒の香りと、立ちのぼる湯気が食欲をそそる。

「うっ——」

突然、夜々が顔をしかめ、スプーンを取り落とした。雷真は驚いて、

「どうした夜々？ 顔が真っ青だぞ」

「……平気です。ちよっと、めまいがしただけです」

「めまい……？」

「ここのところ、ときどきなるんです」

「どっか具合でも悪いのか？ 硝子さんに診てもらった方がよくないか？」

心配されて、夜々は嬉しそうに頬を染めた。

「大丈夫です。機能に問題はありませ——はっ！ まさか雷真ったら、夜々をダシにして硝子を呼び出そうと……!?」

「曲解するな——瞳孔を聞くな——」

逃げるように顔を背ける雷真。その視線の先、不機嫌そうに食事を摂るロキの向こう、病室のドアの外から、足音が響いてきた。

コツコツという革靴の音と、チャツチャツという爪の音。たゆんたゆんと胸を揺らし、犬を五頭も引き連れて、真珠色の髪 of 乙女がやってきた。

「よう、フレイ。夜会はどうしたんだ？ まだ一時間経ってないだろ？」

「う……対戦相手が、棄権だつて」

「棄権——またか？」

ロキの眉がびくりと動き、夜々もはつとしたように口をつぐんだ。

「ここ十日ほど、まともに戦ったのは二日しかない……よな？」

雷真は首をひねった。十人中八人が棄権。いくらなんでも多すぎる。

ふと、雷真はフレイの犬たち——自動人形（ガルム）シリーズに目を留めた。

犬たちは首を高く上げ、落ち着かない様子で、あたりをうかがっている。

「どうしたんだ、こいつら。何か気にしてるな？」

「上手く言えない……けど」

フレイは言葉を探すように視線をさまよわせ、そしてこくんとうなずいた。

「歌が、聴こえる……」

「……歌？」

いつもの五割増しでわけがわからない。

だが、雷真がたずねるより早く、事態は動いた。

としんつ、と地面を揺らして、ゴーレム型の自動人形が窓の外に着地した。

何だ、と思う間もない。廊下に複数の足音が響き渡ったかと思うと、それはすぐさま近付いてきて、フレイを押しつけ、病室に飛び込んできた。

真つ先に顔を見せたのは、金髪の美女だった。

びしつとスーツで決め、黒眼鏡をかけている。腰には無造作に帯びたサーベル。触れただけで指が切れそうな、剣呑な気配を醸し出す女だ。

見覚えがある。アヴリルとかいう、学院長の秘書官だ。

アヴリルは屈強そうな大男たちを従えていた。そろいの制服は警備のものだ。対魔術用のプロテクターに身を固め、拘束具を構えている。

雷真はぎくりとした。ほんの十日前、雷真は学院長の娘——アリスを生死不明の状況に追いやっている。もしか、その件で……？

アヴリルは抜き身の真剣のような、鋭い視線を雷真に投げた。

「ライシン・アカバネだな」

「……そうだが、何か用か？」

つかつかと歩いてくる。夜々が警戒し、腰を浮かせた——瞬間。

アヴリルの腕が閃いた。

抜き放たれたサーベルが、雷真の喉笛に突きつけられる。

雷真は慄然とした。対応、できなかった。意表を突かれたせいもある。だが、警戒していても反応できたかどうか怪しい。それほど早業だった。

フレイが遅れて息をのむ。ガルムたちが低くうなるが、アヴリルに一瞥されただけで、尾をまたに挟んだ。本能的に力の差を感じたか。

雷真は冷や汗を垂らしながら、

「……やれやれ、晩飯どきに刃物を振り回すのが英国流なのか？」

「初めに言っておくが、今の私には警察権がある」

「……それで？」

「おまえを（人形殺し）の容疑で拘束する——やれ——」

アヴリルの命を受け、むくつけき大男たちが殺到してくる。わけがわからないまま、男臭い筋肉にもみくちやにされ、雷真は思わず悲鳴をあげた。



## Chapter 1 賢者の資質



### 1

雷真が解放されたのは、夜もかなり更けてからだった。

ふらふらと建物——学院長公邸を出て、くさくさした気分で前庭を抜ける。公邸の外、堅牢そうな鉄門の前で、相棒が待っていた。

「あ、雷真——」「夜々——」

同時に叫ぶ。雷真は疲労も吹っ飛んで、夜々のもとに駆け寄った。

「おまえ、無事か？ 嫌なことされなかったか？」

「夜々は平気です。検査官に走査魔力を流されたくらいで。雷真こそ……」

「俺は大丈夫だ。こっちも基本、尋問だけ——」

「あの弾猛なサーベル女にいやらしいことされませんでしたか？」

「されてない——せいぜい、グダグダとねちっこく追られたくらい——」

が——ん、と衝撃を受け、夜々が固まった。

「……いや、悪い。学習が足りないなと自分でも思った。正直」

夜々はカタカタと震えながら、公邸に戻ろうとした。

「ちょ……夜々？ どこへ行く気だ？」

「うふふ……夜々はどこにも行きません。行くのはあの女狐メネネです——地獄へ」

「やめろ！ せっかく解放されたのに、問題を起こすな！」

夜々を羽交い絞めにして引き止める。ずりずりと五メートルも引きずられながら、雷真は今日の（取調べ）を思い返した。

「私は回りくどいことが嫌いだ」

学院長秘書官——アヴリルの第一声がそれだった。

学院長公邸の応接間。どうやら、取調べはここで行われるらしい。待遇がいいのか悪いのか、ソファは上等で、香りのいい紅茶が出されている。

だが、出入口は警備と自動人形オートマタが固めているし、手首には（魔封じ）の鎖をつけられている。紅茶を飲む以上の自由は与えられていない。

雷真は冷笑して、先の言葉を茶化チャカすように応えた。

「奇遇だな。俺も面餌オモては嫌いだ」

「ガキの相手をするのも、ジジイのお守りおまもりをするのも嫌いだ」

「それも同感——つか、ジジイって学院長のことかよ？」

「ゆえに、單刀直入に訊く。ライシン・アカバネ、おまえが〈人形殺し〉か？」  
 アヴリルの視線が突き刺さる。痛みを感じるほどの眼力だ。

「……〈人形殺し〉って何のことだよ？」

「質問をしているのはこちらだ」

声がとがる。実際に抜いたわけでもないのに、まるで真剣を突きつけられたような剣気を感じた。はつきり、怖い女だ。雷真はそっぽを向いて、黙り込んだ。

そっちがその気なら、こっちはこうだ。黙秘で時間を浪費させてやる。

「やれやれ……だからガキは嫌いなんだ。よかろう。話してやる」

アヴリルはため息をつき、意外にも簡単に譲歩した。

バサバサと、テーブルの上に書類を広げる。経歴書……いや、名簿のようだ。少年少女の顔写真に添えて、学部や学科、成績などが記されている。そして——

七三位、七二位、七十位、六九位、六八位、六六位……と続く数字。

ところどころ抜けているが、それが夜会参加者の順位だということは容易に察しがついた。名簿は七三位から五五位のものまである。

よく見ると、七一位と六七位——フレイが倒した二人の名簿が抜けている。

「棄権した奴のリストか？　だが、五五位が出るのはまだ先だよな？」

「ほう、あなたがちバカでもない……か。そう、これは棄権者のリストだ。六一位より上はまだ非公開だがな」

「そんなものを俺に見せてどうする。つか、こいつらは何で棄権した？　いくらフレイやロキが怖いからって、この人数は不自然だろ」

「なぜ棄権するのか——だと？　先刻ご承知なんだろう？」

「……〈人形殺し〉って言ってたな。つまり、自動人形を破壊されたのか？」

アヴリルはじつと雷真を見つめ、やがて、飽きたように視線を外した。

「こいつはシロだ。解放してやれ」

「はあ？　ちょっと待て！　どういうことだ！」

「ガキの相手をするのは嫌いだと言っただろう。とつとと失せろ！」

警備が鎖を外してくれる。だが、おさまらないのは雷真だ。

雷真はテーブルに足を叩きつけ、冷ややかな声で言った。

「ふざけんなよ。勝手に拘束しておいて、説明もなしに放り出すってのか」

刹那、アヴリルのサーベルが一閃した。

本気で刺すつもりはなかったのだろう。切っ先は頬をかすめただけだ。

雷真はまばたきもせず、アヴリルをにらみ続けた。——太刀筋を完全に見切っている。

アヴリルは感心した様子で、しかし口汚く言った。



「ふん……不愉快極まりない、クソみたいなガキだな」

「あんただって言うほどトシじゃねえだろ。学院長に比べりゃ、まだまだ小娘だ」  
さつとアヴリルの頬が染まった。

「ぞ、戯れ言をほごくなー」

雷真らいしんははかん、とした。今のは、照れるところか？

「取調べ続行だ。拘束しろ」

「なに？ ちょ、ま——」

後ろ手に縛られる。紅茶を飲む自由さえ奪われてしまった。

「そんなに知りたいなら教えてやる。ただし、他言した場合、命の保証はできかねる。嘘だと思ふなら試してみろ。ここのところ、サーベルが夜泣きしてかなわん」

「殺す気まんまんじゃねーか！」

「自動人形オートマトンを狂わせる」

「……あ？」

「そういう悪党——か、もしくは化け物が、学院をうろついているんだよ」

そうして、アヴリルは語り出した。（人形殺し）などではなく——

もつと恐ろしい、敵のことを。

それが数時間前のことだ。その後、アヴリルは応接間を出て行き、そのまま戻ってこなかった。何時間も放置された上、よくわからないまま解放された。ひどい話だ。

内心で憤慨していると、夜々が底なし沼のような目で見上げていた。

「雷真……あのサーベル女のことを考えてる……」

「……相変わらず無駄に勘がいいな」

「雷真のことなら、何でもお見通しです……うふふ」

それは怖い。ものすごく。

知らず早足になってしまいがた、夜更けのメインストリートを急ぐ。

間もなく、医学部校舎に到着する。忍び足で校舎に入り、エントランスにすべり込んだ

とき、ふと、廊下の中に女性的なシルエットが浮かび上がった。

そこにいたのは、青い着物に身を包んだ、清楚な雰囲気乙女だった。

「いろいろ……?」

## 2

螢火のような手持ちランプのせいか、それともほかの理由によるのか、いろいろはいつもより華やいで見え、息が止まるくらい美しかった。

いろりはほんと咳払いせきばらいをして、落ち着き払った声音で、

「おおおお加減はいかがですか、ららら雷真殿」

喘み喘みの台詞せせりふを言った。

何を意識しているのか、目を合わせようとしなない。

雷真は首をひねったが、夜々は鋭く何かを察したようで、

「姉さま……まさか……ま・さ・かー」

「ここご誤解だ夜々。くくくくだらぬことを言っていないで、おおおつとめを」

「くくくくだらなくなんかないませんー 夜々にとつてはししし至上命題です！」

雷真は夜々を押しのけて、いろりの前に出た。

「どうしたんだ、いろり？ 見舞いにきてくれたってわけじゃねーんだろ」

「そそそ、その、主の使いです、もちろん」

「硝子さんの？ 小紫はどうした？」

硝子との連絡は、基本的に小紫の役目だ。

いろりはぎくつとして、あわあわと両手で空中をかき混ぜた。

「いえ、あの、決して、私が言伝ことづてを預かりたいと申し出たわけではなくっ」

「姉さま……やっぱり……っー」

しらばつくれた様子で、顔を背けるいろり。姉妹のあいだに妙な緊張が走る。

——わけがわからない。

雷真はしばし考え、結局はスルーすることにした。

「ともかく、硝子さんの使いなんだな。それで、硝子さんは何て？」

「雷真殿に、軍部の囧まじになっていただきます」

囧。嫌なことを、はつきりと言う。それゆえに、いろりは信用できる。

「雷真殿は標的に接触してください。標的は学院工学部エリアーダ教授です」

「学院の教授か」

「教授が秘密裏ひそかにに研究しているものを、軍部は探りたがっています。雷真殿には、教授の注意を惹きつけてもらいます」

「へえ。危険度は？」

「教授は人形造りのエキスパートです。自作の自動人形オートマタを警護につけていることでしょう。また、最悪の場合、雷真殿はスパイ容疑で学難抹消ということも——」

「断る理由も、権利もないな。OK、わかった、了解だ」

「雷真——」

夜々の声が裏返った。

「まだ怪我が治っていません！ 今が大事な時期なのに——」

「いいんだ。俺が学費を工面してもらえたのも、滞在費を出してもらえるのも、密偵いひんとい

う大義名分があるからだ。俺がいらん反抗期に突入したら、硝子さんの立場まで危うくなる。そんな理屈がわからないおまえじゃないだろ？」

夜々<sup>やや</sup>はしょんぼりとうつむいて、引き下がった。

目尻<sup>めじり</sup>にじんわり涙がにじんでいる。雷真<sup>らいしん</sup>を本気で心配しているのだ。

その心遣いがありがたく思いながら、しかし、意を汲<sup>くみ</sup>んでやることはできない。

「具体的な話に移ろう。いつ、どこで、何をすればいい？」

「明日——既に今日ですね——の正午頃<sup>ごころ</sup>、教授に接触してください」

「質問にでも行けてか？」

「主<sup>あるて</sup>は、「お茶でも」ちそうになりなさい」と

「……ハードルが上がったぞ？」

「その間に、小紫<sup>こむらさき</sup>と情報部が探りを入れます。雷真殿は可能な限り、教授の注意を惹きつ

けてください。この前の——Dワークスのとと同じ構図です」

チクリと胸が刺す。軍の諜報員<sup>ちほういん</sup>がしくじったせいで、雷真は命を落とすそうになり——

友人になれたかもしれない者を失った。

「……あのときみたいなヘマはごめんだぜ？」

「それは確約できません」

やはり、はつきりと言う。雷真は苦笑して、うなずいた。

「わかった。任務は了解した」

「……では、私はこれで。雷真殿、どうかご無理は……なさらないでください」  
うるんだ瞳でそう言い残し、いろりは去って行った。

ふと、ふるるつ、と夜々が震えた。

「夜々？ どうした？」

「パンツを脱いでくださいー」

「何でだー」

「もはや一刻の猶予もないんですー 雷真の貞操が時間の問題ですー」

「おまえのせいでな！ つか、病室を追い出されるのが時間の問題だなー」

エントランスでドタバタぎやあざやあと大騒ぎになる。取っ組み合いは結局、宿直室のクルーエルが起き出してくるまで続いた。

### 3

翌日。朝から図書館に詰めていた雷真は、正午少し前に図書館を出た。

学院のメインストリートは学生たちで賑わっていた。(ゲート)へ向かう者が多い。昼休みを利用して、街に繰り出すつもりだろう。

例の自動人形<sup>オートマトン</sup>エクスポとやらを見物に行くようだ。最新の機巧技術が見られるのだから、単なる遊興ではなく、人形使いとしての勉強にもなる。図書館の掲示板にも（休講）の札がいくつもかかっていた。教授も公認というわけだ。

学生たちの流れに逆行し、雷真<sup>かみざき</sup>は工学部へと向かう。夜々<sup>よや</sup>が雷真の正面に回り、心配そうに見上げてきた。

「浮かない顔ですね、雷真」

「まあな」

手にした本をもてあそびつつ、重苦しい声で答える。

今しがた、図書館から借りた本だ。エリアーデ教授が著した研究書『魔術回路オーバーフロー論——デバイス的地見地からの魔術回路、その限界』。

正直、タイトルを見ただけで投げ出したくなるような本だった。

「やれやれ……とんだ不可能ミツヨンだ。こんなわけのわからない本を書いた奴と茶を飲めだなんて、硝子<sup>しやうし</sup>さんも殺生<sup>ころころ</sup>だぜ」

「それで、教授への質問は考えたんですか？」

「いや……何がわからないのか、わからなくてだな……」

「ダメな子がよく言う台詞ですね」

言葉が胸に刺さる。確かに、わからないところを質問する、というのが自然な流れなの

だが……相手の専門もロクにわからないのでは、質問のしようがない。

本の内容より、著者プロフィールからわかったことの方が多い。

エリアーデ教授は新進気鋭の人形師だそうだ。イブの心臓の取り扱い——ソフト面でも、人形そのものの構造研究——ハード面でも、超一流の腕前を持つという。

あとがきに寄せて、エドワード・ラザフォードのコメントが載っていた。

いわく、教授の研究が成就すれば、機巧文明は二世紀ほど進む。魔術は魔術師だけでなく、広く一般の市民たちにも恩恵をもたらすだろう。

正直、何のことかサッパリだった。

「いざとなったらフォローを頼むぜ、夜々」

「はい、夜々は雷真のお役に立ちます。ベッドの中だけでなく、外でも」

「ベッドの中で役立ったことはないからな？」

学生たちが白い目を向けてくる。雷真は足を速め、先を急いだ。

ほどなくして、工学部の威風堂々たる校舎が見えてくる。

機巧工学は主に自動人形オートマトンのボディを研究する分野だ。まさに「機巧」を取り扱うわけで、理学部と並んで機巧魔術の根幹を成している。研究者たちの自負を反映するかのように、校舎はゴシック式の重厚な造りで、大聖堂のごとき威圧感があった。

敷居が高い。それでも覚悟を決め、中に入る。うす暗く、ひんやりとした屋内。空気は



乾燥していて、どこからか鉄と油のにおいが漂ってきた。

金属を削る音や、歯車の軋む音が響いてきて、何とも不気味だ。

階段を上がつて、最上階——研究室が並ぶフロアへ向かう。

エリアーデ教授の部屋には、あつさりについてしまった。

深呼吸して、一枚板の扉をノック。

しん……、と静寂が返ってきた。

「お返事、ありませんね」

「……いないのかな？」

「お祭りですしね」

「だったら、こっちも仕事が減って大助かりなんだが——そう都合よくはいかないよな。」

四六時中研究室に引きこもってるって噂だ」

ノブに手をかけると、ノブはスムーズに回転し、かちやり、と扉が開いた。

「……聞いてますね？」

「入ってみるか。ええと……失礼しまーす」

警護の自動人形がいたら、攻撃されるかもしれない。

そんな緊張にさらされながら、そろり、と慎重に踏み込む。

雷真を出迎えたのは、白骨死体だった。

——否、死体ではない。骨ですらない。

「自動人形の……内部骨格？」

人骨のように見えたそれは、金属製のフレームだった。

塗られたグリスがぬらぬらと光る。グロテスクだが、どこか美しい。無駄のない緻密な設計や、効率的に整理された配線が、素人の雷真にも理解できた。

骨格の向こうには、作業台があった。その上に、整頓された大量のパーツ群。本棚には資料が整然と収められている。——部屋の主は、几帳面な人格らしい。

机の上には、綺麗な額に入れられて、一枚の写真が飾られていた。

緑色の髪少女が二人、肩を寄せ合うようにして写っている。

ひとりはおとなしく、そして、ひとりはまぶしいほどの笑顔で。

「雷真、奥から人の心配がします」

夜々のささやき声で我に返る。

見ると、突き当たりの壁が四角く切り抜かれ、奥の部屋へと続いていた。

夜々が猫のように足音を殺し、素早くそちらへ移動する。

奥の部屋は休憩室——と言うか居住空間になっていた。

ソファがあり、食器棚があり、テーブルセットがある。クローゼットまである。噂通り、部屋の主はここで生活しているらしい。

夜々はソファの向こう側に回り、ぎくつとして飛び上がった。

雷真はとつさに身を乗り出し、ソファをのぞき込む。

そして、息をのんだ。

ソファの上で、白衣の美少女が眠っている。

地毛なのか、染めているのか、緑色の髪はエメラルドのようにきらびやか。

あとけない寝顔は、つややかな肌と相まって、赤ん坊のように幼く見える。白衣を着て

いるところを見ると、研究室所属の学生だろうか。

その顔つきには見覚えがある。

先目ぶつかった、あの自動人形——エヴァンジェリンにそっくりだ。

ただし、こちらは「人間の気配」がする。くーくーという寝息が可愛らしい。

(こいつ……さっきの、写真に写ってた子だな)

気配を感じたのか、「うん……」と女子学生が目を覚ました。

はけーっと数秒。雷真と夜々を交互に見て——

「あれ……王子さま？」

「誰がだ。寝ぼけるな」

「雷真を白鳥の王子さまだなんて……この女狐……っ」  
「わっわ」。

「落ち着け夜々ー 地震を起こすなー」

女子学生がむくりと起き上がる。その拍子に、白衣のボタンが外れた。

はらり、とはだけた白衣の下に、雷真と夜々はそろって石化した。

白衣の下は、全裸だった。

雷真はあわてて目を背けたが、残像が脳裏に焼きついてしまっていた。うす桃色とか、肌色とか——乙女には不似合いな鉄の色とか。

乙女の胸の下、みぞおちのあたりに、時計のような機械がくつついていた。もつとも、そんな部分を凝視している余裕はない。雷真は目を覆って、

「何てかつこうだ！ 下着くらいはけ！」

「あー、お風呂ですよいいアイデア思いついちゃって、すぐ作業を始めたんだった」

「いいから何か着ろー せめて隠せー」

「でもこれ、快適なんだよ。またお風呂に入りたくなったとき、すぐ入れるし」

肌を見せたまま、にこにここと屈託なく笑う女子学生。

どこか……否、全体的にズレまくっている。

ふと、あまりにも強烈な殺気を浴びて、雷真の背筋が凍りついた。

「雷真……そんなに裸が見たいなら、夜々の方を見てくださいっ夜々の方を！」

夜々が泣きながら胸をはだけ、見せつけようと迫ってきた。

前門のトップレス、後門の露出狂。



何だかわからないが、ある意味で地獄絵図だ。雷真は悲鳴をあげた。

「あはは、ごめんごめん。もういいよ」

無邪気な声が無為な力比べを中断させる。

見ると、白衣の前をきっちり合わせて、女子学生が笑っていた。

ボタンを留めただけに見える。ということは、その下は……。

「で、君は誰かな？」

「……赤羽雷真だ」

「雷真くんね。日本人だね」

「日本語の発音、上手いな。あんたは？」

「あれ、知らないの？ 知らないのに、どうしてここにきたの？」

「どうしてって……俺は教授に用があつて」

えへん、と胸を反らし、とんとん、と自分の胸を示す。

胸裏に先ほどのうす桃色がフラッシュバックして、雷真はあわてて目をそらした。そら

した先には半笑いの夜々がいて、雷真は急いで女子学生に向き直った。

女子学生は胸を指したまま、誇らしげに胸を張っている。

「……何やってんだ？」

がく、とコケる女子学生。

「だから、私だよ、私。私が私で私なの！」

「……はあ」

「イオネラ・エリアーデー」

「……はあ——あ!？」

文字通り、雷真は飛び上がった。

「まさか……あんたが……エリアーデ教授？」

「そうだよ」

「いや、ないな。ないない。大体、あんたいくつだよ」

「ええと、十七……だったかな？」

「俺と同じじゃねーか。そんな年で教授だなんて……」

「赤羽雷真くん」

きりつと急に顔を引き締め、威厳あふれる声音で言う。

「ヴァルブルギス王立機巧学院の主義を言ってこらんなさい」

「……実力主義」

「正解」

ふわっと笑みをこぼし、子どもっぽい女子学生——否、教授は言ったのだ。

「私の研究室へようこそ。用件は何かな、雷真くん？」

雷真は——夜々も——唖然として、彼女、イオネラの顔を凝視した。

## 4

機巧都市の大通りは、人波でごった返していた。

通りには出店が並び、道化が見せ物を始め、仮装した行列が練り歩く。ブリキの自動人形がドーナツを売り、巨人型の自動人形が荷台を引く。

機巧の楽隊が華やかな音楽を奏で、お祭り気分を盛り上げている。

その通りを、一台の箱型自動車が徐行していた。

装飾のないシンブルな外観だが、カーテンの隙間から見えるのは、贅を尽くした内装だ。布張りのシートにレリーフの施された内壁。一見して、王室のそれとわかる。

車内には運転手のほかに、若い男女と、初老の男が座っていた。

特に目を惹くのは若い男。顔の造作は端正で、美青年と言っていだらう。長いまつ毛の下には濃黒の瞳。その髪も、衣装も、オブシダンのペンダントまで、見事に黒一色で統一されている。

そのとなりには無表情の少女。緑色の髪が特徴的だ。本物の人間を模して、極めて精巧に作られている。顔はイオネラ・エリアードとური二つ。



黒ずくめの美青年はカーテンをめくり、対面の男に笑いかけた。

「見なよ、將軍。どっちを向いても人形、人形だ。ウンザリするぜ」

「見事なものではありませんか」

將軍は洪みの深い、低い声で答えた。

「ヴァルブルギスの学び舎を我が祖国が擁すること、私は誇りに思います。世界各国から、優秀な頭脳と最新技術が集まっている。これは大変名譽なことです」

「そう、それだ。第一に、その学院がよくない」

青年は美しい顔を歪め、せせら笑った。

「なぜ帝國が大学ひとつ満足に支配できないんだ？ 自治権を盾に、あんな男に好き勝手やらせている？ 信じられるかい、將軍。ラザフォードは国費で研究を進めながら、その果実を独り占めしてゐるんだぜ？」

ラザフォードの名を出すとき、青年は特に皮肉げに將軍を見た。

「このエクスポにしたってそうさ。毎年毎年、各国の最新技術が集まるつてのに、指をくわえて見ていただけなんて、愚かなことだと思ふだろう？」

「お控えください、殿下。誰かに聞かれましたら——」

「ケツの穴が小さいな、英雄グレンダン將軍ともあろう男が」

「ケツ……」

將軍は目を丸くした。高貴な聲から飛び出した、下品な単語に驚きを隠せない。  
咳払いして気を取り直し、続ける。

「この大英帝国で開催されていることこそ、名誉と言えましょう。我が主、我が君、我々が陛下は公正なお方——陛下に野心がなければこそ、魔術師協会も英国での開催を認めているのです。それゆえ、陛下のご威光は天下に轟いております」

「笑止だな。名誉で何ができる？ 腹でも膨れるのか？ 機巧魔術？ つまらない手品さ。親父には世界を統べる力なんてない。わかりきったことじゃないか」

「殿下……？」

「だから俺は親父に言つてやったのさ。今すぐ俺に王位を譲る度胸はあるかい？ 俺を王にすれば、大英帝国が世界を統べる時代がくるぞ、とね」

「……陛下は何と？」

「貴様にくれてやる玉座はない、とき。王の腰が退けてりや帝国に未来はないな。だから俺が変えてやるのさ」

青年は暗い笑みを口元にたたえ、翳った瞳を將軍に向けた。

「機巧魔術つてのは、それほど便利なものかい？」

「……不遜ながら、これに勝る力はありませんまい」

將軍の肩から、青白い魔力が立ちのぼっている。それは糸のように寄り合わり、運転

手の背中に流れ込んでいた。

この車の運転手は、將軍の自動人形なのだ。

こちらでも人間そっくりだ。軍が支給する量産品ではない。名のある人形師が生み出した名機。搭載している魔術回路も最新のものだろう。

將軍の態度を見て、青年は笑い出した。

「はつきり言うね。おまけに傲慢だ。この俺を押さえ込めるところなんか、特にね。いいぜ、気に入ったー」

ばんばんと膝を叩き、上機嫌で言う。

「もつとも、機巧魔術が使えるようが使えまいが、どのみち弱腰ではいられないんだ。帝国の放任主義がラザフォードをつけ上がらせ、研究成果の独占を招いている。このままじゃ宿敵フランスにも出し抜かれる。大熊ロシアの動きも気に入らない。新興国のアメリカも生意気だ。だったら、連中の技術を根こそぎ奪って、帝国のものにしてしまえばいい。世界に君臨すべきは大英帝国——いや、違うな」

ふつと、微笑む。

「この俺だ」

正気なのか。だが、青年の途方もない自信が、与太話に説得力を与えている。

將軍はごくりと唾をのみ込んだ。

こんな若造の、誇大妄想じみた話に、のまれてしまっている。

將軍はかろうじて、「……危険な思想です」と言った。

「ただいまのお言葉、お父君にお伝えしますが、よろしいですか？」

「いいとも。だが、もうひとつ選択肢があるってことを気に留めておけよ？」

「選択肢……ですと？」

青年はとなりの少女に手を伸ばし、そのあごをさりと撫でた。

「俺の側について、俺の世界救済を見守るっていうね。特等席を用意するぜ？」

「失礼ながら——お気は、確かなのですか？」

「確かさ。そして、君は俺の側につくのが正解だ。なぜなら、俺が正解だから」

いささかの躊躇もなく、言い放つ。

「俺とともにこい。かのラザフォードをして、ただひとり『対等の存在』と言わしめた男

——グレンダン將軍」

將軍は冷や汗を垂らしながら、青年の笑い声を聞いている。

魅せられたように目がそらせない。

大英帝国第一王子——（黒太子）エドマンドから。

雷真はまだ信じられず、言われた名前を繰り返した。

「エリアーデ教授……あんたが……？」

イオネラは屈託なく笑って、

「イオネラじゃ長いから、イオでいいよ」

「夜々だつて、長いから『や』でいいです」

「いや、対抗するところじゃないかな？ わけわかんなくなるからな？」

「もしくはマイハニーでいいです」

「さり気なく既成事実化するな」

ふと、イオネラの双眸が妖しく光った。

「面白い子だね。この子は誰かな？」

「夜々は雷真の妻です」

「結婚した覚えはない」

「じゃあ内縁の妻です」

「自動人形だね」

確信をもって言い切る。雷真の本能が危険信号を発した。

鋭い。夜々の見た目も、思考能力も、人間とまるで変わらない。外見から断定するのは

難しい。それを一瞬で見抜いてしまった。

イオは何かにとりつかれたように、夜々の周囲をくるくる回りながら、まじまじと観察した。夜々が不気味そうに身を退くが、おかまいなしで接近する。

夜々の口をこじ開け、まぶたを引き上げ、そして、興奮気味にため息をついた。

「すごいね……何もかも人間そっくり！ マグナスくんの人形みたい！」

「あんなのと一緒にするな」

「——ひよっとして、君」

エメラルド色の瞳が雷真をとらえた瞬間、雷真はどきりとした。

鋭智あふれる哲学者のような面持ち。すべてを見透かすような目をしている。

背筋が凍る。まさか、こちらの意図を見抜かれた——？

「——赤羽雷真くんなのかな？」

雷真はずっこけた。

「あんた自身、そう呼んでたろ！」

「えへへ、回路がつかってなかったよ。で、雷真くん。ものは相談なんだけど——この子を読んでくれないかな？」

「——何？」

「代金はね、最低でも軍艦三隻ぶんくらいのお金を出すよ。私の年次予算なの」

「断る。こいつは大事な相棒だ。この世のすべての富を積まれたって譲る気はない」  
 夜々は感動し、瞳を潤ませた。

「雷真……♡」

「こいつを売り飛ばしたりしたら、硝子さんに合わせる顔がないからな」

「また硝子……硝子、硝子、硝子……っ」

「アレ……夜々？ 待て！ 落ち着け！」

首を絞められ、吊り上げられながら、何とか叫ぶ雷真。

「とっ、とにかく駄目だ！ 夜々は譲らない！」

「えー、ちょうだいー ちょうだいちょうだいちょうだいー」

「子どもかー」

イオネラは不満そうに下唇を突き出した。

「どうしても？」

「どうしても！」

「やっぱり……体を差し出さないとだめ？」

「差し出しても駄目だ！ つか、『やっぱり』って何だー」

「雷真……っ、いつの間に……そんな……そんなことを……!?」

「……っ、と謎の地震が発生する。雷真は震え上がった。

「何で夜々が必要なんだ！ あんたは凄腕の人形師だろ！ 自分の自動人形くらい、自分で造ればいいじゃねーか！」

「それはね、私が花柳齋先生の大ファンだからだよ♡」  
キラキラつと目を輝かせて、イオネラは言った。

「私、先生の本は全部持ってるよ。原文で読みたくて日本語もマスターしたの。ぜひ先生の作品が欲しかったんだけど、真作は全然出回らないし、欲しいのは国家機密レベルだしで、毎日枕を濡らしてたんだよ。それが今、目の前にあるなんて……ああ、ありがとう神さま！ そして雷真くん！」

「礼を言うな！ やるなんて言ってるじゃない！」

叫びながら、雷真は驚いていた。

（こいつ……どうして夜々が花柳齋ブランドだとわかったんだ……？）

その思考を察したのか、イオネラは釘を刺すように言った。

「今さら隠しても無駄だよ。この子は花柳齋先生秘蔵の傑作、《雪月花》三部作のひとつ、

《月》の自動人形だね。あゝ欲しい！ ちょく欲しい！」

エメラルドの瞳がらんと輝く。さすがの夜々も雷真の背中に逃げ込んだ。

雷真は警戒を解かず、注意深くイオネラにたずねた。

「何で、夜々が《月》だとわかる？」



「ヒントはいくつもあったよ。硝子しろうどっていうのは花柳斎先生かりやうさいの最近の通称だし、有機材料を多用するのは先生の作風、芸術的な魔術回路も透視できたし、その子はとっても力持ち。しかも、雷真かみまことくんの魔力を受けずに魔術回路を起動した——つまり禁忌人形ペンドリマだね。これだけ条件がそろっていれば、誰だつてわかるよ」

見事な洞察力。抜けているように見えるが、油断ならない相手だ。

イオネラは甘えるように体をくねらせ、

「花柳斎先生の技術を直ちよくに見てみたかったんだ。あ、悪いようにはしないよ。傷もつけないし、大事にするよ！」

「断る。こいつは俺の相棒だ！」

叩たたきつけるように言うと、すう、とイオネラの顔から表情が消えた。

「……後悔するよ？」

「させてみる。行くぞ、夜々やや」

「え、でも、雷真……」

「いいんだ。行くぞー」

任務の途中だが、どうにも不愉快で、雷真はイオネラの研究室を後にした。

どこかかと床を蹴りながら、乱暴な足取りで廊下を進む。

「待ってください雷真。何を怒ってるんですか？」

「わからねーけど……何か……頭にきたんだ。おまえを譲るの、譲らないの……モノ扱いしやがって……くそー」

夜々はまばたきして——ぼっと、頬を染めた。

「ふふ……ふふふっ」

「……何がおかしいんだよ？」

夜々は雷真の腕にまとわりついて、嬉しそうに言った。

「わかりません！ わからないけど、何だか嬉しいんです」

雷真の台詞を真似て言う。それから、

「病室に戻ったら、たっぷりサービスしますね！」

「断る！ 御免こうむる！」

「遠慮しないでください。いつものことです」

「嘘つくな！ 既成事実化するな！」

普段通りのやりとりが始まる。

しかし——平和は長くは続かない。

後悔……とはいかないまでも、雷真は閉口することになるのだった。



## Chapter 2 黒き者、誘う者



### 1

医学部へと戻る道すがら、雷真は不意に足を止めた。

「どうしたんですか、雷真？」

怪訝そうに振り向く夜々。雷真はイオネラの著書を振って見せ、

「図書館に寄って行く。こんな本、もう読まないからな」

夜々はなぜか嬉しそうにうなずき、先に立って歩き出した。

しかし、夜々の笑顔も、図書館の返却窓口で碎け散ることになる。

「ご返却の前に、自動人形をお預かりします」

窓口には、伊達眼鏡をかけた、白衣の少女がいた。

「……それで変装のつもりか」

雷真のツツコミを受け、急に挙動不審になる司書——と言うか、イオネラ。

「な、何のことかな？ 私は通りすがりの、何の変哲もない司書だよ？」

「司書が通りすぎるかー 図書館員にまで迷惑をかけるな！」

「迷惑なんてかけてないよ。ちよつと取り引きをただけだよ」

「いくらで買取したー そのそも誰を——って、あんたかフレイー」

窓口の奥で、ふわっと、しつぽのように揺れる真珠色の髪。

フレイはマフラーに顔をうずめ、豊満な胸の前で、もじもじと指をからめた。

「う……だって、ライシンの……恥ずかしい写真をくれるって……」

「そんなもんで買取されるな！ あと、そんな写真は撮られてない！」

フレイを叱り飛ばし、イオネラの著書を突き返して、雷真は窓口を離れた。

やれやれという気分で廊下に出る。

途中でもよおしたので、夜々を待たせて男子トイレへ向かう。個室に入り、ベルトを外そうとしたところで、鋭敏な五感が違和感を訴えた。

半眼を頭上に向ける。壁と天井のあいだに、双眼鏡のような器具を構えた、イオネラの姿があった。持っているのは、写真機か何からしい。

「……何やってんだ？」

「気にしないでいいよ。さっきの図書館員ちゃんとの約束を果たしてただけだから。それと、上手く撮れたら、雷真くんを脅すこともできるしね」

雷真は無言で壁を蹴った。壁板は大げさに揺れ、引つかかっていたイオネラを転落させる。落下の衝撃で白衣がめくれ、イオネラのふとももが露出した。

彼女は転んだまましばし考え込み、

「……私の恥ずかしい写真を撮って、夜々ちゃんと交換した方がよかつたかも？」

「よくないからな？　つか、しないからな？」

「まったくですー　言うに事欠いて、痴女まる出しですー」

「おまえが言うなよ夜々!?　おまえも出てけよ夜々!?」

夜々は反省するでも退出するでもなく、ぶりぶりと怒り出した。

「こないやらしい女狐と一緒にしないでください！　夜々は盗撮なんて破廉恥な真似はしません！　美しい思ひ出を心のアルバムにそつとしまいこむだけですー」

「燃やせ、そんなアルバムはー　あと、おまえの美意識は腐ってるー」

二人にげんこつを落とす、完全に追い出してから、雷真は急いで用を足した。

図書館を出て、医学部へと戻る。

学生たちで賑わうメインストリート。その真ん中に、おかしな人物がいた。

でん、と置かれたテーブルに、大時代的なロープ。そして水晶玉。

どうやら——占い師のつもり、らしい。

「これ、そんな学生よ……。そなた、凶相が出ておるぞ」

「……だから夜々を讀れつて？」

「左様——」

問答無用で、インチキくさいテーブルを蹴り飛ばす。

古い師が椅子から転げ落ちる。予想通り、と言うか何と言うか、めくれたフールドの下には、イオネラの顔があつた。

「むう……。どうしてわかつたのかな？」

「魔術世界の最高学府に、そんなうさんくさい辻占ツギウラい師がいるわけねーだろ」

「でも、ともかく大因ダイインだから、夜々ちゃんは私に讀るといいよ！」

「斷る——」

「でも、夜々ちゃんの意志はどうなのかな？」

「——なに？」

「雷真くんと一緒にいるより、私と一緒にの方がいいんじゃないかな？」

雷真は絶句した。夜々が飛び出して行つた、先日先日の一件が脳裏ノウリをかすめる。思わず夜々を振り返ると、夜々はきりつと真顔になつて、

「夜々は斷固カタとして、雷真のお側そばにいます。どんなときでも。いつまでも」

ガラにもなく感動する雷真。しかし、イオネラはあきらめず、

「でも、私のものになってくれたら、雷真くんをあげるよ？」

「本当ですか？」

「食いつくな！ あと、勝手に人を売り買いするな！」

「人間ひとりくらい、私の予算でどうとでもなるからね」

「じゃあ雷真を買ってくれるんですね？ もう一生、夜々のものですねっ？」

「人をモノ扱いするな！ 返せ俺の感動！」

かぶりつく夜々をイオネラから引きはがす。その拍子にイオネラが転び、ローブが脱げ、白衣のボタンが弾け飛んだ。

周囲の学生たちがどよめく。雷真は真ッ赤になって顔を背けた。

「いい加減、何かはけー！」

「ごめんごめん。普段、はかないからね」

「普段からはけー！」

「雷真~~~~~っ！ 夜々だつて！ 夜々だつて脱ぎますー！」

対抗心をむき出しにして、下着に手をかける夜々。

学生たちの動揺が大きくなる。女子学生はもちろん、男子学生ですら羞恥に頬を染めている。悲鳴があがり、大騒ぎになる——寸前、遠くでざわめきが起こった。

何だ、と思つて振り向くと、人だかりが割れて、輝く美貌の女子学生が現れた。

きらめく瞳は宝石のよう。貴族的な顔立ちに、線の細い体つき。帽子の上に仔竜こりゆうを乗せて、テレックス（暴竜）シャルロフト・ブリューがやってきた。

「何よ、こんなところにいたのね」

「……探してたのか？」

「ささ探してないわよ貴方あなたなんかー でも、ちょうどよかったわ。貴方には教えてあげる。実は、学院の――」

何事か言いかけ、止まる。ようやく、雷真以外のものにも目が向いたようだ。

雷真のとなりには、下半身丸出しのイオネラと。

脱げた下着を足に引っ掛けた、夜々がいた。

ぎざぎざ、と音がしそうな動きで、ゆっくりと雷真を振り向くシャル。

「……何を……してたの？」

温度が消えた声。まったく抑揚がない。

「誤解だー おまえが今考えてることは全部誤解だー」

「へえ……ふうん……そう……そういうこと……貴方あなたって、誰だれとでもそういうことしちゃうのね。こんな往来でも、平然とやつてのけるのねー」

「あり得ないだろー 何とか言ってくれシグムントー」

「雷真よ。個人の趣味嗜好しこうに口を出すのは野暮やばというものが……その、いささか、ハメ



を外しすぎではないか？」

「おまえまで俺をそんな目で!?」

「ねえ、シグムント。こんな変態野郎、掃除した方が宇宙のためよね?」

「なに? 待て、シャル——」

「ラストーカノン!」

## 2

「まったく、ひどい目に遭ったぜ……」

雷真はすすけた顔をタオルでぬぐい、皮のむけた頬に自分で薬を塗り込んだ。

医学部一階。入院患者用の病室。

ようやく戻ってきた雷真は、ベッドの上で傷の手当てをしていた。かたわらには夜々がいて、雷真に薬やガーゼを渡してくれる。

先ほどのラストーカノンは、かなり際どかった。石畳が蹠形もなく溶け落ち、人間大の大穴があいた。ほんの十センチずれていたら、雷真が蒸発していたかもしれない。暴風に吹き飛ばされて、全身、泥だらけの擦り傷だらけだ。

「まあいいや。それより、シャルのやつ、何か言いかけてたな?」

「はい。教えてあげるとか何とか……はっ！ まさか『私の本当の気持ち』なんて……ふふ、シャルロットさんたらお茶目……ふふふ……♡」

急速に開いていく瞳孔。わけがわからない。でも怖い。もうこの件には触れるまい、と心に決めて、雷真は話題をスイッチした。

「……で、何であんたまでいるんだ？」

さも当然という顔で、白衣の女教授がベッドサイドに座っていた。さすがにもう、白衣の下にも服を着ている。

「研究に戻りたいけど、仕方ないよ。雷真くんがわがままばかり言うからね」

「あんただろー あんたがわがまを——」

不機嫌そうな咳払いが聞こえて、雷真は怒鳴るのをやめた。

そう——となりのベッドには口キがいるのだ。

雷真が大人しくなると、イオネラは調子づき、しなだれかかってきた。

「もういい加減、あきらめた方がいいよ？」

「あんたがあきらめろー」

振り払おうとした瞬間、強烈な殺気を当てられて、雷真はぞくりとした。

殺気の発生源は、珍しく、夜々ではなかった。

「あ、フレイ……」

ランチのバスケットを抱えて、ドアの前に立つフレイ。

勝手に漏出したような魔力が、背後の犬たち——《ガルム》シリーズに流れ込んでいる。犬たちは一斉に牙をむき出し、敵意をあらわにした。

身の危険を感じる。雷真は場を和ませようと、笑って言った。

「と、図書館の仕事はどうしたんだ？ 誰かに引き継いだの——」

「いつの間に……教授とそんな仲に……ふえ……っ」

「違う！ 泣くな！ あんたが泣くと——」

案の定、大剣——ロキの自動人形ケルビムが飛んできて、雷真のベッドに突き刺さった。かわしていなければ、串刺しにされているところだ。

「俺は謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある」

魔力をみなぎらせながら、ロキは冷ややかに告げた。

「俺の自習を妨害する奴、姉貴を泣かすクソ野郎、そして貴様だ」

「要するに俺が嫌いなだけだろー」

あわやバトル勃発か、というタイミングで、誰かが病室に飛び込んできた。

「毎度うるせーぞー 病室で何を騒いでやがる！」

フレイを押しのけて顔を出したのは、黒ぶち眼鏡の常勤医クルーエルだった。

クルーエルは雷真とロキをにらみつけ——そしてイオネラに目を留めた。

しゅばっ、と姿が消える。ただの医者とは思えない、素早い動きで瞬間移動。驚く夜々の前をすり抜け、うやうやしくイオネラの手を取った。

「これはこれは、イオネラ・エリアーデ教授。お噂はかねがね。このしがないヤブ医者に、お食事をこー緒する榮譽をお与えくださいませんか？」

イオネラは何やら考え込み、

「うーん……してもいいよ？」

「さすが、話せる！」

「その代わり、私も入院していい？」

「もちろん大歓迎さ。ベッドはそのの、バカな日本人を追い出して空けましょう」  
雷真はあわてた。

「おいコラー！ 医者だろあんた！」

「黙れ疫病神！ むさくるしい野郎と美少女、どっちを優先するかなんぞ、万有引力より明らかな物理法則だろうが！」

「あんたの色欲を世紀の発見と同等に語るな！」

「治しても治しても怪我をこさえてくるようなバカは出てけー むしろ死ね！」

「大丈夫だよ、雷真くん」

にやっと笑って、イオネラが横から言う。

「ベッドは半分こしてあげるからね。今夜から一緒に寝ようね♡」

「だつ、だめです、そんなの！」

今度は夜々ややがあわてて叫ぶ。フレイも飛び上がり、たゆんつと胸を揺らした。がるるるつとうなる（ガルム）たち。ロキの血管がびくびくと脈打つ。夜々にフレイ、クルーエルまで参加して、さらにカオスな状態に突入する……かと思われたが。

ふと、荘厳な鐘かねの音が響いてきて、イオネラの様子が変わった。

午後二時を知らせる鐘。ただし、時計塔は再建中なので、仮設鐘楼かねとうの鐘だ。

「え、もうそんな時間？ ええと、ううんと……雷真らいまことくん、デートしよう！」

「……は？」

がーんつ、とショックを受ける夜々とフレイ——とクルーエル。

「自動人形オートマタエクスポ、見に行こうよ！」

「おい、俺おれは入院中だぜ？ それに、何でデートなんだ？」

「将を射るにはまず馬からって言うからね」

「俺は馬か。まあ、将と言ひ張るつもりもねーけどよ」

しばし、雷真は考え込んだ。夜々とフレイが何かを期待するような視線を向けてくる。

いや、期待すると言うより、脅迫するような視線だった。

その視線から逃れるように、雷真はクルーエルを振り向いた。

「外出許可が出るわけ……ねーよな？」

「当たり前だ。夜会の欠場許可を取り消すぞコラ」

「雷真くんも行ってもいいよね、クルーエル先生？」

「もちろんだとも。その代わり、ディナーは俺と一緒にだよ？」

「いいのかよ！ 止めてくれよ！」

クルーエルは雷真の襟首をつかみ上げ、おし殺した声で言った。

「黙れクソ野郎。こんな可憐なお嬢さんとデートできるなんてありがたく思えタコ。あと、俺より先に手をつけたらおまえの肛門を縫い合わせてやるからな」

「それが医者のお詞か！」

「じゃあ行こうか、雷真くん？」

雷真の腕を引つ張るイオネラ。夜々ががくと震え出し、フレイの髪が魔力を帯びて逆立つ。はつきり言つて怖い。雷真はあわててかぶりを振った。

「ちよつと待て。俺は行くとは言つてない」

「デートしてくれたら、単位をあげるよ？」

「それは嬉しい申し出だが、俺はあんたの講義を取ってない」

「大丈夫、夏休みに集中講義を持つから。工学関係の、八単位まで認定してあげる」

「……え、マジか？」

ぐらりと気持ち揺れる。劣等生の悲しいサガだ。

雷真（きみじま）の迷いを悟り、今度は夜々（やや）があわてた。

「だめです雷真—— そんな不正なこと——」

「不正じゃないよ。先生がちゃんと教えてあげるもん。手取り足取り、ね♡」

「ま、魔女です—— この女は魔女です——っ」

フレイが今にも泣き出しそうな眼で見つめてくる。ついでに、口キも侮蔑（ぶべつ）的な眼を向けている。姉弟の視線を重く感じながら、しかし、雷真は言った。

「わかった。行こう」

「ひどいです雷真—— 夜々がどうなってもいいんですかつ？」

「ライシン……外道……欲ボケ……ごーかんま——」

「一緒に街歩きするだけで、何でそこまで言われなくちゃならないんだ——」

このまま黙って行動を起こすのはいろいろな危険だ。

雷真は夜々とフレイの頭を抱え込み、とりあえず、二人には耳打ちした。

「夜々、これは任務のうちだ。それに、街に出るってことは……わかるだろ？」

「あ……はい。そうでした」

「フレイも。詳しくは言えねーが、もっと俺を信じろ。怪我が治りかけの大事な時期に、俺が下心で女と出歩くわけねーだろ」

それで、二人は納得したらしい。

「う……信じる」「わかりました雷真」

「先に寝てていいぞ、今夜は帰ってこないからな」  
びきつ、と二人の表情がひび割れる。

「今のは俺が言ったんじゃないー こらイオ、他人の台詞を捏造するな！」  
くすつと悪女つばく笑うイオネラ。

雷真は頭痛を覚えた。果たして、無事に明日の朝陽を拝めるだろうか。

だが、イオネラと一緒にいれば、あきらめかけた任務を果たすこともできる。

「そうすりゃ、硝子さんにも顔向けできるしな……」  
という独り言は、バツチリ夜々に聞こえていた。

「また硝子ー」

雷真はベッドから飛び降り、イオネラの手を引いて、病室から逃げ出した。

## 3

「でけえ……！」

雷真はぼかんと大口を開けて、その威容を見上げた。



リヴァプールの駅前広場に、鋼鉄製の巨大な物体が鎮座している。

「何だこれ。硬式飛行船……？」

「近いけど、違うよ。艦艇カテゴリーは〈陸上戦艦〉だね」

イオネラが最初に見せてくれたのは、フランスの戦艦ダイダロス。陸上戦艦と謳（うた）っているが、浮揚して航行するため、洋上を移動することもできる。国威高揚のためか、あるいは大英帝国への牽制（けんせい）か、エクスポに持ち込んでいたようだ。

「何でこんなもんが、自動人形の祭りに——」

「ああ、これ、自動人形だよ」

思わずイオネラを振り返る。一瞬、彼女の言葉が理解できなかった。

「だが……自動人形っていう次元の存在じゃねえぞ……？」

「そうじゃなきゃ、外国の博覧会になんか寄越さないよ。浮力はガス囊（うぶ）で、推進力はプロペラで得てるんだけど、機関制御用のコアユニットに〈イブの心臓〉を使ってるんだよ。何とかっていうイギリス人技師が造ったらしいんだけどね」

「何とかって……誰だよ」

ほんの一瞬、意味深長な間があった。イオネラは舌を出して、

「忘れちゃったよ」

嘘（うそ）だ。

だが、問い詰めることはしない。

雷真は話を打ち切り、ダイダロスを手始めに、祭り見物（お祭り見物）を開始した。

大通りはいつにも増して活気づき、露店や出店から景気のいい呼び込みが聞こえてくる。妹と行った両国の花火大会を思い出し、少々、しんみりした。

「お外に出たの、久々だよ」

イオネラが目差しに目を細める。そうしていると、天才的頭脳を持つ教授でも、露出狂でもなく、ごく普通の——同年代の少女に見えた。

「ねえねえ、雷真くん。あれ買って」

くいくいと雷真のそでを引き、チュロスの屋台を示すイオネラ。

「自分で買え。軍艦を買える女が何ねだってんだ」

「わかってないな。男の子に買って欲しいんだよ」

雷真はしぶしぶ財布を取り出し、チョコレートがけのチュロスを買ってやった。

「ほらよ。これで満足か？」

「うん。雷真くんの評価がDからCマイナスに上がったよ」

「Dって落第じゃねーか！ 俺は（不可）だったのか！」

「退学でもいいくらいだよ。夜々ちゃんをくれないんだからね」

「どこまでも自分本位だな！」

いい加減、喉のどがかれてきた。今日は朝からツツコミ通した。

しかし、にこにここと楽しげなイオネラを見ると、怒っているのもバカらしくなる。

雷真もろしんは苦笑を浮かべ、改めてイオネラを眺めた。

緑がかった髪は、少々珍しい色合いだ。子どもっぽい表情とは裏腹に、ときどき知性を宿す瞳ひとみ。もう何年かしたら、すごい美人になりそうだ。

そして、白衣の上からは「ない」ように見えて、実はそこそこの――

「ん？ 急にそっぽを向いて、どうかしたのかな？」

「ど、どうもしねーよ」

「私の裸を思い出したのかな？」

「無駄に鋭いな！ わざとやってんじゃねーのか！」

「おおっと、学生さんーサーボ機構ならウチの工房が世界一だよー」

ふと、横から声がかかった。

雷真はまったく興味がなかった――そもそも「サーボ機構」とやらを知らなかった――のだが、イオネラはそちらに向かい、じつと商品を眺めて、すぐに戻ってきた。

「だめだね」

はむはむとチュロスを食べながら、ぼつさり切る。意外とシビアだ。

「パーツが大味すぎるよ。頑丈ガッチリそうだけど、人間型の自動人形オートマタには向かないね。市内にも、



「ここより腕のいい職人さんはたくさんいるよ」

「……よくわからないが、このあたりは何売ってるんだ？ 部品？」

「いつしか菓子の屋台は減り、機械部品を売る天幕ばかりになっている。

パイプを組み合わせたような塊に、歯車ぎつしりの箱、コード類。どこがどう自動人形に關係しているのか、いまひとつピンとこない。

「んとね、雷真くん……じゃない、おバカさんでもわかるように言うと」

「言い換えた意味ないからな？　むしろ悪意的な言い換えだからな？」

「さっきの店は自動人形の〈筋肉〉を、そっちの店は〈関節〉を、奥のは〈血管〉を作ってる工房さんだね」

「人形そのものは売ってないのか？　だって、こいつら人形師なんだろ？」

「この地区には毎年、パーツ専門の工房が集まるんだよ」

雷真は混乱してきた。雷真が知っている〈人形師〉は、部品の削り出しから組み立て、魔術回路のプログラムまで、全工程を自分で行う。赤羽の人形師もそうだったし、硝子もそうだ。西洋でも、名のある人形師はそういうスタイルをとっている。

「よくわからないって顔だね。じゃあ、あっちへ行ってみよう」

イオネラに手を引かれ、表通りの方に出る。

そちらには、ずらりと人形が並べられていた。

男性型から女性型、巨人型、動物型、さまざまな人形が売られている。

ただし、どの人形も『生きていない』ように見えた。

髪も瞳もなく、服も着ていない。もつと言えば、魔術回路を搭載していない。ヘイブの心臓があるべきところは、ぼっかり空洞になっている。

「このあたりは、〈素体〉専門の工房が多いよ」

「要するにボディだろ？　いろいろあるけど、何か違うのか？」

「ははあ……雷真くん、人形のボディを『魔術回路のイレモノ』くらいに思ってるんだね。結論から言うと、全然違うよ。スペック表がついてるから、見てごらん」

商品につけられた紙切れを示す。

紙切れには、わけのわからない数字と文字の羅列が書き込まれている。

「親和しやすい魔力の型とか、制御に必要な魔術プログラムの形式が書いてあるんだよ。もちろん、基本的な性能も書いてあるけどね」

「この人形、さっきのパーツを組み立てたのか？」

「そういうのが多いね。部品まで自分で作るような親方は、最近は少ないから」

「何つーか……手抜きっぱいな」

「それは違うよ。どんな回路にも対応できる——そういう『ブレイン』な素体を用意するのは大変なんだよ。部品ごとの相性もあるしね。心臓に合わせて、『専用』に作った方が

本当は楽。これはこれでプロの技なの」

よくわからないが、人形師の業界にも、いろいろあるようだ。

「そもそもだね、みんながみんな、一点ものの人形を作らせてもらえるわけじゃないの。無名の親方なんか、下請け孫請けで大変なんだよ」

「……何か、世知辛い話になってきたな」

「花柳斎先生みたいに、パーツから全部手作りするのは、とつても大変な上に、すつごくお金がかかるからね。私だって、ゼロから作ったのは一度だけだよ」

改めて、花柳斎という人形師のすごさを知った。気の向いたときだけ人形を作り、その人形が途方もない金額で取り引きされる。気に入った客にだけ売ればいい。芸術家と同じで、そんな境地に到達できる者は、ほんのひと握りなのだ。

「あ、雷真くん。あつちにはソフト工房のテントがあるよ」

示された店では、色とりどりの球体が売られていた。

ガラスケースや化粧箱に入れている。そこらのパーツとは扱いが違う。

魔術回路だ。イオネラが売り子からサンプル品を受け取り、魔力を練る。

目を閉じ、集中。さすが、と言うべきか。自動人形のサポートもなしに、魔術を発動。

一瞬後、ぼうっ、と魔術の火がともった。

「これはいい回路だね。変換効率がいいよ」

「あら！ お嬢ちゃん、目が利くのね！ わかる？」

「教授だからね」

目を丸くする売り子に回路を返し、イオネラは再び歩き出した。

「あんたも魔術師なんだな」

「人形師だって、少しは魔術が使えないと、テストできないからね」

言われてみると、硝子も普通に魔術を使っていた。

「だが、あんたの研究室に稼働中の自動人形はいなかっただろ。だから、あんたは造るのが専門なのかと思ってさ」

イオネラはまじまじと雷真の顔をのぞき込んだ。

「案外、よく見てるね。雷真くんの評価がCプラスに上がったよ」

「そいつはどーも」

「私にはね、ポリシーがあるんだよ。私が扱う自動人形は、常に一体だけなの。その一体に、めいっばいの愛情をかけてあげたいからね」

「……どうしてだ？ 複数いたって、愛情はかけられるだろ？」

寡作で知られる硝子でさえ、雪月花の三姉妹を連れている。

イオネラはちよつと暗い顔をして、つぶやくように言った。

「……比べられるのは、誰だって、嫌だからね」



その理屈は——わかる。

雷真は常に比較されていた。兄と。そして、妹と。

それが嫌で、別の道に進もうとした。

自動人形であつても、意思を持つ存在ならば、きつと——

「……それで、あんたが今扱つてる『一体だけ』の自動人形はどこなんだ？」

「注文してくれた人にあずけてあるよ。もし先方が気に入ってくれたら、もらわれていくの。……そして、私はまた、別の子を組み立てるよ」

「あんまり嬉しそうじゃないな？」

「まあね……娘を嫁に出す父親の気分……かな」

「母親だろ」

「……お母さんだけど、世のお母さんたちほど割り切れないよ」

「嫌なら手元に置いとけよ。あんたは、商売でやつてるわけじゃないんだろ？」

「だめだよ」

イオネラは真顔になり、自らに言い聞かせるように言った。

「それは私のエゴだもの。その子が一番輝けるところに、行かせてあげないとね」

雷真の願望に、エヴァンジェリンの姿がかすめた。イオネラと並んで写っていた、あの写真も。ひょっとして、彼女が「ゼロから作った」自動人形、「一体だけ」の自動人形と

いうのは……？」

「そういや、あんたって何を研究してるんだ？ 魔術回路か？」

イオネラは虚を突かれたような顔をした。それから、不満げに頬を膨らませた。

「てゆか雷真くん、それ知らないで私の研究室にきたの……？」

「あんたの本を読んだんだけどよ、全然わけがわからん。意味不明だな」

「意味不明——」

衝撃を受けたようだ。むすつとふてくされ、ぶつぶつと言う。

「いま研究してるのは魔術回路じゃないよ。魔力のトランサー、変換伝導体だね」

「変換……何？」

「術者の魔力が回路によって魔術に変換されるとき、その発動形質を維持したまま、量的フィードバックを拡大させる——」

雷真が呆けているのを見て、ため息をつく。

「んー、ごく簡単に言うとな、弱っちい魔術師でも、大魔術師なみの魔術が使えるようになる……ような仕組み」

「……それって、すごいことなんじゃねーか？」

「すごいんだよ。魔力のインプットが少なくても、内部で思いつきりブーストかけて、すごい放射量だと回路に錯覚させて、変換量を跳ね上げるの」

「それって、簡単にできるのか？」

「できたら誰も苦労しないよっ——もう、雷真くんの評価はEだね！」

「（不可）より下にするな——」

「単純なブースターは既に実用化されてるけどね。でも、魔力の量を無理に増幅したって、回路のコントロールが難しくなるだけで、魔術は上手く発動しないの」

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

「雷真くん、評価E——」

「そこまで下げるのか——」

「雷真くんだってやってるはずだよ？　ある程度までなら、回路は自動人形自身がコントロールできるでしょ？　でも、本当に複雑で、高度な魔術は、魔術師が回路を把握して、コントロールしなくちゃならない」

そう、たとえば、小紫の魔術回路（八重霞）。相手の感覚を騙すだけなら、小紫ひとりでもやれる。だが、相手の積極的な「探知」——アクティブセンサーを無効化するには、使い手のコントロールが必要だった。

小紫が扱いやすい形に魔力を変質させ、受け取りやすい形で転送しなければならない。言わば、人形使いと人形の共同作業だ。

一方、夜々に関して言えば、雷真はかなり高度なことをやっている。

強度を高めるだけでなく、瞬発力を増したり、筋力を強めたりもする。しかも、それを複雑な武術の動きと同時にやっている。そんなことができるのは、夜々との訓練を通じて、こんどやるとき（金剛力）の魔術回路を把握しているからだ。

「魔力は大きいだけじゃダメなんだよ。個々の要素を分解して、クリアな状態をたもつたまま、拡大しなくちゃいけないの。オーケストラにたとえるなら——各楽器の音を、別々に大きくしなくちゃいけない。たったひとりでね」

人形使いは指揮者だ。だが、演奏も担当しなければならぬ。

「しかも、演奏を失敗しちゃうだめなの。魔術が発動しないからね。それに、特定の音だけが大きくなっちゃったり、特定の楽器だけ音が大きくなっちゃっても、音楽は壊れちゃうでしょ？ 魔術も同じだよ」

「それをあんたの研究が可能にするのか……」（紅翼陣こうよくじん）と同じ理屈だな」

「コウヨク？」

一瞬、雷真は返答をためらった。……が、今さら隠す必要もない。赤羽一門あかばねは既に滅亡しているのだ。今さら、一族の秘術ひじゆつもくそもないだろう。

「表現は違うが、一族の奥義書おくぎしょに、同じようなことが書いてあったんだ」  
がしつ、とイオネラは雷真の腕を抱きかかえた。

ばによん、とふたつの何かに挟まれて、雷真の血液が逆流した。

「それは興味深いね。ぜひ、詳しく話してくれないかな？」

「話すー 話すから手を放せー」

「あ……」

見る見るうちに、イオネラの顔に落胆の色が浮かんた。

「詳しく聞きたいけど、着いちゃったよ……」

いつの間にか、二人は街の中心部、噴水の広場に出ていた。

広場の外周は露店が理め尽くし、噴水の前には人待ち顔の人々が立っていた。

その中に、見知った顔を見つけて、雷真はぎょっとした。

「あれって、理学部のラドクリフ教授じゃねーか？」

「やつはー、ラディ」

「遅かったじゃないか、イオ。もう三時は過ぎてるぞ」

ラドクリフ教授の穏やかな瞳がこちらを向いた——途端、雷真の背筋がびんと伸びた。

ラドクリフ教授の《機巧物理学演習》は落第寸前なのだ。

「ほう、ライシン。君が一緒だったのか」

「あ、ああ……」

「えへへ、デートなの」

「ちょ……誤解を招くだろー」

「そういう仲なのかね？」

「違うー」

「恋人だよ。だから何でもくれるの。花柳斎先生（からやうさい）の自動人形（オートマトン）とか♡」

「やらないぞ!? あと恋人でもない！」

「まあ、彼女のような変人を相手にするのは大変だろうが」

ラドクリフは苦笑しつつ、

「ともかくだ、イオ。先方はとうにお着きなんだ。急いで行こう」

「じゃあ雷真くん、ここで待っててくれるかな? ちょっと人と会ってくるからね」

「あ? ラドクリフ教授に会いにきたんじゃないのか？」

「別の人。ラディと一緒に行くんだよ」

予感——だろうか。一瞬、キナ臭いものを感じた。

だが、劣等生の雷真が教授二人に何か言えるわけもない。雷真は無言でうなずき、ふらふらと頼りなく揺れる、イオネラの白衣を見送った。

#### 4

その広場を、石造りのバルコニーから見下ろす者がいる。

古民家を改造したバー。二階のバルコニー席に悠然と座り、優雅にワイングラスを傾けているのは、髪から衣装から装飾品まで、見事に黒づくめの貴公子だ。

バーは貸切になっていて、英軍の兵士たちが詰めている。彼らが運んでいるのは機巧の犬たち。全身が無機材料で作られた機械犬だ。落ち着かない様子のマスターが、しきりに貴公子の方をうかがっている。

貴公子の右手には将軍が、左手にはドレス姿の乙女が立っている。乙女は無表情で、まばたきもせずに、はるか遠くを見つめていた。

そこへ、ラドクリフ教授に先導されて、白衣のイオネラが入ってきた。

「遅かったな、イオ。俺を待たせるとは大したもんだ。この——世界の王をさ」

「……王？ 遅れてすみません、エドマンド殿下」

「まあいい。おまえは俺を王にしてくれる、女神さまだ」

イオは首をひねりつつ、

「私のエヴァンジェリンはどうでしょうか？」

「ああ、こいつか？」

左手の乙女を見上げる。

彫像のように立つ乙女。その硬さに、イオネラははっとしたようだ。

何かトラブルがあったのだろうか？ だが、エドマンドは上機嫌で、

「卓越<sup>エグゼレント</sup>、だ。期待以上と言っている」

「本当ですか？　じゃあ、研究は成功なのかな？」

「ああ、もちろん」

「じゃあじゃあ、エヴァが世界を救えるかもしれないってことですね？　世界大戦を食い止めることができる——そういうことですねっ？」

「どっちもイエスだ。だが、世界を救うのはエヴァじゃない。この俺さ」

「……殿下？　さっきから、何をおっしゃって」

イオネラは怪訝<sup>コウゲン</sup>そうに眉<sup>まゆ</sup>をひそめ——そして、決定的な異変に気付いた。

「エヴァが変……おかしい！　こんな、ただの機械<sup>キカク</sup>みたいな……」

そして、さらに気付く。まったく動じていない、エドマンドの姿に。

つまり、エヴァの異変は事故やバグによるものではなく——

「殿下！　エヴァに何をしたんですかっ？」

「骨が折れたぜ。並みの人形師じゃあ、解析もままならないからな」

笑いながら、自らの仕業であることを認める。

「なに、ちよいとりミッターを外してやったのさ。おまえが仕込んだ、いらぬ足かせの数々をな。それから、ようやく昨日の夜、少し利口にしてやれた。感情なんていう余計なプログラムで、無駄な容量を使う必要もない」



イオネラは愕然とした。

だが、すぐさま我を取り戻す。眉を吊り上げ、毅然として叫んだ。

「エヴァを返してくださいー 今すぐ！ エヴァが壊れちゃうー」

「なあに、おまえの定義で言えば、とつくに壊れているさ」

エドモンドは皮肉げに唇を歪め、残酷な事実を口にした。

「こいつはもう、おまえのことなど覚えていないし——俺の命令しか聞かない」

乙女の肩を抱き寄せ、なめらかな頬に舌を這わせる。

自動人形の乙女は微動だにせず、されるがままだ。

イオネラはたまらない気分になり、顔を背けた。

「おまえも俺のもとへこい。可愛がつてやるぜ、イオ」

「……何をおっしゃっているのか、わかりません」

「俺の栄光をおまえの魂に刻みつけてやる——そう言ってるのさ」

「わかりませんー エヴァを返してー ラディも何とか言つてよー」

ラドクリフを振り向き、そして、イオネラは立ちすくんだ。

ラドクリフはにこやかに、穏やかに微笑んでいた。

「殿下のおっしゃる通りにしなさい。それが君のためだよ、イオ」

強烈な違和感。得体の知れない恐怖がイオネラを衝き動かした。

反射的に椅子をつかみ、ラドクリフのこめかみに叩きつける。

椅子の脚が折れ、床に散らばる。しかし、ラドクリフはびくともしなかった。

打たれた部分は赤くもならない。ただ、皮膚の一部が裂け――

下から、金属の骨格がのぞいていた。

「自動人形……!?」

「そう、そいつは俺の人形さ。前回おまえと会ったとき、ラディアン・ラドクリフ教授にはご退場いただき――人形と交替してもらったんだ。俺の誘いをすげなく断ったあげく、余計なことをラザフォードに告げ口しようとしたんでね」

ふるっ、とイオネラの足が震えた。

そつと視線を返らせる。

兵たちも、将軍も、エヴァも、冷ややかな眼でイオネラを見ている。

今この場に、イオネラの味方はただのひとりもない。

「おまえはラドクリフよりお利口さんだ。そうだろ、イオ？」

勇気を振りしぼり、仔ウサギのように震えながら、イオネラは叫んだ。

「エヴァを返して！ 私はエヴァを修理する！ 元通りにするんだよ！」

「聞き分けがないな。じゃあ、ひとつ、面白いものを見せてやるよ」

エドマンドは肩をすくめ、座したまま魔力を練った。

大した出力ではない。ほんの軽く、ささやく程度に練った魔力だ。だが、それはエヴァに流れ込んだ瞬間、変質した。

空気が震える。いや、引き裂かれる――

エヴァが胸に手を添え、小さな唇を開く。

高らかに響き渡る、澄みきった歌声。

哀切を帯びたそのメロディが、破壊的な振動を生み出した。

脳髄を揺さぶるような、凄まじい衝撃。いや、建物は揺れていない。魔術師や自動人形だけが感知できる、魔力の波だ。津波のごとく広がっていく。

うす目を開けて、イオネラは外に目を凝らす。

やがて、とおん……、と低い音が響き渡ったかと思うと――

唐突に、陸上戦艦ダイダロスが浮上した。



## Chapter 3 絶対王権



### 1

「頭にくるわねー 何よあいつー あのバカー 変態ー」

シャルはずんずんと、前のめりになって通りを歩く。

「あんなひと目の多いところで……女の子をふたりも説がせて——って、もちろんひと目がなければいいってわけじゃないわよー」

前に行く男子学生に肩がぶつかり、相手が「がくんっ」とつんのめった。

ぎろっ、と一瞥をくれると、男子学生は一目散に逃げていった。

シャルの帽子の上で、シグムントが論すように言った。

「落ち着け、シャル。ほどほどにしないと、また嫌われ者に逆戻りだ。雷真がほかの少女と仲良くしていたのが気に食わんのだろうが——」

「ちち違わよー 大変な誤解よっ！ 私に別に……そんなんじや……」

こによこによと声が小さくなる。言葉とは裏腹に、耳まで赤くなっている。

「あああん、もおおお……っ！」

シャルはとすとすと地面を蹴った。腹立たしくて、恥ずかしくて、もうわけがわからない。危険を感じたのか、通行中の学生たちが一斉に離れていく。

「待て、シャル。……あれを見ろ」

シグムントの声音が変わる。シャルははっとして顔を上げた。

「……あれは、マグナス？」

右手、木立ちを挟んだ裏通り。連れ立って歩く二人の男が目に入る。

手前にいるのは、銀の仮面をつけた男子学生。その奇抜な格好は、間違いなくマグナスだ。奥にはマグナスよりも頭半分ほど大柄な偉丈夫。普段見かける礼装ではなく、ごく普通のスーツに身を包んだ——学院長だった。

「学院長も一緒か。どうやら、祭典に向かうようだな」

「視察……ってことかしらね。でもちよつと様子が変じゃない？ 学外に出るにしては、警備がないし、マグナスを連れているなんて」

「マグナスの自動人形も見当たらん」

「学外には持ち出せないから、でしょう？ でも、だったらどうして、マグナスじゃなく警備を連れて行かないのかしら」

「……シャルよ。ことによると、街で何かが起こるかも知れん」

「何かつて？」

「戦闘だ」

「——え？」

「警備を連れていないのは、邪魔になるからだ。警備の自動人形が、な」

そこまで言われて、ようやく、シャルは昨日見たものを思い出した。

寮から見えた、自動人形の行進。そして、シグムントの身に起きた異常。

あれが、誰かの手で意図的に引き起こされたものだとしたら？

その犯人を、目的を、学院長はつかんでいるのかもしれない。

「マグナスを連れて行くということは、彼は戦力になるということだ。おそらく——いざ

事が始まれば、彼の〈戦隊〉も動くだろう。〈戦隊〉は警備の安物とは格が違う。あの不

可解な魔術にも、あるいは対抗できるかも知れん」

シャルは何とも言えない気持ちで、去って行く二人を見送った。

何か、とてつもなく危険なことが起きようとしている……そんな予感。

「ともかく、戻りましょう。マグナスはライシンと因縁があるんだもの、あいつにも教え

てあげ——何であんなやつに教えてあげなくちゃならないのよ！」

シャルは勝手に怒り出し、再び乱暴な足取りで歩き出した。

学生たちが我先に道を譲る。シグムントはため息をつき、空を見上げた。

「……ひと雨きそうな空模様だな」

暗れていた空を包み込むように、地平線から黒い雲がわき出していた。

## 2

イオネラは呆然<sup>ぼうぜん</sup>として、遠くに浮かぶ陸上戦艦の巨影を見つめた。

ゆっくりと浮上している。もう、周囲の建物より高い位置にある。

回頭し、こちらに船首を向ける。くろがねの巨体から長い砲身がせり上がった。ハインチの大口徑砲、ダイダロスの主砲だ。

エヴァの透明な歌声はまだ響いている。

思考がぐるぐると回る。ボケているようで鋭いイオネラの洞察力は、既にエドマンドがしでかしたことを理解している。だが、認めたくなくて、イオネラは訊いた。

「殿下<sup>でんか</sup>……何を……したんですか……？」

「何を、だつて？ おまえがエヴァに搭載した魔術回路は何だった？」

「……（絶対王権）」

「おまえがその計画を持ち込んだときは驚いたぜ」

將軍を、兵たちを、ラドクリフを順に見やつて、エドマンドは肩を揺すった。

「誰に諮問しても『それは無理です』ときたもんだ。通常、相手に直接影響を与えるような魔術は使われない——まして、『敵性自動人形の支配権を奪うなど不可能です』ってな。なぜだかわかるだろ、將軍？」

「魔活性不協和の原理、ですな」

「そうだ。同一のボディに二つの魔術は共存できない——魔術による直接介入は、相手の魔術によって簡単に相殺されちまう。外部から侵入してくる魔術より、内部から発生する魔術の方が優先される——まあ、当然の理屈だな」

相手の人形を魔術で直接燃やすことはできない。だから、炎をぶつける。

相手の人形を魔術で凍らせることはできない。だから、冷気をぶつける。

それが機巧機關における常識、当然の思考だ。

イオネラの研究は、その常識を覆すものだった。

「誰もおまえの研究を笑った——だから、俺はおまえに賭けた」

エドマンドの黒い瞳が光る。イオネラは震え、エドマンドから目をそらした。

後悔が全身を支配する。私は、取り返しのつかないあやまちを犯した……？

「でもっ、殿下は……殿下は、私の思想を誉めてくださいましたー」

「そう、おまえは言った。争いをなくしたい、戦争を抑止したい、相手の武装を解除するために——戦わずに、殺さずに相手を無力化したいんだ、ってな」



「そうですー」

「そして、俺は賛意を示した。誓めてもやった。なぜなら、それが俺の理想だから。戦わずして勝てるなら、返り血を浴びることなく、世界の王になれる」

イオネラの膝から力が抜けた。その場にへたり込みそうになる。

「おまえの研究は素晴らしい。抵抗されるから使えない？　だったら、抵抗させなければいい。圧倒的な力で無理やり屈服させる——実に俺好みのやり方だ」

エドマンドはエヴァを抱き寄せ、低い声でささやいた。

「そして今、俺は木偶一体を動かす程度の魔力で、機巧都市を統べることができる」

その言葉を裏付けるかのように、下の広場では騒ぎが起こっていた。

自動人形がぞろぞろと、広場に集まってきている――

硬質の機械人形から、生物的な獣型。巨人に妖精、天使に悪魔。多種多様な自動人形がいる。今は自動人形エクスポの真っ最中。売りに出されていたものはもちろん、売り物ではない、各国自慢の展示品まで集まってきていた。

人形使いや商人たち、警備員たちが、人形を止めようと必死になっている。

だが、無駄だ。もはや、彼らの制御を受け付ける状態ではない。

エドマンドはゆったりと椅子にもたれ、かたわらの将軍を見上げた。

「どうだい、将軍。腹は決まったかい？」

「……派手にやりましたな。お忘れではありませんか？　ここは機巧都市リヴァプール、ヴァルブルギス王立機巧学院を擁する街——つまり、要塞です」

「本当にケツの穴が小さいな」

將軍を笑い飛ばし、余裕たっぷりの流し目をくれる。

「俺は世界を獲ろうというんだぜ？　ここで通用すればこそ、世界のどこでも通用するといふものさ。それに、あのラザフォードのお膝元で、これだけ好き勝手にやっている……それこそ痛快というものじゃないか？」

「学院の人形使いを侮られますな。万が一にも——」

「ガタガタ言うなよ。こうするのが最善なのさ。なぜなら、俺が最善だから」

エドマンドが妖しく微笑む。その瞬間、イオネラの膝が笑い出した。この大変な事態に、自分が加担してしまった。その事実が、氣力を根こそぎ奪おうとする。

「……やめて」

「おや。何か言ったかい、エリ、ア、デ、教授」

「やめてください殿下！　エヴァを止めて——このままじゃ、街が大変なことに——国際問題にも——すぐにも戦争が起きます——」

「望むところだが、それが何だ？」

「本当に……世界侵略なんて……バカなことをお考えなんですか？　本当に、私のエヴァ

をそんなことに使おうと——」

「おまえは天才だが、頭が悪いな。こんなものを作つて、本当に戦争を抑止できると思つたのか？　だとしたら、バカもバカ、バカの王者だな」

ようやく、イオネラは悟つた。

研究を急ぎすぎたのだ。

相手の野心を見極めることもできないまま、資金提供を受けてしまった。あまつさえ、その相手に、エヴァのテストを委ねてしまった。

「さあ、決めるよ、おまえの運命」

イオネラはうつむき、足もとをにらんだ。

涙でにじむ視界。床がほやけて、しずくがこぼれ落ちそうになる。

その涙を目の奥に引つ返めて、イオネラは叫んだ。

「い・や！」

「ふ……バカな女だ。だが、そのバカさ加減が好きだったぜ。敬意を表して、エヴァの手で始末をつけてやる。俺は優しいだろ？」

黒い瞳に凶暴な本性がのぞく。エドマンドが指揮棒を振るように手を払うと、主の意を受けて、エヴァがイオネラに近付いてきた。

ゆっくり、ゆっくり、手を伸ばしてくる。

イオネラはエヴァを見つめ、今度はこらえきれず、涙をこぼした。

エヴァの笑顔を、言葉を、ともに過ごした日々を思い出す。

私が作った自動人形<sup>オートマトン</sup>。

小さな部品をひとつずつ組み上げて。

言葉を教え、歌を教え、料理を教え、魔術を教えた。

(ごめん……エヴァ……こんなことに……！)

殉教者のような気持ちで、目を閉じる。エヴァの手がイオネラの喉<sup>のど</sup>にかかり、握りつぶ

そうとしたとき――

ばさつと派手な音を立てて、何かが外からバルコニーに飛び込んできた。

驚いて目を開けると、エヴァは彼に蹴倒<sup>かきお</sup>され、歌うことをやめていた。

「……誰かな？」

エドマンズの問いかけに、彼――赤羽雷真<sup>アカハネライマ</sup>は投げやりに答えた。

「バカもバカ、バカの王者だよ」

### 3

様子がおかしいのに気付いて、外壁を駆け上がったきたものの――

飛び込んだ瞬間から、雷真は既に後悔していた。

さっと視線を走らせ、周囲を確認。

天井の低いバーの店内。激章をつけた兵士が十人。いずれも人形使いのようで、大型の自動人形を連れている。「殿下」などと呼ばれている黒ずくめの貴公子。正体不明だが、これも人形使いのようだ。そのとなりには初老の軍人。激章の数から言って、かなり高位の階級だ。人間そっくりの自動人形を控えている。

そして、いつの間にか自動人形になっていた、ラドクリフ教授。

どういつもこいつも、一筋縄ではいきそうにない。

対して、こちらは体がひとつきり。おまけに怪我が完治していない。

戦力差はかなりのものだ。だが、こちらには奥の手があるし——それはすぐにも現れるだろう。この場を切り抜けさえすれば、まだ生き残るチャンスはある。

割れたテーブルをはね飛ばし、乙女型自動人形が立ち上がった。

(エヴァンジェリン……！)

顔立ちはイオネラのデッドコピーだ。ただし、まるで生気を感じない。

昨日出逢ったときは、せいぜい「ちょっと機械っぽい人間」といった様子だった。それが今は、「人間の皮をかぶった機械」のように感じる。

雷真はイオネラを背中に隠し、黒ずくめの貴公子に向き直った。

「イオは俺の連れなんだ。だから、俺はこっちにつかせてもらう」

貴公子は面白がるような目つきをした。

「大した度胸だ。おまけにその顔、見覚えがある——」

最後まで聞かない。雷真は腰のハーネスに手を伸ばし、円筒を一本、抜き取った。

安全装置を解除して、貴公子に向かって放り投げる。と同時に、背後のイオネラを振り返り、彼女をかばって抱きしめた。

刹那、閃光と爆音がバルコニーを揺るがし、荒れ狂った。

覚悟し、備えていた雷真でさえ、脳が揺さぶられるほどの衝撃。

兵たちは爆音になぎ倒され、将校もラドリフも、その場に膝をついた。この隙を逃す手はない。雷真はふらつくイオネラを肩に担ぎ、バーの出口へと走った。

階段を駆け降り、外へと向かう。

そのまま広場に脱出……したものの、そこには大量の自動人形が待ち受けていた。

異形のものから人間型のもので、ずらりと並ぶさまは壮観だ。

誰に操られているものか、雷真に目を留めた途端、一斉に襲いかかってきた。

雷真は人形の腕をすり抜け、ボディを蹴飛ばし、どうにか退路を確保して、駆け出した。治りかけの傷が痛むが、そんなことを言っている場合ではない。転がっていた鉄パイプを拾い、人形たちを打ち倒しながら逃げる。

その進路上に、チカツと光が閃いた。

「ダイダロス……？」

陸上戦艦の巨体が見える。その主砲が、じつとこちらを見据えていた。

まずい、と思ったときにはもう体が動いている。

イオネラを抱えたまま、跳躍。路地裏に飛び込んだ瞬間、何かが吹き抜けた。

真横に走る落雷、とでも言えればいいのか。砲弾は追っ手の自動人形たちを巻き込み、路

面をえぐり、それでもなお突き進み、広場に突っ込んだ。

雷真とイオネラの視界を、真つ赤な液体が埋め尽くす。

打ち上げられる人影。吹き飛ぶ手足。

すべて人形のものであつて欲しいと、願わずにはいられない。

雷真は凄惨な光景に背を向け、イオネラの腕を引つ張った。

「行くぞ、イオ。とりあえず、学院まで逃げ込めば——」

「私の……せい……だ……！」

イオネラは座り込んだまま、立ち上がろうとしない。

頭を抱え、全身を小刻みに震わせている。

「どうしよう……私……どうし……っ」

「落ち着け！ 全部、あとだ。今は何も考えるな。俺と一緒に走れ！」

「だってほら……あんなに人が……血がー あんなに……もう機巧都市は……みんな死んで……世界が……エヴァが……っ」

言っていることが滅茶苦茶だ。イオネラはぼろぼろと泣き崩れ、

「私のせいだよ……みんな……みんなー だから、私なんて……もういいんだよー 殿下に殺されたって、当然の報いなんだよー」

ばしんっ、とイオネラの頬が鳴った。

張ったのだ。雷真が。

「甘ったれるな、バカ野郎ー」

一喝。イオネラはびくっとして、我に返った。

「あんたは天才で、教授なんだろー だったら、らしいところを見せろー」

「何だかわからねーが、この混乱——あんたがからんでるなら、あんたは誰よりも状況を理解できている。何とかできるのはあんただけだー」

イオネラはうつむき、やがて、ふらふらと立ち上がった。

入れ違いで自動人形たちが路地に入ってきたが、二人はもう、となりの通りへと抜け出している。走りながら、イオネラは気丈に言った。

「……ありがとう。雷真くんの評価がDに上がったよ」



「まだ不可じゃねーかー」

雷真（かみまこと）にも突つ込む余裕が生まれている。しかし、もちろん、状況は好転していない。

背後から火の玉が飛んできて、空中で爆発した。

あやうく黒コゲにされるところだ。爆発の原因は軍用魔術の代名詞ファイアボール——  
オーソドックスな炎の魔術。榴弾砲（りゅうだんぱう）に匹敵する威力を持つ。

二発目をかわしながら、雷真は肩越しに背後をうかがった。

「くそっ！ 人形使いはどこだ？ ぶん殴って止めてやるー」

「いないよー これは全部、エヴァと殿下（みかど）がやらせてることなんだからー」

「何だって？ だが、さっきまでは連中、魔術なんか使ってたこなかっ——」

雷真の言葉をさえぎって、さらに火球が飛んでくる。あわてて回避。数発をかわすうち、行き止まりの路地に追い詰められてしまった。

追い詰めたのを確認すると、人形たちは攻撃をやめ、じりじりと間合いを詰めてきた。

すぐに撃ってこないのは、確実に退路を断つためか。連中には知性があり、しかも統率さ  
れている。冷たい汗が、雷真の背筋を伝い落ちた。

「くそったれ。もう逃げ場がないぞ……！」

「デイトのあいだに雷真くんを誘惑して、既成事実を作って、言いなりにしちゃおう作戦

……失敗かも」

「そんなことを考えてたのか！」

「邪魔になりそうな女の子たちはみんな遠ざけたし、肝心の夜々ちゃんも、学院の外には出てこれないからね」

そこまで計算していたとは。こんなときだというのに、雷真は感心してしまった。

「油断ならぬーな、あんた」

「一応、学院の教授だからね。でも——それが裏目に出ちゃった」

ここには今、シャルもフレイも夜々もない。

「ごめんね、雷真くん……。君まで、巻き込んで……」

「いやに殊勝だな。だが、末期の台詞をつぶやくには、ちよいと早いぜ」

雷真は真正面に視線を投げた。

視線の先に、ふわり、と粉雪のように舞い降りる者がいる。

さらにと扇状に広がる、青みがかった銀髪。完全なる造形美は、まさに至高の美術品。凍てつくような美貌の乙女が、雷真をかばうように着地した。

「ご無事ですか、雷真殿」

「待ってたぜ、いりり」

雷真は笑みを噛み殺し、「裏の手」の到来に歓喜した。

「——雷真!?」

夜々<sup>やや</sup>ははつとして顔を上げ、あわてた様子で、窓の外へと目をやった。

医学部一階、いつもの病室だ。雷真に置いて行かれた夜々は、雷真のベッドに潜り込んで、すんすんと泣いていたのだが——

「う、どうしたの……?」

となりのベッドで、フレイがきょとんとした顔をする。こちらは、ロキのために林檎<sup>りんご</sup>をむいていたところだ。

「ラビ……?」

フレイの足もと、寝ていたはずのオオカミ犬が低くうなつた。ラビだけではない。ほかの《ガルム》たち四頭も、耳をピンと立て、窓の外に顔を向ける。

ロキもまた、鋭い眼差し<sup>めがざし</sup>を窓の外に投げていた。

「誰<sup>だれ</sup>かが、バカげた出力で魔術を使っている」

「う……誰が?」

「オレが知るか。だが——これは人間の出力じゃない」

フレイは魔力を練り、ラビに感覚を同調させてみた。

なぜだか、上手くいかない。いつもの数倍の労力を払って、どうにか聴覚だけを共有した——瞬間、凄まじい轟音をとらえた。

爆発！ いや、これは……大砲の着弾？

「街で、戦闘が起きてる……！」

「そんな……雷真！」

夜々は弾かれたように立ち上がり、窓から飛び出して行こうとした。

「待ちなさい——」

制止の声がかかる。夜々は窓枠に足をかけたまま、びくつとして止まった。

病室のドアの前に、腕組みしたシャルが立っていた。

「シャルロットさん……止めないでください——」

「貴女やシグムントが街に出ることはできないわ。忘れたの？」

「でも——」

「貴女の気持ちはわかるけど——って違うわよ——そうじゃないわよ——私もあのバカを

心配してるとか、そういう意味じゃなくてっ」

半眼になって、疑惑の眼差しを向ける夜々。

「とにかく大丈夫なのよ。街には、とんでもない化け物が向かったから」

「化け物？」

「学院長と、マグナスよ」

夜々はざくりとして息をのんだ。フレイも。ロキでさえ。

シャルは窓の外、不穏な気配を漂わせる空をにらみ、

「それに、あいつはきつと大丈夫——って違うわよ！　あのバカを信じてるとか、そういうんじゃないかってっ」

5

いろりがさてくれることは、既に折り込み済みだった。

雷真が街に出るということは、軍のバックアップがつくということ。

渡英からわずか数か月で、雷真はイギリス、ドイツの両帝国にマークされる身になってしまった。市街では常に日本軍の警護がつく段取りになっている。

何かあれば、いろりが駆けつけてくれる——そう信じていた。

そして、いろりは実際にきてくれた。さすがは花柳亭の雪月花、周囲の自動人形のように自我を失っていない。これなら、やれる！

雷真は魔力を練り、いろりの背中に送り込んだ。

「一気に風散らすぞ、いろり」

「はい！」

雷真の魔力を受け、いろりの全身が冷気を帯びる。

収束、そして拡散。いろりから放たれた冷気は、迫りくる自動人形たちオートマトンに向かって、一直線に――は飛ばず、足もとに落ちた。

石畳の路地に、うっすらと霜が降りる。

その結果は、いろり自身にも意外だったようだ。いろりはもう一度、ぐっと力んで魔力を放った。大気が氷結し、吹雪が生じる――半径二十センチほどの。

「どうした、いろり？」

「……申し訳ありません、雷真殿」

自動人形たちオートマトンが再びにじり寄ってくる。いろりはじりじりと後ずさりながら、

「雷真殿の魔力を受ければ、あるいは……とも思ったのですが。実は先ほどから、まるで魔術が使えません」

「無理だよー」

イオネラが悲鳴じみた叫びをあげる。

「いくら花柳斎先生の人形でも、こればかりはどうしようもないよー」

「あんだ、原因がわかってるのか？」

「説明はあとでするよー　ともかく、魔術は使えないのー」

その言葉を理解した瞬間、雷真は駆け出していった。

「正面突破するぞ、いろりー」

鉄パイプを握り直し、自動人形の群れに襲いかかる。いろりもまた、雷真に続いて敵陣に突っ込んだ。

たとえ魔術が封じられていても、いろりの運動能力はなみの人間を超えている。軽やかに、舞のように、敵の魔術をいなし、凍てつく手刀を叩き込む。

いろりがいてくれるおかげで、雷真もイオネラをかばいながら戦える。三人は強引に敵を突破し、通りの向こうへ飛び出すことができた。

こちらには人間が多い。暴走を始めた自動人形を止めようと、銃を撃つ者、武器を振り回す者、闇雲に叫ぶ者で、大混乱だ。

「おい逃げろー 巻き添えを食うぞー」

雷真が警告する側から、ファイアボールが人々を襲う。爆風になぎ倒され、火傷を負う人々――彼らには悪いが、助けている余裕はない。

必死で走り続ける。走りながら、雷真はイオネラに呼びかけた。

「おいー 何でいろりの魔術が使えないんだよ!?」

「エヴァの歌が届く範囲では、どんな魔術回路も十分には機能しないの!」

「歌? そんなもん聞こえない――」

いや、聞こえる。聴覚ではとらえられないが——魔力の波を感じる！

「いや、だが、待てよ——じゃあ何で、連中はバンバン撃ってくる!?」

ファイアボールの爆発に背中をあぶられながら、雷真は叫んだ。

より収斂した、炎の弾丸も飛んでくる。いろりが冷気を帯びた手刀でそれを弾く。魔術の発現は不完全だが、軌道をそらすことくらいはできた。

「いい質問だね、雷真くん。でも、それはあとで話すよ。とにかく——」

「雷真殿！ 前を！」

いろりが注意喚起する。雷真はイオネラを抱えて急ブレーキをかけた。ざざっと路面をすべり、数メートル。そのすぐ眼前に、火の玉が落ちてきた。

瓦礫とともに弾ける火炎。こちらもファイアボールだ。

……前方からも自動人形がやってくる。

再び突破するか、別の逃げ道を探るか、迷ったことが命取り。敵は統率された動きで、あつと言う間に三人を取り囲んでしまった。

さすがに、万事休すか。雷真のひたいにどつと冷や汗が噴き出す。一斉に飛びかかってくる自動人形たち。だめだ。もう逃げようがない！

刹那、どんつ、と空気が震え、自動人形の群れをなぎ払った。



なぎ倒されたドミノのように、叩き伏せられる自動人形たち。雷真は瞠目した。誰かの魔術——いや、違う。これはそんな複雑なものじゃない。

もつと根源的な「力」の発露。……魔力そのものを叩きつけた？

「怪我はないかね、ライシンくん？」

崩れた包圍の一角から、屈強そうな偉丈夫が現れる。

にこにこと爽やかな笑み。彫りが深く、口ひげをたたえたその顔は——

「エドワード・ラザフォード……学院長！」

「貴女も。エリアーデ教授？」

「は……はい……」

「それは何よりだ」

にこりと笑う。友好的な笑顔とは裏腹に、強烈な威圧感を覚えた。自動人形たちも察しているのか、動きが止まっている。いろりでさえ、圧倒されているようだ。

そして、雷真の後ろから、気配もなく現れる若者がひとり。

ぞくりとして振り向く。そこにいたのは、銀の仮面をつけた男子学生だった。

学院長がマグナスに告げる。

「緊急事態だ、マグナスくん。学院生の自動人形使用制限を解除する」

使用制限——市街地に学生の自動人形を出してはいけない、というあれだ。

「責任は私が取ろう。もつとも、市長も陛下も嫌とは言うまいよ。この事態を放置すれば、市長の首も、陛下のお命も、無事では済むまいからな」

冗談めかして言う。そんな学院長の言を受け、マグナスはひとこと、

「鎌切」

と呼んだ。その瞬間、マグナスの真横、何もない空間に亀裂が走り――

あまりにも唐突に、マグナスの自動人形が現れた。

「鎌切。火垂をここに」

「イエス、マスター。御心のままに」

乙女が頭を垂れ、魔術回路を起動する。再び空間が縦に裂け、今度はうす桃色の髪 of 乙女――亡き妹の顔を持つ――自動人形が出現した。

（野郎……今の、どうやった……!?）

察するに、鎌切とかいう自動人形の魔術回路を使って呼び寄せたのか。だが、この状況で、なぜ魔術回路を起動することができる？

「蹴散らせ、火垂」

「イエス、マスター。御心のままに」

火垂と呼ばれた乙女は、スカートをひるがえして跳躍した。

ぶしゅつと、大気がこすれるような音がして、乙女の周囲に陽炎が立つ。

乙女はおそるべき瞬発力を発揮して、敵陣に飛び込んだ。

蹴り、殴り、はね飛ばす。実に圧倒的。命令通りに「蹴散らして」いる！

凄まじいこぶしの振り。打ち上げられた自動人形は空中で分解する。乙女は一瞬で位置を変え、稲妻のような速度で縦横無尽に駆け巡った。いつの間にか短剣を抜いて、敵を次々に解体していく。

——明らかに、魔術回路が機能している。

「どうして……!?」

雷真のとなりでイオネラが驚く。いろりも呆然としている。学院長はやはりにこにここと、しかし興味深そうに、マグナスの戦いを見守っていた。

そのうちに、雷真はマグナスの姿勢に注目した。

普段、人形にてのひらなど向けない男が、両手を火垂に向けている。

目を凝らせば見える。左右、十本の指から、魔力の糸が伸びている。

細く、しなやかで、乱れのない、強靱な糸。そこらの人形使いがてのひらから放射するものより、はるかに収斂され、収束している。

人形使い數十人ぶん——否、数百人ぶんの魔力だ！

そして、反対方向へ噴き出すものがある。



マグナスの背中、左右の肩甲骨があるあたりから、うつすらと赤く、霧のようなものが噴き出している。翼のように広がっていくそれは、まぎれもなく――

雷真はざりつと齒がみした。一方、いろりは狼狽した様子で、

「何たる力……！ これは……次元が違います！」

「やっぱり、あいつだ」

確信はあったが、今の今まで、確証はなかった。

それが今、目の前にある。

「あれができるのは……一族の者だけだ……！」

やはり、マグナスは――兄。

赤羽天全だ！

この男が使っているこれが、これこそが、門外不出の奥義……。

「紅翼陣……！」

その力は、奥義書にあった通り、まさしく驚異的だった。

マグナスが動かしているのは火垂りだけだった。鎌切は待機させたまま、火垂り一体だけで、数十体からの自動人形を押し返している。

そして、ある一瞬に、敵が後退した。

銃口を肩間に当てられたような、嫌な錯覚。最悪の予感が雷真を貫く。

予感はすぐに現実に変わる。民家を粉砕して、巨大な砲弾が突っ込んできた。

ダイダロスの主砲だ！

火垂が砲弾を受け止め——大爆発が生じる。

雷真がイオネヲを、いろりが雷真をかばう。轟音と爆風に翻弄ほんろうされながら、雷真はうす

目を開けて火垂を探した。

ごうごうと音を立てて燃える紅蓮こうれんの炎ほのお。

雷真の心的外傷いっけいを刺激する、その爆炎が吹き飛ばされ、火垂が再び姿を見せた。

何事もなかったかのように。事実、傷ひとつ負っていない。

(夜々に似てる……！)

この魔術回路。本質的には違うはずなのに、能力が酷似している。

今の砲撃が切り札だったのか。あるいは、敵わないと悟ったのか。自動人形オート人形たちは蜘蛛くま

の子を散らすように逃げていった。

彼らの主——例の貴公子は、作戦の建て直しを決意したようだ。

やがてあたりが静寂を取り戻すと、学院長はにこやかに笑って、拍手をした。

「見事だ、マグナスくん。君のように優れた人形使いが在籍していること、学院を任され

た身として、誇りに思うよ」

「……身に余るお言葉です」

気のない返事をする。そんな主に代わり、火垂と鎌切が深々とお辞儀をした。

「今の砲撃で怪我をしてはいないかね。ライシンくん、エリアーデ教授？」

学院長が気遣わしげにこちらを向く。

細められた目の奥、鋭い眼光に怯みつつ、雷真はうなずいた。

「……ああ」

「それはよかった。では、早速ですまないのだが」

心底済まなそうに眉根を寄せ、学院長は言った。

「貴女を拘束させてもらおうか、エリアーデ教授」

一瞬、何を言われたのかわからず、雷真の反応は遅れた。いろりに魔力を送ろうかと、悩んでいる暇もなかった。

マグナスの自動人形、鎌切が突如として姿を消す。

気付いたときにはもう、イオネラの姿はどこにもなかった。

# Chapter 4 虎に挑む少年



## 1

虚空にのみ込まれ、イオネラはこつ然と消えてしまった。

「マグナス― イオに何をした―」

マグナスに詰め寄る雷真。その前に、すべり込んでくる者がいる。

マグナスの自動人形、火垂。猛烈な殺気を漂わせ、雷真を牽制している。

妹そっくりの顔ににらまれ、雷真の敵意は急速に冷めた。

「……説明してくれ、学院長」

学院長はとほけた調子で首をひねり、

「ふむ。急ぎ、学院に戻ろう。頼めるかね、マグナスくん？」

「……鎌切」

マグナスの命令を受け、消えたはずの自動人形が再び現れた。

雷真の視界が回転し、逆転する。ふたつの景色が重なって見え、一瞬後、雷真は学院の



メインストリートに立っていた。

（幻覚……じゃない。これは、空間転移魔術……！）

話には聞いたことがある。極めて高度な魔術だ。魔術回路があれば誰でもできる……と聞いた類のものではない。しかも、数人を一度に運ぶとは！

「雷真殿、大丈夫ですか？ お顔の色が優れませんが……？」

いろりが心配してのぞき込んでくる。雷真はうなずいて応え、

「さあ、説明してくれ学院長。イオをどこにやったんだ？」

「君は病室に戻りたまえ」

「どういふことだよー イオをどこへ——」

学院長は答えず、歩き出した。その後ろにマグナス、火垂、鎌切が続く。

嫌な予感しかない。雷真はしばし、バクバクという自分の鼓動を聞いていた。

「あ、雷真みつけー」

ふと、背後から機嫌のよさそうな声が聞こえてきた。

いろりと二人、ぼんやり振り向くと、小柄な美少女が目に入った。

足取りは軽く、嫌々のようにひらひらとしている。頭の左右で結った髪が可愛い。

その顔立ちは幼いが、夜々やいろりによく似ている。

「小紫……と」

雷真の視線は小紫を突き抜け、その後ろへと向かった。

からんころんと下駄を鳴らして、妖艶な美女がゆつたりと歩いてくる。

「戻ったようね、坊や」

「硝子さん——」

病室では煙草が吸えないと言って、硝子は医学部二階のバルコニーへと向かった。

その背を追って、雷真はいろり、小紫とともに歩き出す。

既に連絡を受けていたのか、バルコニーでは夜々が待っていた。

「雷真！ 無事ですか——」

雷真に駆け寄ろうとして、途中で止まる。

夜々は血の気が退いた顔で、雷真の腕——にしがみついている者に言った。

「速やかに雷真から離れなさい、小紫……。姉さまが笑っているうちに……」

「笑ってねーぞ夜々。鬼の形相だぞ」

「こんなのはまだ私の顔です。夜々の鬼の顔が見たいですか雷真？」

「……離れる小紫。頼むから」

「えー、何で何でー？」

小紫は不満げに唇をとがらせた。

「姉さまばかりずるいよ。こないだだって、私は損な役をやらされてさー」  
うっ、と詰まる夜々。前回のアレは夜々に責任がある。夜々は不承不承、

「こ、今回だけですよ……っ」

「あ、いいの？　じゃー、もっとくつついちゃお♡」

「あ……う……やっぱりダメですーっ」

「こら、小紫！　夜々もいい加減にしないかー　雷真殿を困らせるな」

年長者らしく、いろりが妹たちをとがめた。しかし――

「いろり姉さまだって、私からメッセンジャーの仕事を奪ったくせにー」

「ここの誤解を生むような発言はよせー　わわわ私は私心など微塵もなくっ」

「姉さま……やっぱり……っ」

「ああもう落ち着け！　それどころじゃねーだろー」

雷真に叱られ、しゅんとする三姉妹。

ちよつと言いすぎたかな、と思い直して、雷真は言葉をやわらげた。

「まあ、その……おまえたちが三人そろってるところって、久々に見たな」

「雷真……まさか、三姉妹まとめて組んずほぐれつなんて……」  
「ごごい」。

「そんなことは考えてない！」

「わわわ私はその、雷真殿がどうしてもおっしやるなら……その、雷真殿が溜めすぎて

気鬱にならぬように――」

「結さま~~~~~とさくさに紛れて~~~~~っ」

「でも、雷真は私が一番好きなんだよねー？」

「こーむーらーさーきー」

「落ちてっけてのー」

夜々の頭にゲンコツを落とす。とりあえず、この姉妹が三人そろうと、手に負えないといふことがわかった。

「モテモテね、坊や」

硝子しょう子が笑う。ベンチに腰かけ、煙管きんくわんを片手に一服している。古めかしいベンチも、硝子が座るとワビスビの趣が出て、実に絵になる。

「私の自信作を次々とたらし込むなんて、大したものよ」

「たらしこ……っ!? 雷真……っ!?」

「落ちて夜々ー 硝子さんも、そういう冗談はやめてくれー」

震え上がる雷真を見て、硝子の嗜虐心しやうぎやくしんは満たされたようだ。くすりと笑って、

「悪ふざけはそのへんにしましょう。この花柳齋かりやうさい、花柳界では酔狂すいきやうで通っているけれど、時と場合はわきまえているつもりよ」

穏やかだが、決して反論を許さない声。三姉妹はただちに畏まった。

「それじゃ、街で起こったこと、坊やが見たものを話して頂戴」

視線で雷真をうながす。雷真はうなずき、かいつまんで説明した。

指令通りイオネラの研究室に行ったことから始めて、エクスポ見物につき合わされたことにされてたこと、いろりの魔術が使えなかったこと。

「エヴァと殿下がやらせている——エリアーデ教授は確かにそう言ったのね？」  
硝子は難しい顔で煙管の灰を落とした。

「では、やはり……都市を覆う魔力の『暴風雨』は、『支配』の魔術……」

「イオはこうも言っていた。弱つちい魔術師でも、大魔術師なみの魔術が使えるようになる——そういう仕組みを研究してるんだって」

「エリアーデ氏の〈無限連鎖反応〉ね」

「アルファ……?」

「なるほど、優れた兵器ね。相手を（支配）する魔術を、強大なブースト機構で撃ち出す。支配できればよし、できなくても、相手の魔術発動を妨害することができる」

硝子は感心したように言った。

「人形師エリアーデ。優れた技術を持つ人形師であると同時に、野心的な機巧を次々発案する研究者。本物の天才だわ。まあ、〈花柳京〉ほどではないけれど」

ふふ、と小さな含み笑いを漏らす。

「一度、会って話してみたいわね」

「ぜひそうしてやってくれ。あいつ、硝子さんの大ファンなんだ」

「ファン……？」

「硝子さんの本は全部持ってるって。それに、硝子さんの作品が欲しいって。夜々<sup>やや</sup>をくれ<sup>くれ</sup>ってうるさかったんだ」

「それは光栄……と言うべきなのかしら。私も彼女の作品には興味がある——」  
そのとき、バルコニーに鳩<sup>はと</sup>が舞い降りてきた。

手すりに降り立ち、硝子に脚を差し出す。脚には手紙が巻きつけてあった。  
伝書鳩<sup>でんしやうはと</sup>——に似せた自動人形<sup>オートルーティン</sup>だ。

硝子は手紙をほどこき、さっと目を通して、ため息をついた。

「まあ、残念。どうやら、エリアーデ氏に会う機会はなさそうね」

「……どういう意味だ？」

「学院は彼女を処分——謀反人<sup>いげんじん</sup>として抹殺するつもりだわ」

弾<sup>はじ</sup>かれたようにきびすを返す。そんな雷真を、硝子の鋭い声が呼び止めた。

「待ちなさい。どうするつもり？」

「イオに会いに行く——会って、あいつの本心確かめる——」

「確かめて、どうするの？」

「決まってる。あいつが潔白なら、俺はあいつを助ける」

駄目よ、と言われるのを覚悟した。

……が、意外にも、硝子は何も言わなかった。

黙認、してくれるのか。よくわからないが、硝子の気が変わる前に行動した方がいい。

「一緒にきてくれ、夜々」

「はい！」

夜々を連れて駆け出そうとする。その背後で、硝子の声が飛んだ。

「小紫、おまえも行っておあげなさい」

「——うん！」

硝子の心遣いを意外に思いながら、雷真はバルコニーを飛び出した。

## 2

三人を見送ると、いろりは遠慮がちに硝子を振り向いた。

「あの……よろしかったのですか、主？」

「何か、おかしい？」

「今の言葉、雷真殿は学院に盾突くと宣言したも同然です。以前の主なら、そんな行動は決して許さなかったと思います。小紫まで行かせるなんて」

ふっと硝子は微笑んだ。

「ついこの前まで、私は坊やを導いてあげられると、そう思っていたのよ」

いつになく柔和な微笑。いろりは思わず見とれてしまう。

「子どもに過ぎないあの子を諭し、育て、人形使いとして大成させることも、服従させることも、坊やをそっくりいただいでしまうことも、簡単だと思っていたわ」

「事実、その通りなのではありませんか？」

「ふふ……思えば、不遜だったわね。私は天使にも悪魔にもなれると信じて疑わなかった。でも、近頃……何とはなしに感じているのよ。坊やは火のような子だわ」

「火……ですか？」

「燃え移るのよ。坊やに関わった者は誰しも、少なからず変えられていく」

新しい煙草を煙管に詰めながら、硝子は続ける。

「かつて己の価値におごっていた夜々が、あんなにも坊やになつて、そして小さな胸を痛めている。己の価値を疑ってね」

「他人を信じず、誰も寄せつけなかった女の子が、今では友を得ている」



「……シャルロット殿」

「互いに想い合いながら、すれ違つていた姉弟が、今は固い信頼で結ばれている」

それはたぶん、フレイとロキのことだろう。いろりが納得してうなずいていると、硝子は悪戯つばい視線を投げて寄越し、

「あんなにお固かったおまえが、色恋に惑わされたり」

「そそそそれは違います！ 断固として誤解です！」

「そして、憎しみを糧に生きていた者も——」

——宙に浮いた言葉。それは一体、誰のことだったのだろうか？

「皆、少しずつ、坊やの影響を受けていくのよ。よかれ、あしかれ、ね」

「……それは『いいこと』なのではありませんか？」

答えない。硝子は声の調子を変えて、さらに言った。

「真面目に答えるなら、今回のこれは、軍の方針なのよ」

「軍が……雷真殿を動かそうと？」

「街で起こっていることは軍にとっても一大事。下手を打てば世界大戦——今回ばかりは、見物を決め込むわけにはいかないわ。機巧都市で即応態勢にあるのは私たちだけ——そして、坊やに任せる以上、小策をつけるのは当然のことよ」

理屈だ。だが、丸め込まれたような気がする。それでも、主の言葉に異を唱えることは

しない。いろりはそれ以上は踏み込まず、別のことを言った。

「主。エリアーデ教授というのは、どのような方なのですか？」

「まだまだ荒削りで粗も多い——でも、そうね、坊やに似ているわ」

「雷真殿に？」

「実戦を重ねるごとに、見違えて腕を上げていくのよ。——彼女が気になるの？」

「あ、いえっ……エリアーデ殿は、雷真殿と、仲がよろしいように見えましたので」

「まあ。さっきのは冗談だったのに。本当に恋の悩み？」

「ちちちちが……そそそそのようなことはありませんっ——」

いろりは耳まで赤くなつて否定した。硝子の目が細められ、慈しむような色を帯びる。

硝子は煙管タバコをくわえ、深く吸い、そして吐いた。

紫煙はゆつたりと流れ、曇天の空に溶けていった。

### 3

雷真が向かったのは、ゆうべ自分が拘束された、学院長公邸だった。

公邸の周囲は警備によって固められている。厳重さから言つて、学院長がここにいるのは間違いない。つまり、イオネラの説議てんぎとやらも、ここで行われているはずだ。

当然と言うか何と言うか、雷真は警備によって門前払いを食った。

近くの木陰に身を潜め、どうしたものかと思案する。

「どうしますか、雷真？」

夜々がひそひそと訊いてくる。返事の代わりに、雷真は小紫に視線をやった。

「おっけー。それじゃまた雷真のを、私の中にたっぷり注ぎ込んでねー」

小紫の言葉に反応し、夜々の目からハイライトが消えた。

「魔術は使えるのか？　いろりは使えなかったぞ」

「今日は大丈夫な日なの♡」

「いや、日にちは関係ねーだろ」

「本当のことを言うと、学院の中は問題なく使えるよ。たぶん、結界が何かで、外界からの魔術的干渉を遮断してるんじゃないかな？」

さすがは魔術界の最高学府。魔術攻撃への備えも万全というわけか。

雷真は小紫の背中に手を当てて、練った魔力を送り込んだ。

小紫の魔術回路（八重霞）が起動し、三人が三人とも、魔術によって存在を隠蔽された。周囲の人間には、気配も、立てる音も、認識されない……はずだ。

息を殺して、木陰を抜け出し、警備の横をすり抜ける。

——反応はない。やはり、小紫の魔術は効果を発揮している。

夜々と小紫を連れ、公邸の玄関へと向かう。門番に接触しないよう、そつと扉を開けると、キィ、と金具が鳴いた。

どつと冷や汗が出る。……だが、門番はびくりともしなかった。

背後で扉が動いても、彼らは気にも留めない。知覚できていないのだ。

そのまま公邸にすべり込む。入ってすぐのところはホールになっていて、左右に階段が伸びていた。階段はホールを包み込むように、二階へと続いている。

「詮議はどこでやってんだ？ 見取り図でもあればいいんだが……」

首をひねる。昨夜、雷真の取調べは二階の一室で行われた。

（――まずは、あそこに行ってみるか）

階段を上がる。と、そこに、厄介な存在が待ち受けていた。

アップにした赤毛と、銀フレームの眼鏡がトレードマーク——キンバリーだ。

キンバリーはにやりと笑って、

「私に視えているようでは、まだまだだな」

はつきりと雷真を見据えて、そう言った。

「くる頃だろうと思っていたよ。豪胆だな、（下から二番目）。毎度のことだがね」

「……見逃してくれ」

「私が見逃したところで、ほかの誰かに見つかるだろうよ。学院には（感知）や（探査）

を専門にする教授だっているんだ」

キンバリーは笑みを引つ込め、厳しい顔で叱つた。

「逸るな、バカ者。こんなことで学院を放逐されたいのか？」

「……俺のバカは毎度のことだろ。俺はイオと話がしたいだけだ。イオと話して、あいつが本当に謀反人かどうかを確かめて、それで」

「シロだと君が判断した場合、学院長を止めようと言うんだろう？」

「そうだ」

キンバリーは嘆息して、大げさにかぶりを振った。

「イオネラの証言などどうでもいい。君の判断などクソにもならん。まして侵入者どもの言うことなど、学院長がまともに取り合ってくれると思うのか？」

「だったら何だ？ イオが殺されるのを、指をくわえて見てろつてのか？」

「私は逸るなど言っただろう。あきらめろとは言っていない」

「――」

「隠れてイオネラに接触すれば、君は『不法な侵入者』だ。だが、不正行為に訴えずとも、方法はあるだろう？」

「……手助けしてくれるのか？」

「市街地がどうなっているか、知っているかね？」

問いに問いで返す。キンバリーがこういう言い方をするとき、暗に深い意味が隠されている。なので、雷真は素直にかぶりを振った。

「エキスポに出されていた商品、試作品、各国自慢の展示品まで、のきなみ支配権を失ったそう。敵は既に密使を派遣して、英国政府に機巧都市の制圧を宣言。市民五十万人の命と引き換えに、王権の譲渡を要求している」

雷真は絶句した。そこまで大事になっていたとは！

「つまり、これはもう国家を揺るがす事態だ。魔術師協会としても、黙って見ている法はない。学院が——学院長が信用ならないことは、皮肉にも君が教えてくれたようなものだ。学院を見定めるためにも、君を泳がせてみる価値はある」

「……回りくどいぜ。要は、協力してくれるってことだろ？」

「そうだ。もっとも——ここまで含めて、学院長の計算かも知れんがね」

「それで、何をしてくれる？ 逸るなって、俺はどうすりゃいいんだ？」

「なに、正規の手続きを踏むのさ」

キンバリーが右手をこちらに向けた——瞬間、魔力がほとばしり、小紫の魔術が効果を失った。花柳斎秘蔵の魔術回路が、実にあっけなく破られてしまう。

「粗相のないようにしろよ。と言っても、無理だろうがね」

キンバリーは軽く言って、背後の扉をノックした。

ぎよつとする雷真らいしん。扉の向こうから、くぐもった声が聞こえた。

「誰だれかね？」

学院長の声だ。さすがの雷真も、この展開には膝ひざが震えた。

「キンバリーです。オマケがいるのですが——入ってもかまいませんか？」

「かまわんよ。入りたまえ」

心の準備など、させてもらえない。

キンバリーはあつさりと扉を開き、雷真を学院長の前に引き出した。

4

そこは豪華ごうしやなホールだった。

会議室のようにも、食堂のように見える。あるいは、賓客をもてなすための応接間か。

天井にはシャンデリア、床は緋色ひいろのじゅうたん。長いテーブルに純白のクロスがかけられ、居合わせた面々には香り高い紅茶が、白磁のカップでふるまわれている。

テーブルを囲んでいるのは、何とも豪華な顔ぶれだった。

学院長が一番奥、窓ガラスを背負って座っている。

そのすぐ後ろに、秘書官アヴリルがサーベルを帯びて立っていた。

学院長のとなりには、教授総代を務める医学部長パーシヴァル。

そのとなりに教授副代のサンジェルマン。以下、ずらりと並ぶ各学部長たち。

夜会執行部の幹部数名。風紀委の新主幹と幹部数名。警備をたばねる警備主事と、警備隊の隊長七名。そして——銀の仮面のマグナス。

いずれも権威と実力を兼ね備えた面々だ。さすがの雷真も鼻白んだ……が、キンバリーはいささかも動じず、雷真の背中を突き飛ばし、彼らの前へと押し出した。

雷真を見て、学院長の肩間（みづみ）に断崖（だんが）のようなシワが刻まれた。

「これは面白い客人を連れてきたな、キンバリー教授」

「この火急のときに無礼をお許しください学院長、それから皆さん。私の不出来な教え子が、どうしても学院長にお会いしたいと申しますもので」

「状況は極めて逼迫（ひつぱく）している。この状況で我らの会議を妨げるほどの、十分な意義があるのだろう。そうだな、ライシンくん？」

ずしん、とのしかかる重圧。小紫（こむらさ）が夜々（よや）の手を握るのがわかる。頼られた夜々もまた、

怯（おそ）えて小さくなった。雷真自身、正直なところ、土下座して退出したい気分だ。飢えた虎を前にしたような、本能的な恐怖を感じる。

だが、身体は心を裏切って、ずかずかと進み出ていた。

「イオに——イオネラ・エリアーデ教授に会わせてくれ」



テーブルのお歴々がざわめく。アヴリルなど、あからさまな殺気を出した。

学院長は落ち着いた声で、にべもなく言った。

「それはできん。彼女は重要参考人だ。叛逆者（はんぎやくしや）に通じ、学院の資金および施設を私物化し、あげく研究成果を不穩分子に流していた疑いがある」

「だから処刑するってか？ ふざけるな！」

ざわめきがやむ。お歴々はあつけに取られた様子で、雷真（らいしん）を眺めた。

学院長相手に「ふざけるな」とは。夜々と小紫（こむらさき）も肝をつぶしている。ただひとり、キンバリーだけが楽しげに、見世物（みせもの）を見るような目をしていた。

今さら引つ込みはつかない。雷真はさらに登みかけるように言った。

「イオを消したところで、どうにかなる状況じゃねえだろ。それとも何か？ 余計なことを言われる前に口を封じちまおうってか？」

「いい加減にしろー」「不敬だぞー」「わきまえたまえー」

学部長たちの叱責（しつせき）が飛ぶ。だが、彼らを手で制し、学院長は静かな声音で、

「エリアーデ教授の研究が帝国を危うくするものならば、彼女の意図がどうあれ、それはやはり罪となる。彼女に教授権限を与えていたのは学院だ。当然、学院の存続も危うくなる。政治がわからぬ男ではあるまい、君は？」

「どんな俺（おれ）かをあんたが知ってるはずはないぜ、学院長」



雷真はどんっとテーブルを叩いて、学院長をにらみつけた。

「イオは叛逆者じゃない。こんな事件を起こすつもりはなかったんだ。俺はこの耳で聞いた。イオは研究を横取りされたんだ。イオは何も知らなかった！」

「彼女が謀反を知っていたかどうかは問題ではない」

「だが、イオは利用されたんだぞ！」

「こちららもラドクリフを失ったのだ！」

大砲の爆音にも似た叫び。窓ガラスが震えるほどの声に、お歴々も、夜々も、小紫も、

雷真も、一瞬、呼吸を忘れた。

怯む気持ちを立て直しながら、雷真は意外の念に打たれていた。

学院長が、こんなふうに、感情をおもてに出す男だとは。

実の娘に機巧手術を施す男。二重スパイに仕立て上げるような男。その娘が行方不明になっても、顔色ひとつ変えないような男が……。

いずれにせよ、このまま学院長と口論していても、雷真の言い分は通らない。

夜々と小紫が手をつなぎ、不安そうな視線を投げてくる。そんな二人を見ているうちに

——雷真の頭に妙案が浮かんだ。

「なら……こういうのはどうだ？」

雷真は学院長に向き直り、自信ありげなふうを装って、問いかけた。

「この危機的状況をイオネラ・エリアーデ教授が何とかできたら、あいつはむしろ、国を救った英雄だ。身の潔白が証明できるだろ？」

「証明にはほど遠い。エリアーデは己の研究成果を世間に喧伝するため、自作自演で騒ぎを起こした……と噂が立っただけだ。だが——」

学院長の口ひげが片方、にやつと持ち上げられた。

「噂程度で済むのなら、安いものだな？」

雷真ははっとした。言外に含んだ意味を理解する。

それはテーブルのお歴々も同じだ。この場に居合わせるほどの人物は皆、学院長の真意を理解している。互いに顔を見合わせ、うなずき合った。

学院長は「おほん」とわざとらしく咳払いをして、

「教授総代、貴方の意見をうかがおう」

「学院長がお決めたことなら、教授会に異存のあろうはずもないよ」

「警備主事殿はどうだね？」

「我らの任務は学院内の治安維持です。学院外のことには関与いたしません」

「いい答えだ。学生総代は——」

学院長の視線が泳ぐ。そちらには、ひとつだけ、空いている席があった。

秘書官アヴリルが耳打ちする。

「彼女なら、（バウアーとウィグモア）〈結界儀式〉の構築指揮にあたっています」

「では、総代に代わって君の意見を聞くとしよう。マダナスくん？」

銀の仮面がこちらを見た。視線が交錯した瞬間、雷真の全身にヒリヒリするような熱が回った。怒りに頭が白熱するが、もちろん、どうすることもできない。

ややあつて、兄——天全は、淡々とした声で言った。

「下から二番目」の好きにやらせてみては？」

「ほう。同じ学生として、彼の肩を持つのかね？」

「（魔術噴い）を倒したのは彼です。Dワークスの禁忌抵触行為を暴いたのも。〈十字架の騎士団〉の夜会介入を阻止したのも。それでいて、彼には何の価値もない」

一同が息をのむほどの、何の温度も感じさせない、冷淡な言葉だった。

「成績は実質最下位、戦闘技術は未知数で、夜会の順位も第百位——彼がいなくなったところで、英国にも、学院にも、何の不利益もないでしょう」

それで、決まる。学院長はうなずいて、沙汰を告げた。

「エリアーデ教授との面会を許可する。彼女を説得するなり、脅迫するなりして、事態を収拾できるような、素晴らしい知恵を引き出したまえ。ただし、彼女の拘束を解くことはできん。それは理解できるだろうか？」

「……ああ。そのくらいはわかる」

「ではひとつ、重要なことを伝えておく」

すつと、学院長は指を二本、立てて見せた。

「二時間、だ」

何のことだと訝る雷真。意味はわからないのに、なぜかざくりとした。

「帝国は叛乱勢力の完全鎮圧を決定した。既に帝国海軍がこちらに向かっている」

「……海軍？」

「通常の陸戦兵器では敵集団を殲滅できず、機巧師団は都市に入ることができん。従って、敵性魔術の範囲外から攻撃する。大艦隊が湾を埋め尽くし、徹底的な艦砲射撃によって、都市ごと消滅させる——その作戦が開始されるまで二時間だ」

「な……人質はどうなる!? 市民は!？」

「陛下と議会の決定だ。そして、とやかく言っている場合ではない」

「——」

「君がエリアーデ教授と何を計画し、どう動こうと自由だ。しかし、二時間後、市街地をうろついていた場合、君の安全は約束されない」

「……気に留めておく」

「待てジジイ——じゃない、お待ちください学院長」

アヴリルがとがった口調で割り込んだ。

「帝國艦隊の攻撃までは一時間とお伝えしたはず。二時間ではありません」

「一時間は私が稼ぐ」

雷真は睡然としたが、学院長は涼しい顔だ。

「……できるのか？」

「折衝は大人の仕事だ。君は自分にできることをしたまえ」

そう言われては、うなずくしかない。この腹の読めない、得体の知れない男を、信じてみようと思っている——そんな自分に自分で驚く。

「エリアーデ教授のところへは、アヴリルくん、君が案内してくれたまえ」

「わかりました。私をアゴで使うとはいいい度胸だなジジイ」

「アヴリルくん……」

情けない顔をする学院長。この二人の関係も謎だ。

しかし、目的は達せられた。雷真は軽い安堵を覚えながら、きびすを返した。

「待ちたまえ、ライシンくん。言っておくが、誰も君を援護はできん」

「……覚悟の上さ」

「学院のゲートより内側は現在、敵性魔術の効果範囲外になっている」

そう言えば、小紫がそんなことを言っていた。

「学院には大結界が張り巡らされていてね、これを強化すれば、物理攻撃に耐えることも

可能となる。帝国艦隊の砲撃に備え、学院生は繰出で結界儀式（セーフティ・マジック）に回る。君に割いてやれる人員はいない。もつとも、夜会を傷病欠場している者は、数に入らんがね」

——つまり、ロキを連れて行けと言ってくれている！

「そうそう、二回生のシャルロットくんのことだが。彼女は先ほど、魔術でストリートを破壊しただろう。彼女は設備損壊の罪で謹慎とする。結界儀式に参加する必要はない。寮で大人しくしているよう、君の口から伝えてくれ」

学院長の意図を悟り、雷真は思わず礼を言った。

「——恩に着る——」

「はて、礼を言うのはなぜかね？」

ぎりり、と再びにらまれ、雷真はあわてて畏まった。

## 5

アヴリルに先導されて、夜々、小紫とともに地下へ向かう。

公廊の地下室は、大きく二つの区画にわかれていた。ひとつはキッチンやリネン室で、メイドたちが作業に使うエリア。賓客の目に付かず、廊内を移動できるように、入り組んだ地下通路が縦横に走っている。



そして、もうひとつは——このエリア。

コンクリートで塗り固められた、堅固な造りの通路を進むと、鉄格子が並ぶ区画に出る。どう見ても監獄だ。空気が湿っているのに、雷真は喉の渴きを感じた。

やがて最奥の部屋にたどりつく。そこには監守が詰めていた。

アヴリルは監守に扉を開けさせながら、

「バカな気を起こすなよ、小僧。私のサーベルが血に飢えていることを覚えておけ」  
威嚇するようにそう言つて、雷真の背中にひじ鉄を食わせた。

つんのめりながら、夜々と小紫を連れて、中へ。

ベッドがあり、ソファがある。牢獄にしては快適そうな室内に、彼女がいた。

緑色の特徴的な髪。寒そうに膝を抱えて、白衣の美少女が座っている。

イオネラだ。泣き腫らした目が痛々しい。表情は疲れ、憔悴の色が見えた。

どうにか元気づけようと、雷真は敢えて、からかうような口調で言った。

「よう。夜々だけじゃなくて、小紫も連れてきてやったぞ。ちようだいちようだいて騒がなくていいのか？」

「……そんな元気はないよ」

「ひどい目に遭わされたのか？」

「それは、これから」

くすつと自嘲めいた笑みを浮かべる。

「よく学院長が許してくれたね。監禁中の『謀反人』に会うなんて」

「三つほど、あんたに訊きたいことがある」

「……いいよ。ひとつ目は？」

「あんたは何で、そんなに夜々が欲しいんだ？」

イオネラはきょとんとした。

「え……そんなこと？ 殿下とのつながりとか、謀反の動機じゃなくて？」

「答えてくれ」

「……その子たちのことがわかれば、エヴァをもっと……完璧に近づけてあげられると、

思ったからだよ」

夜々を眺めて、イオネラは優しく目を細めた。

「きれいだよね、本当に。私もね、自分の自動人形には誇りを持つてるの。機械としての

人体を完全再現してるって、自負してる。でも、花柳斎先生が作るのは、単なる『再現』

じゃなくて……人間そのもののなの」

「そのもの……？」

「部品からして、私とは違うよ。先生は有機材料を組み合わせて、機械のように扱うの。

その子たちは〈精瑠〉という極小の有機パーツで構成されている。それは自己を複製して、

修復して、発達させることができるの」

「まんな、細胞……なのか」

「そうだよ。私はね、現時点では自分のやり方が間違ってるとは思わないけど、行き着くところまでいけば、先生の方法論が正しいと思ってる。人間を作った方が早いし、美しいよ。受精卵一個の情報から、こんな複雑な有機体ができるんだからね」

「あんたも、いずれは人間を作りたいのか？」

「エヴァには完全な体をあげたいと思ったよ。でも……」

イオネラは視線を落とし、それから、どこか遠くに目をやった。

「どこからが、人間なのかな？」

「自動人形オートマトンは、もう既に人間なんじゃないのかな？」

雷真らいしんははっとした。

イオネラは夜々ややをモノ扱いしていると思っていたが——違う。

そうじゃない。連だ。イオネラは自動人形オートマトンをモノ扱いするのではなく、人間をモノ扱いするのだ。人間がモノにすぎないから、自動人形オートマトンもモノなのだ。

「……な悪いかな？」

「あれ？ 何を笑っているのかな？」

「いや、わかった。最初の質問は終わりだ」

「じゃあ、二つ目をどうぞ」

「あんたが作ったエヴァンジェリン——何であんたにそっくりなんだ？」

「……お母さんに、なりたかったからだよ」

そう言ったイオネラの顔は、まるで慈母のように優しく——そして、強烈な痛みをにじませていた。

「笑っちゃうよね。娘を……戦争の道具にする親なんて……」

「……OK。じゃあ、最後の質問だ」

「どうぞ」

「あんたの研究は、何のためなんだ？」

イオネラの顔が硬くなる。夜々と小紫も息をのみ、耳を澄ました。

「あんた、言ったよな。弱っちい魔術師でも、大きな力が使えるようになるって。それは何のためなんだ？」

しばし、イオネラは答えなかった。十数秒もためらってから、ぽつりと、

「雷真くん……。戦場を見たこと、ある？」

「……いや。だが、人間が蹂躪じふろうされる光景は、記憶にある」

「私が作った人形も、そうやって人を殺したんだよ」

「私は……あの子たちが、誰も殺さなくていい……そんな世界にしたいと思ったの」  
 自嘲の笑み。目に涙をいっぱい溜めて、しかし、こぼさない。

「バカだね、私。どんな強力な兵器も、戦争を抑止することなんてできない——止められるのは、それを使う人間の心だけ——そんな、簡単なことだったのに！」

愛情を注いだ自動人形が、人殺しの道具となる。

性能を追い求めるほどに、それは強力無比な兵器となっていく。

イオネラのことは何も知らない。天才の考えることなど、到底、理解できない。

だが、彼女の涙を見ているだけで、やはり胸が痛むのだ。

だから、この胸の痛みに従おうと、そう決めた。

「前置きなしで言うぞ、イオ。あんたは俺と組んで、『謀反人』をぶちのめす」

イオネラが目丸くする。無理もない。今はイオネラ自身が「謀反人」なのだ。

「制限時間は二時間だ。二時間で俺たちはあれの対抗策を思いつき、実現し、あの黒ずくめ野郎をぶっ飛ばす」

「だって、雷真くん……雷真くんが……やるの？」

「そうだ」

「どうして……？ どうして、そこまでしてくれるの？」

「あの野郎は笑っていたが、あんたの夢には――」

確信をもって、言い放つ。

「命を懸ける、価値がある」

張り結めていた糸が切れたように、イオネラの眼から涙がこぼれた。ぼろぼろ、ぼろぼろと。

イオネラは泣いた。声をあげて、泣いた。

嘲笑され、利用され、踏みにじられた彼女の夢に――

命を懸けてくれる者が――彼女と同じ〈愚か者〉が、いたのだ。

イオネラは目をこすって涙をぬぐい、きりつとした顔で言った。

「じゃあ、雷真くん。今度は君が質問に答えてくれるかな？」

「対抗策に関係があるんだな？ 何だ？」

「コウヨクジンっていうのは、何なのかな？」

「――」

「さつき、マグナスくんが使った、あれじゃないのかな？」

やはり、鋭い。随すつもりはなかったが、とっさに返事ができなかった。

「エヴァの（絶対王権）マダチコンチローラーの範囲内にあつて、マグナスくんは平気で魔術を行使した。はっ

きり言うのと、あんなのは人間の力じゃないよ。あれはたぶん、エヴァと同じことをやった

からだと思うの。つまり——」

# 「魔力のブースト」

二人の言葉が重なる。雷真はうなずき、語り出した。

「話すのはかまわないが、役に立つかどうかはわからねーぞ。俺が丸二年、奥義書片手に血を吐いて、糸口すらつかめなかった技だ」

「うん。聞かせて」

「普通、人形使いは『てのひら』を自動人形に向けるだろ」

「てのひらは人体でもっとも魔力親和性が高いところだからね」

神に祈るとき両手を合わせるのも、怪我をした人間が患部に手を当てるのも、西洋人に握手の習慣があるのも、そのせいだと言われている。

「だが、それと同じことを（指）でできる異能者がいたんだ。その昔」

「指で？ 全身とか、頭じゃなく？」

ロキやシャルくらのレベルになると、てのひらに向けなくても、全身から発する魔力だけで、自動人形をコントロールすることができる。

「手の指は十本あるだろ。一本一本から、てのひらと同じだけの魔力が飛ばせたら、一度に十体の自動人形が扱えるし——」

その魔力を一体の自動人形に集中させれば、魔力は十倍。

しかも、単純に十倍にしたのとは違う、より緻密で、繊細な制御が可能になる。たとえば言うなら、十人がかりで一体の自動人形を操るようなものだ。

赤羽一門が誇る〈紅翼の血〉——異能の一族が今に伝える、奇跡の魔力運用法。

当然、制御は難しい。雷真もかつて、夜会でロキと戦ったとき、試みた。だが、魔力の流れが絶望的に「雑」で、とても実践することはできなかった。

「……荒唐無稽な技だね。そんなことが機巧を使わずにできるんだとすれば、それはもう、人間じゃなくて、あっち側の存在だよ」

「あっち？」

「神さま」

イオネラは何事か考え込み、そして、がばっと顔を上げた。

「雷真くん、私に一時間ちょうだい！」

何かするつもりか。だが、イオネラに一時間を委ねれば、雷真が街で活動できる時間は一時間足らずになってしまう。

それで、止められるか？ 市街全域を支配する、あの大軍を相手に？

見つめ合う。イオネラは真剣だ。そして、いつもの自信に満ちている。

雷真は腹をくくった。

「わかった。あんたの指示に従う」



「それじゃ、今から言うものを、私の研究室から取ってきて。大至急！」

「あ、夜々が行きます！」

夜々が手を挙げて立候補する。夜々なら雷真の半分の時間で往復できる。

夜々はイオネラが言うものをすべて記憶し、即座に飛び出して行った。

ここでじっとしているのは時間の無駄だ。雷真もきびすを返した。

「俺はロキとシャルに応援を頼んでくる。小紫、おまえはここで待っていてくれ」

出て行くとして、足を止める。雷真は肩越しにイオネラを振り返り、

「そういや、訊きそびれていたが——あの黒ずくめは誰なんだ？」

「雷真くん……評価だね」

「微妙すぎてコメントしにくいランクだな」

「新聞くらい読んだ方がいいよ。あの方は（黒太子）エドマンド殿下。大英帝国王位継承

順位第一位——つまり皇太子さまだよ」

かくん、と雷真のあごが外れた。

公郎の応接間は、がらんとしていた。幹部たちは既に出払い、教授機代パーシヴァルと、学院長ラザフォードの二人しかない。

「後手に回ったな、ラザフォード」

先ほどまでの温和な顔つきはどこへやら。パーシヴァルは威圧的な気配を漂わせ、窓際のラザフォードをひとにらみした。

「連中の目的は明らかに夜会の妨害だ。こうも棄権が続いては、今期夜会の正当性に疑問符がつく。今さら連中のしつぽをつかんだところで――」

古くからの盟友に語りかけるような、気安く、そして厳しい声で言う。

「そら、虎の尾を踏んだ。今度は連中、機巧都市を狙ってきた。窮鼠、というやつかな。十九世紀最強の魔術師にいらまれて、黒太子は賭けに出たのだ」

「……虎なのか、鼠なのか、どっちだね？」

「おまえさんの意見を聞こう」

「虎だ」

びくり、とパーシヴァルの眉が動いた。ラザフォードは続けて、

「連中は初めから機巧都市を陥とす算段をしていた。ここ十日ほど〈手袋持ち〉を棄権に追い込んでいたのは、我らの目先を誘導するための欺瞞にすぎん」

「……ダイダロスが居合わせたのは、偶然ではないと？」

ラザフォードはうなずく。パーシヴァルは乾いた笑いを漏らした。

「機巧都市を奪われてしまえば、どのみち、我らだけ夜会を続けるわけにもいかない……か。こちらのプランを気取られたのではないかね？ 列強は言わずもがな、魔術師協会も、（結社）の舊敵どもも、神性機巧には目の色を変える」

「学院には世界から学生が集まっている。どうしてもセキユリティに穴はあく」

「（愚者の聖堂）に番犬どもが入ったさうだな。いつまで好きにさせておく？」

「控えたまえ、パーシヴァル。教授総代ともあろう御仁が」

「これは失敬。年をとると口が軽くなってかなわん」

「キンバリー教授には、いてもらった方がよいのだ」

「毒をもって毒を制す、かね？ 一理ある。このたびの一件、まず間違ひなく（結社）の

舊敵どもが糸を引いている」

「だが、黒太子殿下は狂犬だ。飼い主に唯々諾々と従うようなタマではない」

「王子は操られたふりをしていると？ では、それは誰の差し金だ？」

「狂犬自らの意志で、飼い主を食い殺す腹……と見た」

「それは滑稽だな。王室を食い、結社を食い、王子はどこへ行くというのだ？」

ラザフォードは答えず、重々しい口調で別のことを言った。

「いずれにせよ、我らは機巧都市を取り戻さねばならん」

「ほほう、これは驚いた。てつきり、くれてやるものと思つていたよ。戦時になれば、夜会は止まる……が、おまえさんの隠れみのは増えるのだから。——都市を奪還するのなら、マグナスを出せばよかつたのではないかね？」

「いや、彼でよい」

「それも滑稽。(下から二番目)に、ずいぶんとご執心だな」

「笑いごとではない。見ているがいい、バーシヴァル。あの少年はやつてのける。もし彼にできぬなら、彼の仲間たちがやつてのける」

「……ほう？」

「あれはおそらく、教父が到来を予言した子ともだ」

「魔術師協会が語る……(予見)の子だと？」

「あの少年を利用すれば——否、しなければ」  
すうつと、ラザフォードの眼光が鋭くなる。

「我々が神性機巧に到達することは、叶わぬ」

「……教父の世迷言を信じるのかね？」

「いや。だが、賭けてみたくはなる」

口ひげが片方、ゆつくりと持ち上げられた。

ラザフォードの凄絶な笑みを見て、バーシヴァルもまた、愉快そうに笑った。



## Chapter 5 出撃

### 1

陸上戦艦ダイダロスの第一艦橋——メインブリッジ。

壁や床がぼんやりと発光し、ほのかに明るい。

その中央。一段高い艦長席に、足を組み、悠然と座す者がいる。

大英帝国第一王子、黒太子<sup>黒太子</sup>エドマンドだ。

「目を開け、ダイダロス」

艦橋の壁、天井が透け、外の光景を映し出す（窓）になる。

フットライトがともし、エドマンドの自信に満ちた顔が照らされる。と同時に、グレンダン將軍の姿も浮かび上がった。

「これは魔術……いや、魔術回路によるものではありませんな」

「ほう、見ただけでわかるものかい？」

「微弱な魔力を感じますが、魔術回路の起動を感じません。これはおそらく、ダイダロス



の（ハイブの心臓）がもたらす知覚能力……」

ダイダロスが「視ている」世界を、ブリッジ内に投影しているのだ。極めて精緻な魔力制御だが、厳密に言えば魔術ではない。

「これほど高度な魔術プログラムを、あの鼻持ちならないフランス人がやってのけるとは。自慢のためだけに、自動人形エクスポに寄越すわけですか」

「いや、連中は業腹だろうさ」

「は？ と、おっしゃいますと？」

「ダイダロスの設計者はフランス人じゃない。あのプリュー伯爵だよ」

瞳目する。將軍は金魚のように口をばくばくと開け閉めした。

「知っての通り、俺と伯爵は縁があつてね。ちよいと力を貸してもらったのさ。つまり、これはブリタニアの血が可能にしたこと。大陸の連中がやったことじゃない」

「それは、殿下がなさったこと……なのですか？」

エドモンドは「そうだ」とも「違う」とも言わず、

「さあ、ダイダロス。市街の様子を見せてくれ」

新たな命令を下す。すると、窓のそれぞれに、別々の光景が映し出された。

通りを巡回する警察の自動人形。

整然と配置された軍の自動人形。

ただし、それら自動人形に使い手の姿はない。それどころか、市街のどこにも、人間の姿が見えない。民家の戸が固く閉ざされている。住民たちは自宅に引きこもっているか、公民館などに避難しているのだ。

鉄道も街道も港も、自動人形が封鎖している。その大半は戦闘能力を持たないブリキの安物だ。だが、銃器で武装すれば立派な兵士となる。

「他愛もないな。こうもたやすく、機巧都市を手中にできるとはね」

市街全域は既にエドマンドの勢力下。大英帝国が誇る機巧師団も、もはや手出しはできないだろう。都市に入った途端、こちらの勢力に取り込まれてしまう。

「……殿下、あちらの部隊は？」

將軍が小窓のひとつを示す。映し出されているのは街の中心部、王立機巧学院へと続く大通りだ。そこに、明らかに雑兵とは違う、十体ほどの自動人形がいた。

統一感のない部隊だ。武装している者もいれば、裸に近い姿の者もいる。ゴリラのような巨軀を持つ者も、子どものように小さな者もいる。

「精密ですが、規格がまちまち……そこらの量産品とは異なる、凝った意匠……あの独特の雰囲気は——学生を持ち物ですな」

「目が利くな。そう、俺がコソ泥の真似をして手に入れた連中だよ」

配置されているのは学院の前。察するに、あれは学生に対する防衛線だろう。

なるほど、学院が反抗の構えを見せた場合に備えているのか。

將軍が感心したようにうなずいた、まさにそのとき、鐘のように甲高い音がブリッジに響き渡り、窓という窓が赤い光を放った。

「警報……ですか？」

「ダイダロスが異変を伝えているらしいな」

小窓のひとつ、海の光景が自動的にズームされる。

港の南北から集まってくる船影——帝国海軍の艦隊——

「ブリタニア・ガレオン級が二十……もつというな。どう見る、將軍？」

「洋上から攻撃するつもりでしょう。陸上から攻め落とす手段がなく、上陸も叶わぬ今、

砲撃によって街ごと焼き払うつもりでしょうな」

「さすがは親父殿、暗愚極まりない。市民の命も、生活も顧みないとはね。王の資質が聞

いてあきれるよ。誰に従うべきか、これではつきりしただろうか？」

「ですが、どうなさるのです？ 市民に避難勧告を？」

「避難だって？ 愚かなことを言うなよ。市民に犠牲が出る——それは仕方がないことだ。

親父が暗愚だからさ」

エドマンドは詩でも吟ずるような調子で、淡々と言った。

「流れた血は、親父への憎しみになる。流れた涙は、親父への怒りを呼ぶ。民衆の怒りと



憎しみが俺を王にしてくれる」

「……大したお覚悟だ。しかし、ブリタニア・ガレオン級の主砲を浴びれば、いかにダイダロスが堅牢でも、ひとたまりもありますまい」

「ダイダロスは絶対に沈まない船だ。砲撃など意味はないさ」

「沈まない……？」

「さっきの一幕を覚えているかい？ ラザフォードの秘蔵っ子（マグナス）が俺の追撃を振り切ってイオを逃がした——あれが最後のチャンスだったんだ。ダイダロスへの入城を許した今、連中に俺を止めることはできないよ」

將軍は言葉に詰まった。わからない、という顔をする。

「まあ、先刻のあれには度肝を抜かれたがね。エヴァの支配領域で魔術を使える者など、歴代の魔士にも、数えるほどしかないだろうよ」

エドマンドはそれ以上は説明せず、小窓のひとつに手を差し伸べた。

映っているのはダイダロスの甲板。そこで、切々と歌い続ける乙女がいる。

「そうだ、エヴァ。おまえが俺の女神だ」

うっとり、愛をささやくように言う。

美しいエヴァの顔が大写しになる。その頬をひとすじ、透明な液体が流れ落ちた。

「泣いている……のですかな？」

「まさか。操られるだけの人形が泣くはずもない。雨が当たっただけさ」

「確かに……降ってききましたな」

「さあ、世界。俺を認めろ。王として戴け——」

絶対的な自信に満ちた言葉。將軍は畏まり、エドマンドに最敬礼をした。

## 2

雷真は医学部校舎に駆け込み、病室へと走った。ドアを開け放つと同時に、

「ロキー！ いるか!?」

大声で呼びかける。フレイが驚き、べたん、と尻もちをついた。

「フレイ……こんなところにいていいのか？ 儀式つてのは？」

「う……今、行く」

「そうか。それで、ロキの奴は——」

フレイが仕切りのカーテンを開ける。あらわになったベッドの上に、極めて不機嫌そうな、仏頂面のロキが見えた。

「病室で騒ぐなバカが。東洋人にはその程度の常識もないのか島国バカ」

「うるせー他人をバカ呼ばわりするな大陸バ……」

口をつぐむ。ここでケンカを売っては、本当にバカだ。

「ふん……さっさと要件を言え。俺は謙虚で寛大だが、愚図は好かない」

「その……力を……だな、つまり……貸してくれと……」

「聞こえんな。何が言いたい？」

「う……だから……わかれよ！」

「それが人にものを頼む態度か」

「ぐぐ……つか、聞こえてんじゃねーか！」

口キは少しだけ気分がよさそうに、ふふんと鼻で笑った。

「やれやれ、極東には礼儀作法が存在しないのか？ そんな調子だから不平等条約を締結させられるんだ東洋バカが」

「何でそこまで言われなくちゃ……いい加減にしろ西洋バカ！」

と怒鳴ってしまつてから、あわてて口を押さえる。

しまった。ついにケンカを売ってしまった……。

だが、予想に反して、口キは怒り出したりはしなかった。

それどころか、かすかに——本当にかすかに——笑っているように見えた。

「ふん、それでいい」

「最近の貴様は気味が悪かったからな」

雷真は棒立ちになった。あまりに意外な言葉だった。

「街の混乱は聞いた。学生に動員がかかっているのも」

ロキがちらりと姉を見る。フレイが伝えにきたのか。

フレイは不安げにうつむいた。(ガルム) たちも落ち着かず、ビスビスと鼻を鳴らして、主人の顔色をうかがっている。大気に満ちる不穏な気配を、(ガルム) たちは感じ取っているらしい。もちろん、彼らの主たる(まもり)も。

そんな姉を見て、ロキは何やら決心したようだ。

ベッドから下りて、いつものハーフマントを肩に引っかける。

「ついてこい、ケルビム」

「I'm ready」

壁の大剣が応え、ふわりと浮き上がった。空中で人型に変形し、着地する。

そして、そのまま出て行こうとする。雷真はあわてた。

「つて、おい！ どこに行く気だよ？」

「愚図は好かないと言っただろう。……とつとと案内しろ」

雷真は驚いて目をむいた。それは、つまり――

「貴様のことだ。街の叛乱騒ぎに首を突っ込もうと言うんだろう？」

そこまでわかっていて、なお、力を貸してくれるのか。

雷真は胸が熱くなって、振りしほるように、小さな声で言った。

「……恩に着る」

「誰が責様などに恩を売るか。くだらん騒ぎで、夜会が妨害されるのは我慢がならない。

それだけの話だ自意識過剰バカ」

「札くらい素直に受け取れ反抗期バカ」

「黙れ幼児退行バカ」

罵り合いながら、病室を出て行く。

フレイは何か言いかけたが、何も言えず、二人を見送った。

### 3

ロキをイオネラの監獄に案内すると、雷真はすぐさま取って返した。

再び公邸を飛び出して、今度は医学部とは逆の方向へ走り出す。

もちろん、シャルを探しに行くのだ。

居場所は想像がついている。周囲には問題児のように見られているシャルだが、あれでけっこう真面目な優等生なのだ。だとすれば、当然……。

雷真は急いで夜会の交戦フィールドに向かった。

そこらには、既に多数の学生が集まっていた。

学生たちはシャベルやワイヤー、チョークなどを抱えて、忙しく立ち働いている。見たところは土木作業のようだが、大規模な魔法陣を構築しているのだ。

緊張感が漂い、学生たちの表情には不安が透けて見える。それでもなお、彼らは雨々と作業を進めている。指揮している者が優秀なのだろう。

邪魔をしないよう気を使いながら、雷真はフィールドの中に足を踏み入れた。

「ナタリー、時計回りに五度回れ。もう少し……そう、そこだ。ジヨセフ、線が歪んでい  
るぞ。もう一度、引きなおしてくれ。レオナルド、君は——」

となりの校舎から、よく通る声で指示が飛んでくる。

見上げると、窓際に女子学生が立っていた。

蜂蜜色の金髪が美しい。空は暗いが、そこだけスポットライトが当てられたように明るく見える。拘攣たる空気をまとう少女。あれが学生総代……？

いや、今はそれどころではない。

雷真は再びフィールドに目を戻し、シャルの姿を捜した。

幸い、シャルは悪目立ちするタイプだ。すぐに見つかった。

フィールドの隅っこで、呪符を貼っている。何となく遠巻きにされているようにも見え

る。彼女の帽子の上に、シグムントが乗っていた。

「シャルー シグムントー」

こちらに気付いた途端、花が咲くように、シャルは顔をほころばせた。

——が、何か嫌なことでも思い出したのか、すぐに不機嫌になって、

「ふん……何よ変態。何か用？」

雷真は困惑した。こいつ、何で機嫌が悪いんだ？

まあいつものことかと思ひ直し、すぐに本題に入る。

「頼みがある。今回は真正正銘、俺のわがままだ。もう貸し借りはないし——命の危険もある。正直、頭を下げるしかない状況なんだが……」

言葉通り頭を下げ、雷真は強く言った。

「頼む。俺と一緒に戦ってくれ！」

シャルはぼかんとして、それから、くすぐったそうに、

「ふん……仕方ないわね。そうまで言われちゃ——」

雷真が弾かれたように顔を上げる。その表情に期待の色を読み取ったか、シャルはあわててそっぽを向いた。

「や、やっぱり駄目よー 私は（十三人）のひとりとして、結界儀式の中核部分を担当しなくちゃならないの。貴方のわがままになんて付き合ってもらえないわ。年増にキスされて

鼻の下を伸ばしてるような男なんか——」

「儀式のことなら大丈夫だ。学院長から伝言がある」

「伝言……?」

「さつき、おまえ、メインストリートを破壊しただろ? だから、おまえは謹慎なんだ。結界儀式に参加しなくていいって——」

「ふっ——ふざけないで! あれは貴方がっ!」

いきなり怒り出すシャル。逆鱗げりりんに触れてしまったようだ。

「ああもうっ、思い出したらムカムカしてきたわ! 話しかけないで変態! 誰が貴方の手伝いなんか……っ!」

「頼む、シャル! おまえの力が必要なんだ!」

雷真はシャルの肩に手をかけ、真正面から見つめた。

シャルは見る間に頬ほを染めた。

視線をさまよわせ、上目遣いで雷真を見て、それからまた目をそらす。

見かねた様子で、シグムントがシャルにささやいた。

「シャルよ。事情くらい聞いてやってはどうだ?」

「そ……そうね。そこまで言われて、無下むげにするのも……可哀相かわいそうね!」

「力を貸してくれるのか?」



「見くびらないで。私は女王陛下から一角獣の紋章と北の領地を賜った、プリュー伯爵家のシャルロットよ。必死に助けを求めている者を、見捨てたりはしないわ」

「恩に著る！ これでイオを助けてやれる！」

びしっ、とビビ割れるような音がして、シャルの表情が強張った。

「……気が変わったわ」

「え、アレ……？ シャル？」

「何が〈高貴なる者の義務〉よー ふざけないでー」

「おい、何を急に怒り出して――」

「黙りなさいー ラスターカノンー」

炸裂音が大地を揺るがす。

早くも艦砲射撃が始まったのかと、学生たちが一斉に浮き足立った。

## 4

「あ、雷真！」「おかえりー♡」

待ちわびていたように、夜々と小紫が階段を駆け上がった。

イオネラが監禁されている、例の地下フロアへと降りる階段だ。



雷真は泥まみれの顔を二人に向け、力なく微笑んだ。

「おう、シャルとシグムントを連れてきたぜ……」

「あれ？ 雷真、何でボロボロなの？」

「気にするな小紫。何つーか、尊い犠牲だ」

「まさか雷真……シャルロットさんとそこの茂みで……」

「こら夜々！ おまえはどんな妄想をしてるんだー」

怒鳴りつけながら階段を下りる。その後ろに、不機嫌なシャルが続く。

魔法陣の一部を吹き飛ばしたので、結界儀式の現場を追い出されたのだ。シャルを叱る学生総代の迫力はライオンのようだった……のだが、それはまた別の話。

雷真はアヴリルの前を通過して、監獄の中央へと向かった。そちらにはロキとケルビムがいて、雷真の到着を待っていた。

「とにかく、これで雪月花の月と花に、〈十三人〉が二人もそろった」

一同を見回す。掛け値なしで、心強いと思った。

あとは、イオネラの作業だが……？

半開きの扉の向こうから、パチパチッと火花が爆ぜる音がある。ゴーグルをかけたイオネラが、何やら細かい作業の真っ最中だ。

長くなるのだろうか？ 一同が沈黙したまま見守っていると、

「あ、雷真くん。戻ってきたね」

向こうが気付いて、作業をやめた。雷真は急いでそちらに駆け寄った。

「そろそろ一時間だぜ。どうなった？」

「ちょうど今、切り札が完成したよ」

イオネラが誇らしげに何かを持ち上げ、雷真に渡す。

それは、鉄製の〈環〉だった。

いかにも無骨で、金属むき出しの外観。銅線が外周を這い、複雑な紋様を描いている。よく見れば、ルーンのようにも見える。また、至るところに、大小の魔石が埋め込まれていた。見るからに魔術装置だ。

「何だ、これ……魔輪？」

「それは首輪。こっちが腕輪だね」

もうひとつ、似たような〈環〉をこちらに寄越す。

「図面なしでやったから、こんな見た目だけど、性能は保証するよ」

「で、これは何なんだ？」

「も………、雷真くん、評価Xー」

「謎の存在かー」

「文脈から理解してよー 当然、エヴァの魔術回路に抵抗する装置だよー」

雷真（らいしん）ははっとして口をつくんだ。

ロキとシャルも興味深そうにこちらを見ている。

「時間がないから、超（こ）かいつまんで説明するよ。これはね、人形（にんぎょう）使いの支配（しやせい）権（けん）を強化（かうか）するの。エヴァの（絶対（ぜったい）王（おう）権（けん））に妨害（ばざい）されなくらい太（お）い『絆（きずな）』を構築（こうしき）する」

「絆……」

「コウヨクジンの話を聞いて、私（わたし）なりの解釈（かいしゃく）で再現（さいげん）してみたよ。ただし、あくまでエヴァの魔術（まじゆ）に対抗（たいかう）できるってだけで、純粋（じゆんすい）な魔力（まじり）増強（ぞうきやう）効果（こうか）はないから注意（ちゆうい）して」

「対エヴァ専用（せんよう）ってわけだな。どう使（つか）えばいい？」

「難しい（むずかしい）ことはないよ。腕輪（うでわ）の方（かた）を人形（にんぎょう）使いに、首輪（くびわ）の方（かた）を自動（オート）人形（にんぎょう）につけるだけ。術者（じゆしや）と人形（にんぎょう）の結びつきが強（き）くなるから、エヴァの魔術（まじゆ）を寄せ（よ）せない」

「よくわからねーが、これをつけてりゃ、学院（がくいん）の外（ほか）でも魔術（まじゆ）が使えるってことだな？」

「正解（せいけい）だけど、雷真（らいしん）くん評価（ひやう）Dー」

「正解（せいけい）なのに何（なに）で不可（ふか）なんだー」

「すごさを理解（りかい）してないからだよっー」

「それはひと組（ひとぐみ）しかないのか？」

二人（ふたり）の会話（かいわ）をさえぎり、ロキが鋭（えい）い質問（しつもん）を投げかける。

ぶんぶん怒（お）っていたイオネラだが、見る間に表情（へいしやう）がかげつた。

「ごめん……。もう一セット作ってたら、たぶん……。時間が足りなくなるよ」

「私も質問があるわ」

教授に対しては遠慮があるのか、シャルが固い声で言った。

「街の状況はどうなってるわけ？ その機巧だけでどうにかできるの？」

「それは私が答えてやろう」

背後から冷ややかな声が飛ぶ。

アヴリルだ。それまで黙っていた彼女が、冷笑を浮かべてこちらを見ていた。

「結論から言えば、まったくの無駄だな」

見事に一刀両断。希望を断ち切るように告げる。

「斥候が確認したところでは、相手の戦力は数万——もっとも、その大部分はブリキ人形の類、労働力として使われているタイプだ。魔術回路を内蔵していないものも多い。だが、エクスポに出版された高級品や、軍や警察の戦闘用自動人形など、純粋な（兵器）だけでも五千はくだるまい」

戦闘用の自動人形が五千体。それは到底、勝ち目のない数だ。

ロキは顔色も変えなかったが、シャルは唇を噛み、夜々と小紫は不安そうに雷真を見た。

そんな彼女たちを眺め、アヴリルは嫌みたっぷりに笑った。

「おまえたちはそれなりにできる魔術師だろうが、その装置を使えるのはたったの一人。」

「どうやら、ガキのヤンチャもここまでのようだな？」

「いや、そうとも限らないぜ」

雷真は軽く答えた。シャルも口キも、シグムントも夜々も、小紫もイオネラも、ほかならぬアヴリルでさえも、全員が驚いたように雷真を見た。

「皮肉よりも、建設的な意見が聞きたいね。敵の布陣——特に、首謀者エドマンド殿下の居場所はおわかつてるのか？」

「大まかにはわかつている。エドマンドは、そら、あのデカブツの中だよ」

「ダイダロス……」

雷真は哑然とした。意外だった。確かに堅固そうな船だが、居場所が特定されていては狙い撃ちにされる。市街に潜伏していた方が利口なはずだ。

「イオ。あんた、ダイダロスは自動人形だって言つたよな？ あれには、どんな魔術回路が搭載されてるんだ？」

「……わからないよ。それこそ国家機密だから。でも、嫌な予感がするよ」

「そうか？ 俺はむしろ勝機を見た思いがする——」

「モタモタしていいいいのか、（下から）『番目』とやら」

雷真が言い終わる前に、アヴリルがなぶるように言つた。

「湾外にはもう、帝国海軍の艦影が見えているそうさ。ジジイの交渉が失敗していれば、

すぐにも砲撃が始まるぞ。そうなれば、機巧都市は火の海だ」

そんなことは言われるまでもない。雷真はアヴリルを無視して、

「イオ。皇太子の野郎をぶっ飛ばせば、混乱は収まるんだよね？」

「……うん。もしも、破滅的な命令を下してしまっていたら、殿下を拘束しても命令は履行されちゃう」

案に相違して、イオネラはかぶりを振った。

「雷真くん、さっき私に訊いたよね。どうして、向こうは魔術を使えるのかって」

「ああ……」

「エヴァの〈絶対主権〉はね、効果時間が〈永久〉の魔術なの。その効果は〈イブの心臓〉を改竄すること」

「——改竄、ですって？」

シャルが驚いた声を出す。雷真にも、一応、その意味は理解できた。

それは、自動人形の〈存在〉を書き換えということ。

小紫が夜々の手を握る。夜々もまた、その手を握り返した。自動人形である彼女たちにとって、それは心を書き換えられるということだ。怖れるのも無理はない。

「コントローラーの命令を最優先するように改竄するの。つまり、エヴァが——エヴァの主である殿下が、エヴァを通して、すべてをコントロールできるってこと」



「……それで？」

「一度改竄されてしまえば、エヴァの魔術はもう効果を發揮しない。つまり、魔術にさらされている状態ではない……だから、彼らは魔術が使えるんだよ」

「回りくどいぜ。つまり、連中を止めるには、どうすりゃいいんだ？」

「改竄部分を修復する修正パッチを使うか——」

イオネラはひくつとしゃくり上げそうになり——しかし、こらえて言った。

「……エヴァを破壊するしかないよ」

重い。

昨日、エヴァと交わした言葉を思い出す。

イオネラの定義に照らすまでもなく、エヴァは人間だ。もう、十分すぎるほどに。

彼女を——イオネラの娘に等しい者を、殺さなければならない。

「……具体的な作戦に入れ。誰がそいつを使う？」

首輪と腕輪を示しながら、ロキが冷静な声で割り込んだ。

「そもそも、貴様の自動人形は学院の外で動けるのか？」

「多分。少なくとも、いろいろ——夜々の姉ちゃんは、普通に動けた」

「オレは実際に体験したわけではないが——ならば、（暴竜）のシグメントも活動できるだろう。だが、ケルビムは禁忌人形じゃない。安定した制御は難しい」

ロキが自分から難しいと言うのだから、そうなのだろう。

雷真ライマコはシャルの頭上、シグムントを振り向き、

「シグムント。この首輪なしで、飛べるか？」

「可能だ。私の飛翔ひしょうは、《魔剣マケン》の恩恵ではない」

「どういうことだ？ まさか、筋力で飛ぶわけじゃないんだろ？」

その問いには、イオネラが代わりに答えてくれた。

「《イブの心臓》のアプリケーションだよ。生命の魔術回路は、知性や、筋力や、五感や、いろんなものに変換できるの」

言われてみれば、そういう話を、機巧物理学の講義で聞きかじった気がする。

生命というくらいだから、生き物にできることはほとんどできるという。

「シグムントを設計した人形師は、きつと凄腕サイワンだったんだね。翼——飛ぶための機巧だよ

——と心臓を組み合わせて、基本性能の中に飛翔能力を入れたんだよ」

「なら、魔活性不協和の外つてわけだな？」

確かめるようにシャルを見る。シャルはむすつとして、釘を刺すように言った。

「飛べるには飛べると思うけど、ラストーカノンは撃てないわよ」

「いや、十分だ。十分に作戦の幅が広がる」

「オレの質問に答えてないぞ。誰がその首輪を使う？」

ロキが険しい目を向けてくる。雷真は手の中的首輪を握りしめながら、

「俺が決めていいのか？ 正直、おまえの方が頭はいいぜ？」

「貴様が始めた無茶だろう。最後まで責任を持って軟弱バカ。もつとも、頭のデキに自信がないなら代わってやるがな」

「バカ言うな傲慢バカ。頭のデキに自信はねーが、確かに俺が責任取るところだ」

雷真は一同を見回し、そして、相棒を指差した。

「最初がシャル、次にロキ、そして最後は俺たちだ。頼むぞ、夜々」

一同が息をのむ。なるほど——回して使うのか！

夜々は感極まった様子で、うるるつと瞳をうるませた。

「夜々はきつと、いいお嫁さんになります……！」

「そんな話はしてないからな？ 作戦の中核を担うって話だからな？」

「ねえ、ライシン……それで本当に大丈夫なの？」

シャルが不安げに見つめてくる。雷真は力強くうなずいた。

「俺の相棒は世界一の自動人形だし、何より、おまえたちがいる」

「いいカッコしちゃって、ムカつく無礼者ね。英雄気取りねー」

「俺に英雄は荷が重いぜ。自分のことだけで手一杯だ。さっさとバカ王子をとっちめて、

夜会に戻りたい——それだけさ」

その言葉は、ロキとシャルにも響いたようだ。

そう——こんなことで今期の夜会が中止にでもなれば。

魔術師協会が学院を見限れば。

ロキの夢も、シャルの夢も、果てしなく遠のいてしまう。

「それじゃ、行こう。作戦は走りながら詰めようぜ」

「わかったわ」「うむ」「ふん……」

シャルとシグムント、ロキがそれぞれに返事をして、動き出す。

雷真はアヴリルの前を素通りして、監獄を飛び出した。

その後ろを、もちろん、夜々と小紫もついてくる。

敵は五千。いや、もっとか。その包囲をいかくぐり、巨大な戦艦に乗り込んで、帝国の

皇太子をぶっ飛ばさなければならない。

この絶望的な状況下でも——俺を信じてくれる仲間がいる。

込み上げるものを推進力に変え、雷真は二段飛ばしで階段を駆け上がった。

## 5

学院の正門（ゲート）が見える広場に、所在なく立ち尽くす者がいた。

真珠色の髪を頭の右側で結った女子学生。その周囲には大型自動人形イレイドマンが五頭、主あそびを護るように（お座り）している。

言うまでもなく、フレイだ。フレイは駆けてくる者に気付き、手を振った。

「う……ライシン！」

「フレイ！」

目を丸くする。雷真らいしんはフレイのもとへ駆け寄りながら、

「どうしたんだ？ あんたは結界儀式ケツガイギシキつてやつに参加するんだろ？」

フレイはありったけの勇気を振りしほり、いつになく大きな声を出した。

「私も……行きたい！」

主の主張に賛同するかのように、五頭の（ガルム）たちが立ち上がった。

雷真は背後、連れてきた仲間たちを振り返った。

夜々やや、シャル、ロキと視線を巡らせ——はつきりと告げる。

「駄目だ。あんたにもしものことがあったら、ロキの野郎にぶつ殺される」

「オレを言いわけに使うな卑怯者ひしやうものが」

「じゃあ連れて行つていいのか？」

「ふん。足手まといはいらん」

「このダイナミック・バカー そんな言い方はねーだろ！」

「黙れドラステイック・バカー！ オレたち姉弟（きでい）のことに口を挟むな！」

ロキは雷真を押しのけ、フレイの前に差し出た。

「弱い者は大人（おとな）しく引っ込んでいろ」

――

「つまり、その……今度ばかりは、あんたを護ってやる余裕がない」

ぶっきらぼうな、しかし、不思議なぬくもりのある言葉。

横を向くロキのわきから、今度は雷真が言った。

「必ず戻る。メシでも作って待っていてくれ。今度は毒入りでないやつな」

慰めるように笑って、フレイの肩をぽんと叩く。

そのまま、フレイの横をすり抜け、駆けて行ってしまう。

シャルは「じゃあね」と言って。夜々と小紫（こむらさき）は気の毒そうな目をして。

一行は（ゲート）の手前まで駆けて行くと、そこで何やら会話を交わし、やがて、それぞれの魔術回路を起動した。

シグムントが巨大な竜に姿を変え、直後、全員の姿が見えなくなってしまう。

警備がそちらを見ていたが、雷真たちの動きにも、騒ぐ素振りを見せない。学院長から連絡が行っているのだろう。

ひとり取り残され、フレイは唇を噛んだ。

突きつけられた現実が、あまりに重く、痛い。

そう——シャルやロキに比べれば、フレイの実力は数段劣る。まして、魔術が使えないのでは、フレイは確かに足手まといだ。何せ、にぶい。体力もない。

ぼろり、と最初のしずくがこぼれ落ちた後は、もう我慢できなかった。フレイは立ち尽くしたまま、ぼろぼろと大粒の涙をこぼした。

黒い毛並みのオオカミ犬が、くうんと鳴いて、鼻先をすり寄せてくる。

「フレイさん……」

いきなり声をかけられて、フレイはあわてて涙をぬぐった。

声の方を振り向くと、そこにエプロンドレス姿の少女が立っていた。

亜麻色（あまいろ）の髪（かみ）の乙女。一見地味だが、目鼻立ちはシャルによく似ている。

「う、アンリ……」

「ご、ごめんなさい、立ち聞きなんかして！」

アンリはあわてながら、氣遣うように言った。

「あの……私なんかが、こんなこと言うのは、おこがましいんですけど……。フレイさんの気持ち、わかるんです。私も、ずっと同じことを思ってきたから……」

何を言おうとしているのだろうか？

フレイはきょとんとして、アンリの言葉待った。

アンリは少々ためらっていたが、やがて顔を上げ、珍しくはっきりと言った。

「でも、フレイさんには、できることがあるじゃないですか」

――

「フレイさんは、学院の人形使いで……私なんかと違って、すごい魔術師で。結界儀式に参加できるから――すみません私なんかが生意気言つて！」

「いや、アンリエットの言う通りだ」

はっとして、二人は同時に振り向いた。

いつからそこにいたのだろうか。近くの本陰に、キンバリーが立っていた。

「持ち場に戻れ、フレイ。君たち学生には、結界儀式に参加する義務がある」

「う……はい」

フレイはしょぼんとして、とぼとぼと歩き出した。

その後ろ姿を見送り、アンリはじんわり涙ぐんだ。

「フレイさん……可哀相かわいそうです」

「人には向き不向きがあり、才能の差がある」

冷たく突き放すような言葉。アンリはうつむき、きゅつとこぶしを握った。

そのアンリの肩に、そつと、キンバリーの手がかかった。

「だが、才能の差が実力の差ではない。実力の差が、結果の差を生むとも限らない。事実、



偉そうに説教を垂れている私にも、魔術の才などなかったのだからな」

そう言ったキンバリーの眼には、いつもの厳しさではなく、優しい光があった。

「フレイは大丈夫だ。己の弱さに気付いたのなら」

ほんとアンの肩を叩き、背中を押す。

「さあ、アンリエット。君は研究室に戻って、資料の整理をやっておけ。明日も、その先も、私の研究が滞らないように」

その言葉の意味するところを、アンリも悟った。

そう——明日も、その先も、きっと同じような日々が訪れる。

学院はなくなり、機巧都市も滅びない。

「——はい」

アンリは強くうなずき、スカートをひるがえして、駆け出した。

角を曲がる前に、一度だけ（ゲート）の方を振り向いて、手を合わせる。

そして、これから危険に飛び込む姉と、雷真のために、祈りを捧げた。





## Chapter 6 肉を斬らせよ



### 1

時間は少し戻って、雷真たち一行がフレイの見送りを受ける前。

学院の〈ゲート〉に向かう道中、雷真は作戦……と呼ぶにはあまりに大雑把な思いつきを、かいつまんで説明した。

「本気なの!? 本気でそんな、危ない橋を……?」

最初に文句を言ったのはシャルだった。

「ああ。この役目を頼めるか? おまえとシグメントにしかできないことだ」

「それは……いいわ。それしかないと私も思うわ。でも……」

「タイミングがシビアすぎる」

と、斬りつけるように言ったのはロキだ。難しい顔をして、

「〈魔剣〉の価値はオレも理解している。だが、呼吸が合わなければ——」

「おまえならやれる。そうだろ、ロキ?」

「……ふん」

「そんなことより、その後のことよー」

走りながら、シャルが雷真の腕をつかむ。

「貴方、本気で……そんなことができると思ってるの？」

「そうしなければ、イオは救われない。強引にでも、俺が奪う」

雷真は即答する。その言葉にはいささかの躊躇もない。夜々と小紫の姉妹は、感じ入ったように雷真の背中を見つめた。

「でも……だったら、最後はロキの方が適任……じゃない？」

ちらりとロキを見る。ロキは懐助そうにかぶりを振り、

「ダイダロスを沈めた後、敵がどう出るか予測できない。ケルビムの自我は弱い。〈絶対王権〉とやらが健在なら、オレは身動きが取れない可能性もある」

「なら、やっぱ俺がやるしかねーな」

「ふ、ふんー あきれたバカねー 当世随一のバカねー 稀代のバカ王子ねー」

「そんな稀代はいらねえー」

「そんなの……賭けじゃないー」

「博打を打つしかねーだろ」

初めから困難なことなのだ。

五千の兵力をかくぐり、ダイダロスに肉迫して、エヴァを停止させる。こちらは魔術が使えず、あちらは無尽蔵の魔力を持っている。

軽く見積もっても、絶望的な状況。おまけに、不利な不確定要素もある。

ダイダロスの魔術回路だ。

狙い撃ちにされるとわかっていて、敵は艦内に逃げ込んだ。おそろく、艦砲射撃くらいではびくともしない、強固な防衛魔術を搭載している……はずだ。

「でも、もし……上手いかなかったら……」

シャルは目を伏せ、不安げにつぶやいた。

「そのときは……その子を失うのよ……?」

ちらり、と夜々に視線を投げる。

小案が心配そうに夜々を見上げた。だが、夜々はすまし顔だ。もちろん雷真も。二人のそんな態度を見て、シャルは眉を吊り上げた。

「貴女も何とか言いなさい！ 破壊される危険があるのよ!」

「夜々は雷真のお人形。雷真を信じています」

「……ああそうー なら、勝手にすればいいわ!」

「心配してくださって、ありがとうございます」

「ただ誰も心配なんかしてないわよ。グリーンピース食べさせるわよ!」

シャルはそっぽを向き——それから、透明な声に覚悟を秘めて、つぶやいた。

「もし、貴女の心が改竄カクサンされて——貴女が意志を失って、ライシンを殺しそうになったら……そのときは、私が貴女を壊してあげるわ」

「お願いします。シャルロットさん」

一瞬、夜々の声も湿った。だが、夜々はすぐに舌を出し、

「でも、おあいにくです。夜々は女狐メキツのお世話にかなりません」

「言ったわね。こっちだつて貴女の面倒を見るなんてお断りよ」

ふふつと互いに笑い合う。

「じゃあ、俺オレのプランでやっていいか？」

雷真が最終確認をする。シャルがうなずき、夜々と小紫もうなずいた。ロキは何も言わなかったが、反対意見を言わなかった。……決まりだ。

間もなく、機巧都市キコウシティの存亡を賭けた戦いが始まる。

## 2

「……仕掛けてきませんか？」

ダレンダン將軍は主あるじの恩恵を確かめるように言った。

將軍の言葉通り、ブリッジの窓に映される風景は平穏だ。霧雨に濡れる大通りは、死に絶えたように静か。歩哨に立つ自動人形にも動きはない。

湾外には海軍の戦艦が集結している。だが、近付いてこない。エヴァの魔術が届かない距離で、不気味な沈黙を守っている。

市街のどこにも、かれこれ一時間以上、動きがない。

あるいは、もう打つ手がないのか。

だが、エドマンドは意外なことを言った。

「どうやら、エドワード・ラザフォードが小細工を弄するつもりらしいな」

「小細工、ですと？」

「耳を澄ませ、ダイダロス」

エドマンドの命を受けた途端、突然、雑音混じりの会話が聞こえてきた。

「待機を続行。各艦は砲撃態勢のまま待機せよ」

「繰り返す。別命あるまで待機。勝手な行動はするな！」

將軍は舌を巻いた。

「これは……無線を傍受したので？」

「驚くことかい？ ダイダロスは軍用艦なんだぜ？」

底知れない方だ、と將軍は思った。つい数時間前、エドマンドは機巧魔術を解るような

発言をしていた。なのに、この周到さはどうだ。エヴァの（絶対王権）アブソリュート・キングダムにしても、エドマンドは見事に使いこなしている。

恐るべき魔術の素養。機巧魔術にも通じている。ただ野心に溺れ、大言壮語を吐くだけの男ではない。あるいは——本當に世界を統べる日がくるのだろうか？

一方で、それは不可能だと断じる自分もいる。

この街には怪物がいる。エドワード・ラザフォードという、老獪な化け物が、將軍は自嘲した。いや、もう覚悟を決めるときだ。

若く、それゆえに迂闊で、しかし計り知れない才覚を秘めた——このエドマンド陛下に、私はついていく。

「さて、ラザフォードはどう出るかな？」

エドマンドは頰杖をつき、目を閉じて、思考の海に沈んだ。

「学生をダイダロスに差し向ける……？ いや、この（絶対王権）の嵐の中、ともに動ける人形使いなど……あのマグナスくらいのもものだろう」

「——エリアーデ教授」

ふと、その名を思いつく。同時に浮かんだ懸念を、將軍は主君に奏上する。

「逃げた彼女が、エヴァの対抗策を持っているのでは？」

「どうかな。それに、イオはラザフォードに始末されただろうな」



「始末……ですと？ それはその、いささか、乱暴な話では……？」

「彼女は学院の存続を危うくする。そんな危険物を抱え込むほど、ラザフォードは甘い男じゃない。もつとも、対抗策を引つ張り出した可能性はあるか……」

突然、強烈な閃光がブリッジの窓を焼いた。

軍人だけに反応が速い。將軍がとつさにエドマンドを背中に隠す。

だが、窓が破られることはなく——それどころか、船体は揺れもしなかった。

光の奔流はダイダロスの舷側をかすめ、虚空にのまれていった。

「これは……《魔剣》の光ですな」

「ほう、やはり博識だな。確度はどのくらいだ？」

「十中八九、と言ったところで。戦場で幾度か見たことがあります。しかし……」

かの《魔剣》を浴びたのなら、ダイダロスは消滅してもおかしくない。

「信じられませんな。ダイダロスはどのような魔術を積んでいるのです？」

「《空間歪曲》。砲撃も、魔術も、ダイダロスには直撃しない」

「砲弾ではなく、射線そのものを歪曲させる魔術……ですと？」

絶対に沈まない船というのは、そういう意味か——

周囲の空間を自在にゆがめることができるならば、仮に《空間転移》を使つたとしても、

ダイダロスに突入することはできない。

外界からの攻撃を一切寄せつけず、攻め込まれることもない。

なるほど、ここより安全な場所は、機巧都市のどこにも存在しないだろう。

「〈魔剣〉の力か。ふ……と……ん因果だな」

過去を懐かしむように目を細め、エドマンドは笑った。

「ご存知なのですか？ この〈魔剣〉の主を」

返事の代わりに、小窓のひとつをあごでしゃくる。

小窓には、銅色の竜が大写しになっていた。

その背に、妖精のような美貌を持つ、金髪の少女が乗っている。

少女が着ているのは学院の制服だ。気の毒に、雨でブラウスが濡れている。

「プリュー伯爵の娘だよ。そう言えば、学院に在籍していた」

「……陛下。気がかりなことがあります」

「ああ。どうやったのかは知らないが、彼女、魔術が使えるようだ」

竜が滞空しているのは学院の外だ。つまり、結界の外で魔術を行使した！

「君の言った通り、イオが何か、おかしいことをしたのかな？」

主君の視線を追って、將軍もそれに気付いた。

羽ばたく竜の角に、鉄製の輪が引っかけてある。

優美な竜の姿にはあまりに不釣り合い。どう見ても、装飾品の類ではない。

「魔術装置だな。あれが奇跡の原因だ。イオめ、とことん俺に歯向かうか……」

「降下ー」

思わず声が出る。窓のひとつを示し、將軍は口早に叫んだ。

「ご覧ください。街で暴れている者がおりますー」

「ほう……こいつは面白い」

ちようど竜の真下あたり。学院にほど近いストリートで、こちらの自動人形を相手に、大立ち回りを演じている者がいる。

銀髪ぎんぱの少年だ。細い体軀たぐに不似合いな、大型の剣を振り回している。筋力も、反射神経も、軍の精銳兵士なみだ。

「あの色、〈約束された子ども〉プロミスド・キッズだな。〈十三人〉テッラズの〈劍帝〉けんていくん。ちようどいい。あの自動人形も手に入れたかと思つていたところさ」

エドマンドは不敵に笑つて、誰にともなく拍手した。

「役者がそろつてきたじゃないか。〈魔劍〉マジックの竜に、機巧の極致。手中にできれば、どちらも申し分のない戦力になる。楽しませてもらおう」

直後、再び〈魔劍〉の光が閃き、エドマンドの酷薄な笑みを照らし出した。

「派手にぶちかますわよ。ラストーカノン！」

シダムントのあざとが閃き、喉の奥から猛烈な閃光が噴き出した。

落雷のような衝撃。巨大な破壊力が甬を切り裂き、一直線にダイダロスへと殺到する。

その様子を、雷真はアパートの屋上から見上げていた。

学院の（ゲート）を出てすぐのところ。石造りのアパートの上に、雷真と夜々、小紫が待機していた。となりには、大剣をかついだロキもいる。

「雷真ー あれを見てくださいー」

夜々がダイダロスを示す。ラストーカノンの光が、ダイダロスを回り込むように歪曲し、反対側へと抜けていた。

ダイダロスは無傷だ。思った通り、防御の魔術を搭載している！

雷真はロキを振り向き、確かめるように訊いた。

「どうだ、ロキ？」

「ふん……貴様が考えた通りだ」

「私も感じたわ！」

シヤルが高度を下げ、上から声をかけてくる。

「今の瞬間、シダムントにかかる負荷が軽くなったの」

「OK。なら、作戦通りいけるってことだ」

シャルは張り詰めた顔で、ロキは面倒くさそうに、それぞれうなずいた。

「じゃあ、やるわよ……ラスターセイバー！」

シグムントが収束した光線を放つ。その光を維持しながら、シャルは腕輪と首輪を取り払い、雷真らいしんに向かって放り投げた。雷真はそれをロキにパスしつつ、

「行くぞ。しくじるなよ！」

「貴様が言うな、落第生！」

ロキと一緒に、アパートの屋上から飛び降りた。

高さは四階ほどもある。明らかに危険な行爲だが、二人の怪我人は躊躇ちゅうちよしない。

夜々と小紫の姉妹もそれに続く。

夜々は空中で雷真を抱え、壁に指を突き立てて、速度を殺して着地した。

一方、ロキはケルビムの魔術で逆噴射し、危なげなく降り立つ。

彼らを待ち受けるのは、街を巡回していた自動人形だ。

ブリキの機械人形や鋼鉄製の軍用人形など。人間用の銃器で武装している。ライフルや

散弾銃、オートマチックの拳銃もある。

「面倒だな。回り込もうぜ」

「バカが。蹴散らせればいいだけだ——ケルビム！」

わずかな魔力で魔術回路（熱風操作）を起動。巧みなコントロールで噴射を操り、己の筋力を補う。そして、紫電のように動いて、自動人形たちに斬りかかった。

銃弾の嵐にも怯まない。大剣は精確な軌跡を描き、自動人形を両断した。優れた魔術師！ のみならず、剣の腕もかなりのものだ！

「どうしますか、雷真？」

夜々が訊いてくる。訊くまでもなく、答えがわかっている顔だった。

「光焰（くわうえん）二・四（に・し）結（むす）！」

「はい！」

小紫をその場に残し、夜々が駆け出す。その後ろには、びったり雷真がついていた。

夜々が先行し、銃弾を受け止める。その背中から雷真が飛び出し、ブリキ人形に蹴りを見舞った。銃を叩き落とし、奪い取り、発射して、相手をかく乱する。

そうして注意がそれた敵に、夜々がとどめの一撃を見舞う。

ロキが周囲を見渡し、鋭く叫んだ。

「新手（あらた）がくる。貴様（あなた）はもう行け！」

「言われなくてもそうする！ 調子に乗って怪我するなよ魔力バカー！」

「誰（たれ）に言っている！ 自分の心配をしろ体力バカー！」

お互いに笑みを交わし、一秒。

雷眞は小紫に合図を送り、それと同時に魔力を渡した。

小紫の魔術回路（八重霞）に魔力が入り、ただちに効果が現れる。

夜々と雷眞、小紫の輪郭がぼやけた。あたかも、雨に溶けるように。

そして、それ以降、姿を現さない。

ロキはそれを見送り、握った大剣に語りかけた。

「起しろ、ケルビム」

「The very」

大剣のパーツ結合がゆるみ、バラバラと崩れて、人間的なシルエットになる。

ごうつ、と轟音を響かせて、ファイアボールが襲ってきた。

突っ込んでくる火炎に、人型のケルビムがブレードを振り下ろす。火炎は二つに割れ、

ロキをさけて、濡れた地面に激突した。

その爆発にまぎれ、続々と新手が現れる。アバートの上から、路地の向こうから、マン

ホールの下から、いくつもの自動人形が顔を出す。

いかつい巨人や、妖精のような女。黒塗りの甲冑に、昆虫じみた六本足。神話や伝承に

モチーフを持つ、見るからに高級品の自動人形——

どの顔にも見覚えがある。

何者かに奪われたという、（手袋持ち）所有の自動人形だ。





「数は七、八……十体か。オレたちの敵じゃないが——ぬかるな」

[I'm ready]

ロキは巨大な魔力を解放し、ケルビムへと送り込んだ。

4

先ほどの「光の大砲」とは、明らかに違う攻撃だった。

こちらは「光の槍」とでも言えがいいのか。細く収斂した光は、第一射よりも数段弱い。その代わり、途切れない。十数秒が経過しても、まだ照射が続いていた。

「これほどに魔力を絞り込むとは……さすがはブリュエー家の血筋……」

將軍は目をむいた。水道をしほれば水滴になり、声をしほれば音がかかるのと同様、魔力をしほれば魔術は不完全になるはずだ。だが、あの少女は完全に（魔剣）を制御して、しかも、長時間にわたって維持している——

そして——

「ご覧ください陛下。先の（劍帝）とやらず、魔術を使っております」

小窓のひとつを示す。その向こうでは、（劍帝）が機巧人形とともに暴れ回っていた。まさに一騎当千。短剣を飛ばし、ブレードを振って、人形をなぎ倒していく。

聞かされていた話と食い違う。エヴァの魔術が及ぶ範囲——市街全域では、自動人形は自由を奪われ、魔術も使えないはずだった。

だが、エドマンドはうろたえた様子もない。むしろ涼しげな声で、

「だろうな」

「どういう……ことですか？」

「見ろよ、將軍。エヴァは甲板にいるんだ。この意味がわかるだろう？」

今度はエドマンドが小窓を示す。ダイダロスの甲板を映したものだ。

エヴァは棒立ちになっていた。いつの間にか、歌をやめている。

「……なるほど、魔活性不協和の原理——」

まだ《魔剣》の攻撃は続いている。

それを回避するため、ダイダロスは魔術回路を起動している。

ダイダロスというボディに、ふたつの魔術は共存できない——

つまり、甲板上のエヴァは、魔術を使うわけにはいかないのだ！

なるほど……これはジレンマだ。守りに徹すれば、敵の魔術を許す。一方、敵の魔術を

封じようとすれば、こちらの防衛が甘くなる。

「……陛下、エヴァを降ろしてはいかがか？」

「降ろす？」

「ダイダロスの外に出せば、どちらの魔術も使えます」

「愚かなことを言うなよ。それこそが敵の狙いだと思わないのかい？」

エドマンドは一笑に付す。その横顔は豪しげですらある。

將軍は感心した。なるほど、主君の言うことはもつともだ。

今、エヴァを降ろせば、そちらを（魔劍）で狙い撃ちにされる。

エヴァはこの叛乱のまさに（心臓）だ。

エヴァがあればこそ、エドマンドの無謀を、誰も止められないのだ。

「しかし、陛下。このまま、というわけにはまいりますまい」

「何を怖れているんだい、將軍？ 君ほどの男がさ」

エドマンドはからかうように笑った。

「この状況は決定打にならない。ブリューの娘は確かに一流の魔術師らしいが、尽きない魔力を持つ人間など存在しない」

ダイダロスを襲う光は、いずれ途切れる。

それまでに、（劍帝）が接近できなければ、この作戦は不発だ。

しかも、接近できたところで、歪曲した空間に飛び込むことはできない。

「……侮られましたな、陛下。敵の動きをご覧ください」

エドマンドが不可解そうな視線を寄越す。

「(剣帝) はあの位置から、まったく進めていません」

「けっこうなことじゃないか。足止めできているということだ。あいつの狙いは、足もとからダイダロ스에近付くことなんだろうからさ」

將軍の言葉通り、(剣帝) にも、ブリューの娘にも、まだ動きはない。

——そのことが、おかしいのだ。決定的に！

「そんな浅い策ではありませんまい。敵は、あの二人だけですかな？」

「(十三人) 一人だけでも相当な戦力だろう？ 情報では、学院は艦砲射撃に備え、結界

構築に取り掛かっている。ほかに戦える奴など——」

「おりますとも。先刻、エリアーデ教授を逃がした、あの少年です」

はつとする。一瞬後、エドマンドの顔に楽しげな笑みが浮かんだ。

ダイダロスを操り、視点を次々切り替えて、その姿を探す。

黒髪の東洋人。まだ少年だ。どこか人を食ったような、あの小僧——

だが、エドマンドが標的を見つけ出す前に、ダイダロスの魔術回路が停止した。

気がつけば、(魔剣) の照射がやんでいる。

ブリューの娘が力尽きたのか？

事実を確かめようと、視線が泳いだ瞬間、ブリッジに警報が鳴り響いた。

「陛下ー 甲板ですー」

將軍が怒鳴り、甲板の映像を示す。

主砲と副砲が映っている。歌を止めたままの、エヴァのきやしゃな背中も。……いや、ダイダロスが見せたいのは、エヴァでも、まして砲身でもない。

エドマンドと將軍が探していた、例の少年が――

美しい自動人形オートマトンを連れ、不敵な笑みを浮かべて、甲板上に立っていた。

## 5

「思ったより簡単に上がったな」

雷真ライマは脂汗を浮かべながら、声だけは余裕ありげに言った。

夜々の跳躍は砲弾のような勢いだった。肩を借りていた雷真も猛烈な加重にさらされた。おかげで、くつついたばかりのあばらに、再びヒビが入ったらしい。

それでも、最初の賭けは成功だ。ラスターセイバーの照射がやみ、ダイダロスの魔術が途切れた瞬間、エヴァの歌が始まる前に、上手く飛び移ることができた。

（これで、博打ばくだいはあとふたつ……！）

「雷真、気をつけてくださいー」

夜々が雷真をかばって前に出る。

巨大な砲身が並ぶ甲板。そこに、緑色の髪の乙女が立っていた。天才エリアーデの手による自動人形——エヴァンジェリンだ。

エヴァはうつろな瞳で雷真と夜々を見つめ、そして唇を聞いた。感情のまったく感じられない、冷たい歌を口ずさむ。

刹那、強烈な魔力が大気に満ち、夜々の身体が強張った。

夜々の体を通して、雷真にもその変化が感じ取れる。《絶対主権》の魔術にさらされて、夜々の《金剛力》が効果を失っているのだ。

たとえ魔術を封じられていても、夜々の身体能力は人間を凌駕している。手負いの身だが、雷真自身の身体もある。このままエヴァを抑え込めれば——

だが、もちろん、そう簡単な話ではなかった。

「ようこそ、王の旗艦ダイダロスへ」

大仰な台詞を吐きながら、誰かが甲板に上がってきた。

機械仕掛けのエレベーターから、黒い髪、黒い衣装の美青年が降りてくる。

黒一色の装束がそう見えるのか、それとも生まれによるものか、雨に濡れたその姿は、どこか妖しく、妖気のようなものを漂わせていた。

「よくもまあ、ここまで上がってこれたもんだ。歓迎するぜ」

「……わざわざご本人が出てきてくれるとはな」

ここまで侵入を許したというのに、相手には緊張も、動揺もない。  
のまれる。この男の存在感到。

雷真らいしんは下っ腹に力を入れて、自らを奮い立たせ、力強く言った。

「お目通りがかない恐悦至極きょうえきしごくだぜ、黒太子さま」

「ああ、苦しくない。我、大英帝国第一王子が汝なんにに問おう。何の用だい？」

「エヴァを返してくれねーか？ そいつ、イオの大事な娘なんだ」

ぶつ、とエドマンドは噴き出した。くつくつと楽しげに笑いながら、

「交渉の仕方がわかってないな、少年。絶対的な優位を持つ側に、何の利益ももたらさず、無理を要求してどうする？」

「無理が通れば道理が引つ込むって言うぜ。あんたは話がわかる方だと思ったのさ」

「ほう。なぜそう思った？」

「わざわざご尊顔を見せてくれたからさ」

「だから相談に乗るとでも？ 実に甘ったれた思考だな。俺おれはただ、王に嘯ささみつく愚か者を直ただに見物したかったんだ」

「……交渉決裂なら、力尽くでいかせてもらおう」

「恐れ入ったー 大した度胸だー」

下手な役者に浴びせるような、おざなりな拍手をする。

「面白い奴だな。おまえは一体、何者だ？」

「赤羽雷真。日本の傀儡師だ」

「はるか極東からご苦勞。ではこちらも名乗ってやろう。俺は――」

「黒太子エドマンド殿下だろ？」

「いいや。エドマンド陛下さ」

利那、巨大な魔力がエドマンドからほとばしった。

それはエヴァの魔術を強化する。たまらず、夜々がうめく。強大な（支配力）にさらされて、稼働レベルに悪影響が出たらしい。エドマンドの魔力はますます大きくなる。それはエヴァを中継することで、際限なく拡大するようだった。

やがて甲板後部のハッチが開き、艦内から自動人形が現れた。

その数、十数体。機械仕掛けの大型人形。英国陸軍の正式採用タイプだ。

フレイの（ガルム）に似ているが、こちらは完全に機械で造られている。ボディも骨格も金属製。動きはなめらかだが、歯車がキリキリと音を立てる。

犬たちは一斉に口を開けた。喉の奥で、銃口のようなものが光る。

（発射口――！）

雷真が夜々を抱えて跳ぶのと、銃口が火を噴くのは、ほとんど同時だった。ただの銃撃ではない。火炎の塊、ファイアボールだ！



油くさい臭いが漂う。どうやら、魔術の炎に油を注いで撃ち出したらしい。

ファイアボールが雷真の頭上を吹き抜ける。横っ飛びに跳んだ雷真は、きわどく火炎の砲弾をかわし、夜々と一緒に甲板を転がった。

夜々が素早く跳ね起き、第二射を素手で弾く。

「夜々ー」

「平気……ですー」

いや、平気なはずはない。夜々の腕は熱に焼かれ、肌がただれていた。

あたりにはエヴァの歌が満ちている。夜々の《金剛力》はまともに機能しない。

「何だ？ 何か策があつて現れたと思つたが……」

エドマンドが手をあげ、大たちに攻撃をやめさせた。

「よく見れば、例の首輪？ が、ないな。どうするつもりだったんだ？」

「そんなもんがなくなつて、あんた一人くらい、止めて見せるさ」

雷真は強がつて言つた。エドマンドは目を丸くして——笑い出した。

「ははっ………氣に入つたー おまえにその氣があるのなら、俺の側近に守り立ててやる。どうやらその自動人形、エヴァに劣らず高級品のようだ。《絶対王權》に抵抗しながら、それだけ動けりや大したもんだよ」

「俺の相棒は世界一の自動人形だ」

「いいねえ、ますます欲しくなった。どうだ、俺の配下になるか？」

「断る」

「断っちゃうのか？ 俺は重用してやると言っただぜ？」

「主がバカだと、ロクな目に遭わないからな」

「小気味いい返事だ。それじゃ、人形だけもらおうとしよう」

切り替えが速い。エドマンドは怒るでも笑うでもなく、ただ淡々と、実に無造作に、大  
たちに攻撃命令を下した。

再び始まるファイアボールの掃射。きわどくかわす雷真と夜々。熱風にあふられて雷真  
の髪が焦げ、嫌な臭いが鼻についた。

雷真を外した火炎は、あるいは真下の市街に落ち、あるいはデッキに激突した。鋼鉄で  
補強されたデッキが、衝撃と高熱で変形する。だが、エドマンドは意にも介さず、さらに  
攻撃を続行させた。

「そこだ、ダイダロス」

雷真が大きく飛び退いた瞬間、エドマンドの人差し指がこちらを向いた。

ダイダロスの副砲が、いつの間にか、雷真のすぐ側<sup>そば</sup>に存在していた。

とごんつ、と猛烈な爆発音が生じる。

砲身が火を噴いたのだ。雷真は衝撃に吹き飛ばされ、甲板に叩きつけられた。

動きが止まった雷真を、機械犬の発射口が一斉にとらえる。死ぬ———と思った、その瞬間。

「雷真っ——」

夜々のひたいが発光し、動きが急激に加速した。

（金剛力………？）

倒れたまま、ぼんやりした頭で考える雷真。

その眼前には、五発のファイアボールが迫っていた。

夜々がすべり込み———大爆発が生じる。

爆風。そして、灼熱の乱舞。

燃え盛る火炎の中から、完全な無傷で、夜々が姿を見せる。

そのひたいにはダイヤモンドのごとく輝く、小さな角があった。

髪がキラキラと、まるでシャルのそののように、金色に輝いている。

——あの力だ。

夜々に秘められた、あの不可解な力が発現している………!?

考えている暇はない。雷真はやぶれかぶれで叫んだ。

「夜々———そのまま行け———」

夜々が甲板を蹴る。鋼鉄のデッキに深い足跡を刻み、夜々は跳んだ。



虚を突かれ、エドマンドに隙が生じる。

エヴァの《絶対主権》にさらされながら、明らかに魔術を起動して迫りくる者——その存在が、すぐには理解できなかったようだ。

夜々は一瞬で甲板を駆け抜けた。吹き抜けざま、機械犬を切り裂いている。

スクラップになる機械犬。エドマンドが目を見開く。その眼前にまで夜々は迫っている。渾身のこぶしをエドマンドに叩き込もうとした、そのとき。

どかつ、と横から蹴り飛ばされた。

夜々は吹っ飛び、雷真を巻き込んで、ごろごろと甲板上を転がった。

「陛下——慢心めさるな——」

大砲に匹敵するような怒声が響く。いつの間にか、初老の将校が立っていた。

帯剣した青年を従えている。青年は人間のようには見えだが、自動人形だ。魔術回路を起動することなく、あの状態の夜々を蹴り飛ばした。基本性能が高い。

夜々が身を起こそうとする——が、青年はもう、間合いを詰めていた。

なめらかな動きで抜刀、夜々のわきの下から、背後の雷真を狙う。

雷真はたまらず後退したが、兩で足をすべらせ、真後ろに倒れた。

そこは既に、舷側ぎりぎりの場所だった。

あるいは、初めからそうすることが目的だったのか。

雷真はあっさりと手すりを乗り越え、ダイダロスの外へと投げ出された。

「雷真ーっ」

夜々が悲鳴をあげ、追いつがってくる。いつの間にかひたいの角は消えていて、髪の色もいつもの黒に戻っていた。

夜々の手が雷真をつかむ。だが、重力は容赦なく二人を引きずり下ろす。

エヴァにここまで迫りながら、取り戻すことも、破壊することもできなかった。

だというのに、落下する雷真は笑っていた。

雷真の目には、もうそれが映っている。

雷真を見下ろす将校の背後。大剣を振りかぶり、天から降ってくる者がいる。

雨を受けて、真珠色の髪が光る。(剣帝) ロキだ！

ロキの腕には例の腕輪があり――

ケルビムの柄には、例の首輪がかけられている。

瞬時に膨れ上がるロキの魔力。その膨大な量、圧倒的なプレッシャーに、エドマンドも、

将校も、同時に天を振り仰いだ。

が、遅い――

ロキがケルビムを振り下ろした瞬間、ダイダロスの舷側が真っ二つに割れた。

超高熱の刃がガス囊を裂く。途端にガスに引火して、大爆発が起こった。

爆発はダイダロスだけではなく、雷真と夜々をも吹き飛ばす。全身をバラバラにされるような痛みに、雷真は苦悶の叫びをあげた。

荒れ狂う風圧にあおられながら、夜々はどうか体勢を立て直した。建物の壁を蹴って減速、がりがりと爪を立てつつ、雷真をかついで着地する。

夜々の肩が腹に食い込み、雷真はたまらず血を吐いた。

「雷真!? しつかりしてくださいー!」

「だい……じようぶ……だ……!」

せき込みながらの返事。涙ぐむ夜々に、無理やり作った笑顔を見せる。

「雷真! 姉さまー 平気!?」

ぴょんと跳んで、小紫が近くの建物から下りてきた。

雷真はそちらにも笑顔向け、息も絶え絶えで礼を言った。

「よくやってくれたな……小紫。おかげで連中、ロキに気付かなかったぜ……!」

雷真がダイダロスに接近できたのは、小紫の〈八重霞〉が効いていたからだ。

そして、〈八重霞〉が効果を發揮できたのは、シャルのおかげ。

接近し、乗艦を果たした雷真——だが、それは囹圄だ。

雷真が敵の注意をひきつけているあいだに。

イオネラが用意したあの〈環〉を使い、ロキがダイダロスを沈める。

これで博打は二つ成功。ダイダロスの轟沈は確実だ。だが、残る博打を成功させるために——確かめておきたいことがある。

「さあて、夜々……。分の悪い賭けだが……付き合ってもらうぜ」

「おともします雷真。雷真の行くところ——地獄までも」

「上等だ」

雷真は意識を研ぎ澄まし、心を鎮めて、ダイダロスを見上げた。

魔力の流れを読み、〈心臓〉の位置を探る。炎に包まれ、徐々に高度を落とすダイダロス。その中央、やや後部より、大きな魔力が集中している。

見えた——あそこだ！

雷真は全身全霊の魔力を練り上げた。

両手を胸の前に。印を結び、丹田に力をたくわえ、氣息を整える。

口ずさむのは一族に伝わる呪言。梵語にも似た独特の響き。

かつては成功の兆しすら感じられなかった。だが、幾度かの実戦を経て、死線を乗り越えて、雷真の精神力と魔力はかつてないほど研ぎ澄まされている。

生死をわかつ緊張感の中でなら、あるいは——

（紅異陣に三つの門あり——）

秘伝を脳裏に思い描き、そして、両手を夜々に突き出す。



向けるのは十本の指。それぞれがてのひらになるイメージ。そして、練り上げた魔力を爆発させ、指から夜々に送り込む！

「吹鳴絶衝——」

雷真の両眼が紅く光る。魔力を受け、夜々の全身に力がみなぎった。

エヴァに干渉され、少しも動かなかった魔術回路が、じわじわと動き始めている！  
夜々は脚に力を溜め、雷真の指示を待つ。そして——

「（ひささき太刀影）」

どんっ、と地を揺らして、夜々が消えた。小紫が衝撃に驚き、悲鳴をあげる。

夜々はもう、はるか上空だ。そして、ダイダロスの船底が夜々の形に欠けていた。  
夜々は雷真の魔力を受け、見事、〈金剛力〉を発揮したのだ。

（できた……！）

ほっと息をついた——瞬間、雷真の背中が風船のように弾け飛んだ。

以前、シャルにもらったお守りが、粉々に砕け散る。

小紫の悲鳴をどこか遠くに聞きながら、雷真は前のめりに崩れ落ちた。



# Chapter 7

## 天の玉座を謳う歌姫

### 1

ファイアボールの熱風が頬をかすめ、シャルの金髪を軽く焦がした。

シャルはシグムントの首にしがみつき、吹き抜ける火球をやりすごす。と同時に、魔力を練り上げ、シグムントの背中に流し込んだ。

シグムントは百戦錬磨。シャルが命じるまでもなく、既に敵に顔を向けている。聞いたあごからラスターカノンがほとぼしり、敵集団を吹き飛ばした。

だが、壊れた人形を踏み越えて、続々と新手がやってくる。

亡者の群れのように、生気がなく、自我を感じさせない集団。

彼らは何かに衝き動かされるように、それぞれの魔術回路を発動させ、あるいは炎を、あるいは冷気を、あるいは武器を振りかざし、飛びかかってくる。

「ラスターセイバー！」

なぎ払う光。前線の自動人形が一行、下半身を断ち切られた。だが、彼らは止まらない。



地面を這いずりながら、なおも向かってくる。

彼らを止めるには、心臓を破壊するしかない。だが……。

敵集団を睥睨しつつ、シグムントは固い声で言った。

「敵を屠れ、シャル。このままでは君が死ぬ」

「だめよー 殺さないわー」

彼らは操られているだけだ。本当の主から引き離され、無理やり戦わされている。

「……君の志は尊い。だが、今は驕りというものだ。戦場で情けをかけることが許されるのは、優位に立っている者だけだ」

シャルは奥歯を噛んだ。シグムントの言うことはもつともだ。

それでも、できない。彼らを殺すなんて……

ふっと、めまいがした。こんな状況だと言うのに、強烈な眠気が襲ってくる。

（魔力切れ……!?）

ラストセイバーを放ち続けた反動だ。思わず集中が途切れた一瞬に、シャルの肩口をかき爪が斬り裂いた。

巨大な猛禽、鳥型自動人形がシャルのわきをすり抜ける。肩を裂かれてバランスを崩し、シャルはシグムントの背中から転げ落ちた。

「シャルー」

さしものシグムントも狼狽する。倒れたシャルに、敵が一斉に群がった。

奇怪な小鬼や、甲冑に身を包んだものや、ブロンズの魔女や、巨大な昆虫のようなもの

や——とにかく、たくさん。

抵抗しようと魔力を練る——が、無駄だ。

いつの間にか、例の（歌）があたりに満ちている——

（え……？ 私……こんなところで……死ぬの？）

死を直感する。しかし、シャルの体が踏みつぶされることはなかった。

がおんつ、という轟音が兩粒を裂き、自動人形たちを吹き飛ばす。

破片をばらまきながら砕け散る自動人形たち。

ネジが一本、頬に当たり、シャルはようやく我に返った。

誰が助けてくれたのか。振り向くシャルの視線の先に、彼女がいた。

「フレイ……」

五頭の（ガルム）を引き連れて、フレイが立っている。

シャルは飛び起き、敵の動きを警戒しながら、フレイに詰め寄った。

「貴女、どうしたのよ！ 貴女は結界儀式に参加してるはずでしょうっ？ こんなところ

に出てきて、貴女に何かあったら、ロキが——」

「待て、シャル。まずは礼が先だ」

シグムントに諭諭され、シャルはやつと冷静になった。

「そ、そうね。その……ありがとう。助かったわ」

「う……どういたしまして」

「それで、どうして出てきたのよ。ロキにだめつて言われたじゃない」

「私が誘ったんだよ、シャルちゃん。(対抗魔術)アンチマジックがもう一セットできたからね」

という声は、フレイのさらに後方から聞こえた。

ひょこつ、と路地裏から白衣の少女が顔を出す。

「教授！ でも、どうして……だって……学院長は？」

イオネラは重要参考人として拘束されているはずだ。

「直談判ちかたんぱんして、取り引きしたんだよ」

「取り引き……って、どんな……？」

「当然、学院長の好物を置いてきたよ」

シャルはシグムントを見上げた。シグムントは得心がいったようにうなずき、

「(絶対王権)アブソリュート・キングダムと(無限連鎖反応)インフィニート・チェーン・リアクションの秘密を置いてきたのだな」

「鋭いね。さすがシグムントくん」

イオネラはにやつと悪女っぽく笑った。

「さあ、ここを切り抜けて、彼を助けに行くよ。シグムントくん、飛べる？」

「快適な乗り心地は保証しかねるがね」

「おっけい。じゃあ、行こう。彼のもとへ」

## 2

撃沈されたダイダロスを横目に、夜々<sup>ヤヤ</sup>は通りに着地した。

石畳を碎き、一メートル近くも陥没させながら、地面に降り立つ。

ダイダロスは噴水をド敷きにして、紅蓮<sup>ベニレン</sup>の炎と黒煙<sup>くろえん</sup>とを噴き上げている。ここまでは、雷真<sup>らいまこと</sup>の恩恵通りだ。しかし――

「お姉さまー 雷真がー 雷真が大変なのー」

小紫<sup>こむらさき</sup>の悲鳴が聞こえてきた。反射的に振り向くと、小紫は雷真を抱きかかえ、今にも泣きそうになっていた。着物にべっとりと雷真の血がついている。

おびただしい出血。血だまりができている。明らかに危険な状態だ。

「どうしたんですか雷真!? 小紫、一体何が――!?」

「わからないの……突然……こうなっちゃったんだよー」

「雷真ー! しっかりしてくださいー 雷真ー!」

雷真は答えない。意識がないようだ。

命綱を切られたような、冷たい不安が夜々の全身を支配した。

怖い。涙が出る。だが、泣いていてはだめだ。夜々は雷真の「相棒」なのだ。雷真が、そう言ってくれたのだ。だから、その言葉に応えなくてはならない。

「小紫、急いでここを離れましょう。結さまは雷真を連れて病院に行きま——」

「何……してる……夜々ー まだ……終わってねえぞ……」

浅い呼吸を繰り返しながら、小紫の腕を振りほどいて、雷真は立ち上がった。肩甲骨のあたりから、衣服越しにもわかるほど、どっと血があふれた。

だが、瞳は輝きを失っていない。強い眼差しで、ダイダロスをにらんでいる。

やがて、燃え盛る炎の中から、黒い貴公子が姿を見せた。

飛び散る火の粉をものもしない。その後ろには、従者のようにつき従うエヴァの姿もある。エヴァはもう歌ってはいない。だが、ダメージを受けた様子もない。ガラス玉のようにがらんだ瞳で、ただ、見るともなしに雷真を見ている。

そう——まだ戦いは終わっていない。

「……下がちなさい小紫。戦いが始まります」

夜々は不安をおし殺し、毅然として言い放った。

小紫はためらった……が、逆らわなかった。唇を噛み、後退する。

「やってくれたな、少年」

エドマンドはやれやれといった様子で、背後の炎を振り仰いだ。

「苦勞して手配したダイダロスが、このザマだ」

「まるであんたが造らせたみたいない言い方だな」

「そう言ったのさ。聞こえなかったか？」

雷真は口をつぐんだ。どうやら、戸惑っているようだ。

夜々の背筋にも戦慄が走る。愚かな野心にとりつかれた、狂気存在だと思っていたが——ひよっとすると、思っていた以上に、危険な相手かもしれない。

「投降しろよ、王子さま」

夜々の不安などよそに、雷真は軽い調子で言った。

「エヴァを置いて街から逃げろ。俺は別に、大英帝国には何の借りもない。あんたひとりでいい、見逃してやる」

エドマンドはまばたきして、一瞬後、腹を抱えて笑い出した。

「本っ当に面白い奴だ！ 最高だ！ マジで惚れそうだよ！ この俺を前にして『見逃してやる』だの、『逃げろ』だの……ライシン・アカバネと言ったか。おまえの名は覚えておいてやるよ。最高の道化としてな」

「投降しろ。このまま海軍の攻撃が始まれば、俺もあんたも黒コゲだ」

「俺は死なない。知ってるか？ 悪党ってのは生まれつきの悪運に恵まれていて、天が



裁きを下すと決めたその日まで、どうやっても生き延びるものなんだ」

「俺の相棒をなめるなよ。あんたを足止めするくらいなら、俺たちにもできるぜ」

「……ジョークのキレが鈍ってきたな。もういい。タネを明かしてやれ、イカロス。」

エヴァアじゃない——!?

夜々はびくつとした。雷真もまた、驚きに目を見張る。

それは、不死鳥が生まれ変わるさまに似ていた。

ダイダロスの残骸、紅蓮の炎の中から、自動人形が飛び出してくる。

流線型のなめらかなボディは西洋甲冑の趣き。コバルトのごとく輝く装甲、バランスの

とれた五体、そして——

夜々の優れた感覚器は、即座に相手の性能を見抜いた。

「雷真！ あれは、そのへんの自動人形とは違います！」

雷真は皮肉げな笑みをエドマンドに向けた。

「……って俺の相棒が言ってるぜ。何なんだ、そいつは」

「ダイダロスの子ともだよ。詩的な言い方をすればね」

「詩情を抜いて言ってくれ」

「即物的な言い方をするなら、本体だ」

「吹鳴——四衝——」

撃発された弾丸のようなイメージ。夜々は石畳を蹴り、一直線に自動人形——イカロスという名か——へと駆けた。途中から雷真の魔力を受け、さらに加速する。

低い姿勢から一気に離陸、イカロスの首を切り取るような、鋭い蹴りを放つ。

とらえた！——と思った瞬間、夜々のブーツがイカロスの頭部を突き抜けた。

それどころか、胴も。胴も。全身がイカロスを突き抜け、反対側に飛び出した。

そこから着地するまでの一瞬に、夜々の脳内を複数の言葉が駆け巡った。

すり抜ける。当たらない。魔術回路。燃えない。——ダイダロスの本体！

（これは、ダイダロスの魔術と同じ……！）

いや、違う。逆だ。イカロスの魔術回路を、ダイダロスは使っていたのだ。

このイカロスこそ、真正正銘、ダイダロスの心臓部だ！

そのことを雷真に伝えたい。伝えなければ。今すぐ。

だが、夜々が言葉を発する前に、今度はイカロスが動いていた。

大きな動きではない。着地した夜々に、振り向きざま、手刀を打ち込んできた。

防ぐまでもない。（金剛力）の強度は機銃射撃にすら耐えるはず——

「かわせ！」

雷真の指示が飛ぶ。夜々はすんでのところで身をそらした。イカロスの指先がわずかにかすった……瞬間、腕から血しぶきが飛んだ。

痛い。でも、大丈夫。まだ表面を裂かれただけだ。

夜々<sup>やや</sup>は驚きとともにイカロスをにらむ。どうやって〈金剛力〉<sup>こんごうりき</sup>を買ったのか。

イカロスはフルフェイスのヘルメットを思わせる顔をこちらに向け、さらに踏み込んできた。夜々はとんぼを切ってかわす。夜々の立っていた場所にイカロスの手が触れた瞬間、石畳に切れ目が入り、断層が生じた。

その一撃で、夜々も理解した。

イカロスは空間を歪曲<sup>わいきょく</sup>させるだけでなく、引き裂くこともできるのだ。

夜々の〈金剛力〉がいかに鉄壁でも、空間ごと切断されてはどうしようもない。

イカロスが軽やかに跳躍し、夜々を跳び越えた。

跳び越えざま、夜々の肩に触れる。

あっけなく肩が裂け、鮮血が噴き出した。

……幸い、腕はまだつながっていた。傷は心臓に達していない。どうにか致命傷はさけている。だが、想像を絶する苦痛が襲い、意識が飛びそうになった。

それでも、痛みに耐え、構えを取る。

「よせ！ 無理に動くな、夜々！」

珍しく、雷真<sup>らいしん</sup>の声に動揺がにじむ。夜々はうつすら微笑<sup>ほほえ</sup>んで、

「平気です。こんなの……」

いつもの彼のように、うそぶいて答えた。

（夜々は雷真のお人形……）

雷真より先に倒れることも、くじけることも、許されない。

「どうした、ライシン・アカバネ。さっきの大口はブラフかい？」

エドマンドは退屈そうに肩をすくめた。

雷真を見定めるように見つめ、ため息をつく。

「おまえ、実はもう、目がかすんでいるんだろ？」

「……………」

「その出血だ、無理もない。正直、殺すには惜しい男だが……まあいい、強情な男は嫌いじゃない。せめて俺の手で終わらせてやるよ。俺は優しいからな」

軽く魔力を練り、イカロスに送り込む。イカロスは夜々ごと雷真を抹殺しようと、跳躍

する代わりに、全力で後退した。

主たるエドマンドと、棒立ち状態のエヴァをかばって、両手を広げる。その直後、銃弾

のようなものがエドマンドを貫いた。

……否、当たってはいない。イカロスの魔術によって、背後に突き抜けた。

銃弾に見えたものは、短剣だった。その意匠には見覚えがある。

「オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある。大言壮語を吐く奴。言葉と

力量が一致しない奴。そして、オレの手を煩わせる、能なしの東洋人だ」

ハーファマントをひるがえし、割り込んできたのはもちろん――

「要するに、俺が嫌いなんだろ――ロキ」

真珠色の髪（いんてい）の少年、（剣帝）ロキだった。

エドマンドはふつと笑って、

「せっかくのご登場なのに、すまないな。俺はライシンと取り込み中でね。（剣帝）くん

のお相手は君に任せるとしよう――將軍？」

「お任せください。陛下、」

不意に頭上から声が降ってきて、夜々は立ちすくんだ。

### 3

本当のことを言えば、ロキは驚いていた。

ロキの背後、古いアパートの屋上から、身軽に飛び降りてくる者がいる。

急動を用いて重力を殺し、ふわりと降り立ったのは、初老の男と若い青年。

青年の方は自動人形（オートマトン）だろう。人間そっくりの見た目だが、（約束された子ども）のロキ

には、人間離れした魔力感知能力が備わっている。

そして、恐れるべきは使い手の方だ。今の今まで、まるで気配を感じなかった。戦闘や火災にもまるで動じず、落ち着いて息を潜めることができる者——生粋うつつすいの軍人だ。間違いなく、実戦を経験している。それも、数多く。

雷真らいしんの戦いぶりを観察していたのか。あるいは、ロキの存在に気付いて、いつでも対応できるような、待機していたのかもしれない。

雷真がふらつく頭を男に向け、うめき声のような声で言った。

「あいつは……。昼間、王子さまと一緒にいた……」

〔賢気様〕 グレンダン將軍だ！

「何だロキ、知ってる顔か？」

「……ととき、貴様の能天気がうらやましくなる。言っておくが、もう、貴様を護まもつてやる余裕はなくなった」

「上等。野郎に護ってもらう趣味はねーよ」

「そうだな、貴様は女に護られるのが似合いだ」

「揚げ足を取るなー」

背中合わせて言い合いながら、ロキは雷真の手に（あるもの）を押し込んだ。

雷真はしっかりと受け取った。ゆっくり確認している時間はない。ロキは素早く魔力を練り、目の前の敵——グレンダン將軍にケルビムを向けた。

ケルビムが宙をすべり、一直線に將軍へ向かう。

一瞬で將軍に肉迫し、ブレードを大振りする。

將軍は人形を使わず、自ら跳んでかわした。年齢を感じさせない、俊敏な動きだ。

ロキは先ほどの短剣を引き戻し、《熱風操作》の魔術を使って、逃げる將軍を追撃した。短剣は意志を持つかのように、ジグザグの軌跡を描いて飛ぶ。

將軍は地を蹴り、短剣の軌道を見切りつつ、十数メートルも後退した。

そうこうするうちに、両者は先ほどの通りを離れ、別の通りに入っていた。

「ほう……私と殿下を分断したか。若いのに知恵が回る。度胸もいい。その髪と、瞳の色は——Dワークスの実験体だな」

「……答える必要はない」

「年長者への敬意が足りんな。だが、魔術師とは得てしてそういうものだ」

苦笑い。將軍は自然体で片手を持ち上げ、

「では、こちらも行こうか。我が手、我が剣——シルフィード」

呼びかけに応じ、將軍の自動人形が変貌した。

ケルビムのような、パーツの移動による《変形》ではない。青年の体が光の粒子となつて飛び散り、再び結合して、ひとりの長剣になった。

細身の刃には一点の曇りもなく、鋭利に研ぎ澄まされている。

ガードは金色にきらめき、柄尻には繊細な女神の彫刻が施されている。優美な剣だ。だが、構々しいほどの殺気を放っている。

その剣をつかみ、将軍がロキを一瞥した——瞬間、将軍の姿が消えた。ぎょっとするロキ。人一倍優れたロキの視覚が、標的を見失った——

直後、冷たい殺気を真後ろに感じた。

本能的に攻撃命令をくだす。ケルビムは即座に反転し、ロキの背後を攻撃した。ブレードを振り下ろす。切っ先は見事、将軍の胸を貫いた。

（——手応えがない！）

思うより先に体が動く。ロキはやはり本能的に、地面に身を投げ出した。その頭上を、将軍の剣が吹き抜けていく。

「かわしたか。さすがに反応がいい」

将軍は目を細めた。どことなく楽しげに見える。

ロキは無言のまま、努めて冷静に、今の現象を分析しようとした。

ケルビムのブレードは確かに将軍をとらえていた。だが、当たらなかった。イカロスの魔術に似ている……が、少なくともこちらは、見た目の上では貫通した。イカロスが空間を歪曲させたのとは違う。

だが、じっくり考える猶予を与えてくれるほど、敵は甘くない。



再び將軍の姿が消え、今度はすぐ目の前に出現した。

ロキはケルビムに魔力を送る。追い詰められて、手を出さざるを得なかった——そんな攻撃。ケルビムのブレードは將軍のわき腹をとらえたが、將軍は平氣な顔で、ケルビムのブレードに貫かれたまま、ロキの首をはねようとした。

とつさに身をかわす。ハーフマントが斬られ、切れ端が飛んだ。

転がってエスケープ。転がりながら八本の短剣を操り、將軍を狙う。

短剣はするりと將軍を突き抜けた。無論、傷ひとつ負わせていない。

(どうということだ……!?)

「考え事かね？」

声は背後で聞こえた。気がつけば、正面に將軍の姿がない——

厚紙をハサミで切ったような、鈍い感触が背中に伝わった。

斬られた。ロキの背中から血の糸が飛び、真珠色の髪にかかる。

(なぜだ——!?)

地面を転がりながら、ロキはなおも頭を働かせた。

こちらの攻撃は当たらないのに、あちらの攻撃は当たる。

幻影ではない。実体を持つ——何か。

自由に強度を変更できる、流体金属のようなものか？

違ふ。そのたぐいの魔術なら、今の（瞬間移動）をどう説明する？

「一インチ以上も浅い……か。見事な反射神経だ。さすがに若いな」

將軍は剣に指を這わせ、血のりをぬぐった。

猛禽モウキンのような眼光を浴びた瞬間、ロキは久しぶりで恐怖心を自覚した。

この男は、過去に何人も——否、何百人、何千人もの命を奪っているに違いない。

死神を前にしたような戦慄せんりつ。腰が退けた一瞬に、將軍の姿が消えた。

人間の脚力では到底不可能な踏み込み。そこから、峻烈しゅんれつな斬撃につなぐ。

ロキはほとんど無意識のうちに、ケルビムを操って、將軍の攻撃を防いだ。一撃。二撃。重い。とてつもなく。ケルビムのブレードが弾かれ、体勢を崩される。立て直そうと魔力を送った瞬間、將軍がまた消えた。

見失う。動揺する。猛烈な殺気を感じる。殺気は頭上——真上だ！

將軍はロキの真上に出現し、切っ先をこちらに向けていた。

対応できない。串刺しくしにされる！

死んだ——と思った瞬間、何かが將軍を引き裂いた。

空気がゆがむ。一拍遅れて、「がおんっ」と聞き覚えのある轟音ごうおんが響き渡った。

將軍はかき消されるように消え、やや離れた場所に再出現した。

軍服の左そでが裂け、血がしたたり落ちている。今ので裂傷を負った！

ロキは信じられない気分で、横槍よこやうの主を振り向いた。

「姉貴……」

「ロキー」

オオカミ犬にまたがり、（ガルム）たちを引き連れて、姉がこちらに駆けてくる。

（今のは……そうか……存在が……密度だ！）

直感が命じるまま、ロキはもう叫んでいた。

「フレイー もう一度だ！」

「させん！」

フレイが魔力を繰る。將軍は瞬時に距離を詰め、オオカミ犬の首を斬り落とそうとした。そうはさせない。將軍の剣を、ケルビムのブレードが受け止める。

フレイの魔力がいきわたり、（ガルム）たちが咆哮する。

音の砲弾が生じ、將軍をのみ込んだ。將軍はまたも姿を消し、その威力をやり過ぎそうとした……が、そのときにはもう、ロキが攻撃態勢に入っていた。

ケルビムの背中から短剣が射出される。マウントされていた八本全部だ。それは八方に散り、將軍の周囲を取り巻いた。

そして、短剣が火を噴いた。

「ケルビムー 焼き尽くせ！」

ケルビムが腕を交差する。短剣が赤く輝き、あたり一帯を灼熱しやくねつさせた。

ありったけの魔力をつぎ込む。出せる限り、すべての力を。これは賭けだ。読みが外れていれば——これで決まらなければ、ロキに勝機はない。

爆発か、地獄の劫火こくわか。強烈な閃光せんこうにフレイが悲鳴をあげた。

やがて熱波が過ぎ去ったとき——

そこには、立ち尽くす將軍の姿があつた。

人肉の焦げる、嫌なにおいが立ち込める。將軍は火傷やけどを負っていた。それも、かなりの重傷だ。剣を取り落とし、ゆっくりと崩れ落ちる。

ロキは油断なくケルビムを連れ、將軍に近寄つた。

將軍は浅い呼吸を繰り返していた。立ち上がる気力も、体力も、そして魔力もないようだ。肝心の自動人形オートマタも壊れている。剣は焦げ、ただの鉄塊と化していた。

將軍はロキを見上げ、にやつと笑つた。

「どうやら……今ので、魔力切れのようだな？」

「……戦えないのは、お互いさまだろう」

「（風の剣舞）の特性を……よくぞ見抜いた……」

見抜いた？ 違う。ほとんど賭けだった。

だが、ヒントはあつた。

姿を消したのに、（音圧操作<sup>ソニッパツ</sup>）を防ぎきれなかった。

消えていても、いなくなるわけではない。

ゆえに、將軍は密度を操作できる——と、ロキは仮定した。密度を疎<sup>そ</sup>にすれば、將軍の肉体は大気に溶ける。溶けた範囲のどこにでも、肉体を再構築することができる。そう考えれば、（瞬間移動）も説明できる。

「私の師団がここにあれば……と思うのは、未練だな……。だが、私は運がなかった……そうだろう……？」

「ああ」

「ふ……皮肉にしか聞こえんな……」

「いや、本心だ。あんたはエドワード・ラザフォードに肩を並べた英雄だ」

「それこそ皮肉よ……あの男の……たわ言……」

「いずれにせよ、今のオレには手に余る大物だった」

「……今の、と言うか……ふてぶてしいことだ」

苦笑する。それから、どこかさばさばとした調子で言った。

「だが、それでいい……。どこまでも驕<sup>き</sup>り、その驕りを真実の力に変えろ……。若者には……それができるのだから」

「――」

「だが、年寄り……そうはいかん……。どうやら……若者の熱気に当てられて……分をわきまえぬ……夢を見たようだ……」

言い終わるや否や、將軍の腕が一閃した。

ふところから短刀を抜き放ち、自らの胸に突き立てる。

焼かれ、切れ味の鈍った刃が、肉を裂いて心臓を破る。

目をむき、大きく蛇撃。やがて、ゆっくりと手足が突っ張り、將軍は事切れた。

その壮絶な死に様を、ロキは畏怖にも似た気持ちで見届けた。

ため息をつき、姉の方を振り向く。

フレイはぎくつとして、叱られた仔犬のように小さくなった。

「なぜ、きた」

「う……ごめんなさい」

「オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある。オレの忠告を無視する奴。

オレの窮地を救って、誇りを傷つける奴。そして、オレに心配をかける奴だ」

顔を背け、ひどくつつけんどんに言う。

「……あんたのおかげで、また命拾いした」

フレイはようやく表情をゆるめ、嬉しそうに、ロキの背中に飛びついた。

冷たい雨がイオネラの頬を打つ。

シグムントの背中は、思っていた以上に不安定だった。

高波にさらわれた小舟のようだ。風圧にあおられ、呼吸ができない。

仕方なく、シャルの背中にしがみつく。シャルの腰はほっそりとしていて華奢だったが、乗り慣れているだけあって、極めて安定していた。

「いたわー あそこー」

シャルが叫び、シグムントの翼の下、燃え盛る中央広場を示す。

残り火がくすぶり、瓦礫が焦げる。まるで戦場のような光景だ。

そこに、黒い衣装のエドマンドと、エヴァと、夜々と、そして雷真がいた。

「何やつてるのよ、あいつ……大怪我してるじゃないー」

「いかな。夜々の魔力も尽きかけている。おまけに、そちらも重傷だ」

シグムントの声にも緊迫感が漂う。イオネラはぎゅっとシャルの腰を抱きしめた。

「気をつけてー 夜々ちゃんの肌を傷つけるなんて、普通じゃないよー」

そのとき、全員の視界に、青い装甲の自動人形が入った。

シグムントが息をのむ。

「イカロス……」

「何よ。知ってるの？」

「いや……しかし……」

答えをためらう。何か知っているようだが、問い詰めている場合ではない。

「話は後ね。やるわよ、ラスターカノ——」

「待って！」

シャルの腰を引っ張り、引き止める。

「よく見てシャルちゃん——あの自動人形——ダイダロスと一緒にだよ——」

「え……どういう意味？」

「撃つても無駄ってこと——それより、雷真くんのところへ私を下ろして——」

「何ですって!? そんなことしたって——」

シャルはあきれ顔でイオネヲを振り向き、そして、口をつぐんだ。

イオネヲの無謀な願いには、大事な意味があるのだと、わかってくれたようだ。

「……シグムント、突っ込むわよ——」

「心得た」

シグムントが翼をたたみ、弾丸のような姿勢で広場に突っ込む。

ハードランディング。衝突に近い勢いで着地する。四肢を踏ん張り、瓦礫を蹴飛ばしな



がら、横すべりで、雷真とエドマンドのあいだに割り込んだ。

突然降ってきた巨体の竜に、夜々も、雷真も、エドマンドさえも驚いたようだ。

「——おや、誰かと思えば。ずいぶんと派手な登場だな、イオ。俺のものになる——その決心がついたのか？」

「つかないよ」

「なら、つけてもらおう」

エドマンドが手をあげる。その動きに呼応して、通りの向こうから、建造物の陰から、自動人形が次々と現れた。兵を伏せておいたのか——

シャルは唇を引き結び、シグムントをそちらに向けた。

「教授はシグムントから降りなさい。あいつらは、私たちが引き受けてあげるわ」  
それは無理だ、とイオネラは思った。シャルの魔力はすっからかんだ。

——だが、ありがたい。

イオネラはシグムントの背中からすべり降りた。シャルはシグムントを飛ばして、死に  
じみた自動人形の群れに突っ込んでいく。

雷真は仰天したようだ。早口になって叫ぶ。

「待て、シャル——イオも、そいつに近付くな——」

シャルには声が届かない。そして、イオネラにも。

イオネラの瞳には、もうエヴァしか映っていない。

（エヴァ……）

変わり果てた愛娘。

虚ろな瞳は何も見っていない。ほこりに汚れた顔に、涙のあとが痛々しい。まだ自我が残っているのか。だとしたら、さぞや、つらかっただろう。でも——それも、もう終わる。

ひと目会えて、思い残すこともなくなった。

イオネラは深呼吸をして、エドマンドをにらみつけた。

「そんな怖い顔するなよ。今からでも俺のもとにこい」

「断る——だよ、殿下」

雷真の口真似をして答える。くす、と思わず笑みがこぼれた。

（ありがとう。私の背中を押してくれたのは、雷真くん……君だよ）

あんなに血まみれになって、機巧都市を、私たちを、救おうとしている。だから、私もそれに応えたい。

私が犯したあやまちなら、私が責任を取らなくちゃ。

「雷真くん。君の評価だけと」

肩越しに振り返り、にこっと笑いかける。

「やつぱり、Aプラスをあげちゃうね」

「やめろー 何をするつもり——」

イオネラは白衣とブラウスをはだけ、胸元を開いた。

あらわになる肌。みぞおちのあたりに、機巧装置が取り付けられている。

「殿下。これが何か、わかる？」

エドマンドはイオネラの胸を眺め、肩をすくめた。

「推理力が足りないね。殿下の評価はDだよ」

「手厳しいな。それが一体何だつて？」

「エヴァと私をつなく、（へその緒）だよ」

「——」

「エヴァは私とつながることで、擬似的に禁忌人形と同等の魔力親和性を得ていたの。殿下はエヴァのリミッターを外したと言った。でも、私がどうしてリミッターをかけていたか、考えもしなかったの？」

エドマンドも、雷真も、夜々も、息を詰めて、イオネラの言葉を聞く。

「（無限連鎖反応）はね、反応が次の反応を呼ぶ連鎖的サイクル——理論上、どこまでも

魔力を増幅できる。だからこそ、危険なんだよ」

「危険……」

「どこかでブレーキをかけないと、それはどこまでも広がっちゃう。と言っても、それは理屈の上での話で、回路が耐え切れずに自壊しちゃうけどね」

つまり、リミッターがなくなった今――

イオネラはそつと、指先で自身の胸に触れた。

ふくらみの表面をすべり、機巧装置に手をかける。

「ちよつとバランスを崩してやるだけで、エヴァの心臓は自壊する」

「……何かと思えば。だから俺が使っているんだろう。世界の王がさ」

「騒がたね、殿下」

イオネラは躊躇せず、白衣の下から拳銃を引き抜いた。

誰も、対応できなかった。

イオネラは既に、びたりと銃口を当てている。――自分のこめかみに。

「私が絶命する瞬間、（へその尾）のつながりは切れちゃうよ」

「……………」

「この距離でその衝撃が伝われば、殿下がいくら頑張っても、制御するのは不可能だよ。さて、ここで質問です。無制限に拡大されていた魔力が、行き場を失くして術者に返ってきたら――どうなるでしょうか？」

エドマンドのひたいに冷や汗がにじむ。

膨大な魔力が逆流すれば——エドマンドの脳に殺到し、脳細胞を破壊する！  
今すぐエヴァの支配権を放棄すれば助かるだろう。だが、イオネラにはもう、そのことを教えてやる義理も、人情もなかった。

「一緒に死んでね、殿下」

「待て——」

エドマンドの叫びも、間に合わない。イオネラは既に引き金を引いていた。

がちんつ、と音がして撃鉄のロックが解除される。

金属のバネがハンマーを動かし、弾丸の尻をぶっ叩く——

——はずだったが、しかし、弾丸は発射されなかった。

驚いて目を向けると、イオネラの腕に、夜々がしがみついていた。

撃鉄は弾丸の尻ではなく、夜々の指を叩いて、止まっている。

「やめろ……バカ野郎——」

雷真が叫んだ途端、背中から血があふれ、びちゃびちゃと地面を叩いた。

「このバカ教授——俺の努力を無にする気か——」

「雷真くん……」

「あんたが死んで終わるなら、俺は何のためにここまでやったんだ——」

「でも——」



「うるせえ！ 黙って見てやがれ！」

吐き捨てるように言う。と同時に、雷真は意外な行動に出た。

何と自ら、エヴァに向かって駆け出した！

もつれる足。だが、俊足だ。雷真は一息に駆け寄り、エヴァに向かって手を伸ばす。させじとイカロスが割り込んでくる。だが、夜々もそうはさせない。不発させた拳銃を投げ捨て、後ろからイカロスにしがみつき、妨害した。

夜々の両手はすかっと空を切り、おまけに、イカロスに触れられた。

ぶしゅーっ、と噴水のように噴き上がる鮮血。

そうこうするうちに、雷真がエヴァに肉迫していた。

エヴァの頭をつかみ——だが、そこまで。

雷真はエドモンド本人に蹴飛ばされ、無様に地面を転がった。

「感謝するぜ、ライシン・アカバネ」

エドモンドが笑い、雷真の頭を踏みつける。

「さっきのは際どいタイミングだった。さすがの俺も思案の外だったよ。まさか、イオが自殺を考えるとはな。だが、これでデッドエンドだ」

雷真を踏みつけたまま、エドモンドがイカロスに手を振って見せる。

イカロスは主の意図を理解し、拳銃を拾い上げた。

銃口を雷真に向け、撃鉄を起こす。

夜々が何かする前に、イカロスは引き金を引くだろう。イオネラはさすがのような気持ちで、ほかにどうすることもできず、神に祈った。

「じゃあな、ライシン。おまえは最高に面白いヤツだった」  
そして、イカロスが引き金を――  
引かなかった。

「……………」

イカロスはゆっくりと銃をおろし、棒立ちになってしまった。  
明らかに稼働レベルが落ちている。まったく動こうとしない――  
そして、気付く。あたりにこだまする、優しい旋律に。  
エヴァが歌っていた。

両手を組み、ほがらかに――高らかに。

歌は魔力の波長をたたえ、機巧都市全域に広がっていく。

シャルの目の前で、自動人形の群れが攻撃をやめた。

ブリキの自動人形は小銃を落とす、戦闘用ゴーレムは膝をつく。

エヴァの歌声が、（絶対王権）の圧政を洗い流していく。

歌をやめたエヴァは、立ち尽くすエドマンドを押しつけて、雷真を助け起こした。



「ライシン・アカバネさま」

イオネラは信じられない思いで、その声を聞いた。

エヴァの言葉。歌ではない、ちゃんとした言葉――

「やはり、貴方は愉快な方です」

「……誓め言葉と受け取っておくぜ」

そのときになって、ようやく、イオネラは気付いた。

エヴァの首に、無骨な鉄の輪がかけられている。

イオネラ自身が作ったものだ。一時間前、牢獄の中で。

そして、イオネラの右手には。

いつの間にか、同じように無骨な、鉄の腕輪がかけられていた。

「――あのとき――」

夜々が発砲を妨害した、あのときだ！

では、雷真の闇雲な突進は、初めからエヴァに首輪をかけるため……！

雷真はエドマンドの足を払いのけ、

「デッドエンドだ、バカ王子」

エドマンドのあとに、重い鉄拳を叩き込んだ。



# Epilogue

## 夜会、ほころびて#2



戦局の決定的な変化は、すぐさま都市全域に伝わった。

自動人形オートマタのコントロールを取り戻したことで、軍も警察も、ただちに機能を回復した。エドマンド率いる（叛乱軍）はわずか十数名にすぎず、エドマンドとグレンダン將軍が戦不能になったことで、戦意も失われていた。

駆けつけた機巧警邏隊キョウカウセイロウダイによって、エドマンドは捕縛された。

エドマンドは嚴重に拘束され、いずこかへと連行された。結局、彼が何を考えていたのか——いるのか、雷真には最後まで理解できなかった。

「イオネラ・エリアーデ教授と、その自動人形オートマタですね。ご同行願います」

警邏の指揮官が現れ、イオネラに身分証を提示した。

指揮官は雷真と夜々、それからシャルにも一瞥いちめくをくれた。

「君たちにも事情を説明してもらいたい。これは都市警察だけでなく、国家の要請です。なお、既に王立機巧学院を通してあります」

命令書を書いて見せる。雷真の目にも、学院長のサインが見て取れた。すなわち、拒否する自由はないということだ。実に手回しがいい。

「全員で行くこともないでしょう？ 教授には私が同行するわ」

シャルが自ら名乗り出る。いつになく心配そうに雷真を眺め、

「そんなざまじゃ、途中で死んじやいそうなもの。さっさと病院に行きなさい」

「シャル……悪い」

「ふん、別にお礼なんかいらないわよ。高貴なる者の義務よ」

「シャルちゃんは、お礼よりもデートして欲しいんだよね？」

「ただ誰がそんなこと言ったのよー 教授だからって適当なこと言わないでー」

イオネラと何やら言い合いながら、指揮官とともに去って行く。

雷真は朦朧とした頭でそれを見送り、そして、ゆっくりと倒れた。

「雷真！ 大丈夫ですか？」

夜々があわてて支えてくれる。おかげで、頭を打たずに済んだ。

「悪いな……夜々。いつも……おまえには……」

「しっかりしてくださいー 今、お医者さまがきましたー」

医師、看護師が駆け寄ってくる。どうやら、運んでいる余裕はないと判断されたようで、すぐさま応急処置が始まった。麻酔もなしで背中を縫われる。鈍い痛みで顔をしかめつつ、泳いだ視線が、ふと、小紫の姿をとらえた。

小紫は夜々の背中に隠れ、小さくなって、雷真を見下ろしていた。

「小紫……どうした？」

この世の終わりのような顔だ。小紫はくしゃくしゃと綺麗な顔をゆがめ、  
「ごめんね……私、肝心なところで……役に立たない……」

「違うー おまえがいてくれたから——」

激痛が走り、また出血した。看護師の手に力がこもり、医師の処置が乱暴になる。それだけ危険な状態ということだ。

小紫はびくつとのけぞり、そして、泣きながらさびすを返した。

「待てー 小紫ー」

「雷真ー もう無茶しないでくださいー 治療の途中ですー」  
起き上がろうとする雷真を、夜々が抱きしめ、止める。

「だが、小紫が——」

「大丈夫です。いりり姉さまが——硝子シロコがいますからー」  
刹那トナリ、ちくつ、と首筋に針が刺さった。

鎮静剤を打たれたようだ。ずっしりと体が重くなり、思考が麻痺する。  
完全に意識を失う直前、もう目覚めないかもしれないと、本気でそう思った。

「」

「何やら、遠くで会話が聞こえる。」

「——したこと、オレは納得しちゃいない。あんたは姉貴を危険にさらしたんだ」

「ちゃんとした計算があつてのことだよ。ねえ、フレイちゃん？」

「う……あつた」

「あんたは黙つてろ——」

「う……ふえっ」

「な……泣くな——」

「つまり要約すると、ロキくんはお姉ちゃんがとっても大事だから、ちよつとでも危険のあることはさせたくなかった——ってことだよね？」

「オレがいつそんなことを……もう勝手にしろ——」

ふ……と、つい笑つてしまう。

「雷真！ 気がついたんですか!?」

耳元で夜々の声がして、雷真は目を開いた。

夜々が漆黒の眼を大きく見開いて、雷真をのぞき込んでいた。

「雷真……雷真……」

泣きながらすがりついてくる。雷真はその小さな頭を撫でてやりながら、

「悪い……また……心配かけちゃったな……」

雷真が寝かされていたのは、例のごとく、医学部一階の病室だった。

「気分はどうか、雷真くん？」

にこにことはがらかに、イオネラが微笑<sup>ほほえみ</sup>を向けてくる。

「無理しなくていいよ。輸血はしたけど、まだまだ血が足りないからね」

「輸血……誰<sup>だれ</sup>の血だ？」

「ロキよ」

横から答えが飛んでくる。イオネラのとなり、金髪<sup>きんぱつ</sup>の美少女が立っていた。

「シャル……それに、シグムント」

「気分はどうだ、雷真」

「よくはない……な……」

「ふん。貴方<sup>あなた</sup>って本当、バケモノじみてるわね。あれだけ血を出しても死なないなんて。

医者もびっくりしてたわよ」

憎まれ口<sup>にくもく</sup>を叩く。だが、シャルの瞳<sup>ひとみ</sup>はうるうると揺れていた。

「本当は、シャルちゃんが血をあげたかったんだよね」

「ただ誰がそんなこと言ったのよー」

「う……私は……あげたかった……」

残念そうな声。ロキのベッドのすぐ横に、フレイが座っていた。

夜々が障孔を開きつつ、説明したところによると――

シャルとは血液型が合わず、フレイは貧血気味ということで、ロキの血をわけてもらったらしい。「ふたりの血がひとつになったってことよね!」と、シャルは愛に興奮していたが、正直、わけがわからない。

雷真の手術は、最終的にクルーエルが行ったようだ。一度は町医者がさじを投げたというから、かなり難しい状態だったのだろう。ロキの血液は一般人よりも魔力親和性が高くおかげで雷真は命をつなぐことができた……そうだ。

(やれやれ……ロキとドクターに、また借りを作っちゃまったのか)

とは言え、命あつての物種だ。肝心の復讐が成し遂げられないまま、異国の地で犬死にしたのでは、さすがに浮かばれない。

(……いや、犬死にってわけでもなかったな)

雷真のベッドを、ずらりと取り囲む少女たち。その中に、イオネラと同じ顔がもうひとつある。例によって無表情、無機質で硬い顔つきだ。

「よう、エヴァ……おまえは、もういいのか?」

「愉快な方ですね。ご自分の方がよほど重傷ですのに」

「愉快とか言うな」

「滑稽な方ですね」

「うん……相変わらずで安心したぜ」

「滑稽ではありますが、その……」

エヴァは口ごもり、言葉を探すように、視線をさまよわせた。

「わたくしも、お礼を申し上げることに、やぶさかではありません」

歯切れの悪い反応だった。ほんのり頬が色づいて見えるのは、目の錯覚だろうか。よくわからないが、シャル、フレイ、夜々の目が一齐にきつくなった。

得体の知れない悪寒に震えつつ、雷真はイオネラにささやいた。

「おい、エヴァの調子は大丈夫なんだろうな？ 様子が変だぞ……？」

「正常だよ。雷真くんのおかげで、また一歩、私の理想に近付いたかもね」

イオネラは上機嫌だ。それからエヴァを抱きかかえ、湿った瞳で雷真を見た。

「私からお礼を言わせて。ありがとう、雷真くん。君のおかげで、私たち……こうして、今も笑っていられるよ」

「やめてくれ……。俺は何もできなかった。タイダロスを沈めたのはロキとシャルの力だ。俺はただ、エドモンドに殺されかけただけ——」

「違うよ」

イオネラは真正面から雷真を見つめ、言い切った。



「君が引つ張つてくれなかつたら、私はあきらめていたよ」

その言葉にはエヴァだけでなく——シャルも、フレイも、感じるところがあつたようだ。イオネラと同じように、熱っぽい視線を向けてくる。

雷真は尻のあたりがむずがゆくなつた。何とも居心地が悪い。

雷真は視線から逃れるように、話題をそらした。

「で、あんたはどうするんだ、これから」

「私は——やつぱり、責任を取らなくちゃだからね」

重々しい言葉。しかし、どこか暗れやかな顔で、イオネラはうなずく。

「まずは学院理事会に出向いて、聴取を受けないと。王宮にも行かないとだし……きっと魔術師協会の査問もあるよ。ひと通りの取調べが終わつたら、たぶん刑事裁判」

裁判。聞いただけでも気が重くなる言葉だ。

「大丈夫なの？ ひよつとしたら、パパを引かされるんじや……」

シャルが心配そうにつぶやく。雷真は頭の上に疑問符を浮かべ、「パパ？」と訊いた。言いくそうなシャルに代わり、シグムントが口を開いた。

「エリアーデ教授が『黒幕として』処分されるかもしれない、ということだ」

「どういう意味だ？」

「君が眠っているあいだに、事態はよからぬ方向に推移した。皇太子エドマンドの身柄は、

移送中に消えたのだ」

「な——」

雷真は仰天した。王子は確かに拘束されたはずだ。それも嚴重に。魔術を使える状況でもなかった。だとすると……。

誰かが、逃がした？

英国内部に、息のかかった連中がいたのか……!?

「大丈夫だよ」

イオネラはエヴァの首にしがみつき、にっこりと笑った。

「私には英雄エドワード・ラザフォードがついてるからね」

「学院長……。だが、あいつは……」

「危険なおじさまだからこそ、毒にも薬にもなるんだよ」

雷真の反論を封じるように言う。そして、えへん、と胸をそらした。

「それに、私はこれでも天才の端くれだからね。少し時間はかかるかもしれないけど——

私は必ず、ここに帰ってくるから」

うふふ……、と不気味に笑う。雷真はぎくつと身を引いた。

「覚悟しておいてよね、雷真くん」

「……何度きても、夜々<sup>や・や</sup>はやらないからな？」

「夜々ちゃんのことなら、もつと効率のいい手段を思いついたよ♡」

雷真は首をひねったが、夜々、シャル、フレイが同時に反応した。

夜々の瞳孔が開き、シャルが冷ややかな目をして、フレイが涙ぐんだ。ついでに言うところキがあきれ顔でため息をつき、シグムントが小さく笑った。

嫌な予感しかない。だが、雷真は勇気を出して、イオネラに確かめた。

「……どんな手段だ？」

イオネラは雷真のベッドに身を乗り出してきた。

夜々を肩で押しのけ、雷真のすぐ目の前にまで迫る。

「将を手に入れば、馬も手に入ると思わない？」

無惑的な上目遣い。白衣ごしに胸のふくらみを感じて、雷真は赤面した。

「……」と謎の地震が発生し、天井からほこりが落ちてきた。

夜々の髪が蛇のようにうねり、どす黒い妖気が部屋中を覆い尽くす。

「ちよ……待てよ夜々？ 俺はまだ病み上がり……待てー 落ち着けえええー」

直後、病室に断末魔のような叫びがこだました。

雷真を窒息死の危険から救い出したのは、意外にもエヴァの（絶対王権）だった。

魔術回路を封じられた夜々は、シャルとフレイの二人がかりで引きはがされ、部屋の隅



でしくしく泣いている。

「そ……それはそうと」

ぜえぜえと呼吸を整えながら、雷真は誰にともなうたずねた。

「夜会の方は、どうなってる？」

自然と、一同の視線がイオネラに集まった。

「そか。みんな、まだ知らないんだね。今日明日中に、執行部から正式な発表があるはずだけど——〈中断期間〉を前倒しすることになったよ」

「……中断期間？」

おうむのように繰り返すと、シャルがあきれ顔で説明してくれた。

「夏休みよ、夏休み。八月と九月は、学院のカリキュラム上、長期休暇になってるのよ。」

夜会だけ進めるわけにはいかなから、一時的に中断されるの」

「——初耳だ」

「まあ、極東出身の貴方あなたには関係ないかもね。でも、英国や、近隣国の学生なら、田舎に戻ったりもするのよ」

そのあとを引き取って、イオネラが説明を続ける。

「本当なら、もう少ししてから——〈五十番目の夜〉が終わってから——が通例なんだけどね。第五十位近くまで棄権が続いちゃったから」

暗い顔でエヴァがうつむく。

エドマンドがしでかしたことは言え、責任を感じているようだ。

「わざわざ休暇を前倒ししたってことは、棄権した連中、失格にならないってことか」

「そうだけど、雷真くん評価C」

「点が辛いな！ 正解なんだろう？」

「もっと頭を使わないと、おバカさんになるよ」

「……休暇のあいだに、自動人形オートマトンを修復、もしくは調達しろってことだな？」

「そう。休暇が明けたら、夜会は相当騒がしくなるね」

同意を求めるように、ロキに視線を投げる。

ロキは険しい顔で本を読んでいたが、視線に気付き、大儀そうにうなずいた。

「オレたちは間違はなく狙われる」

雷真は動かない首を動かして、そちらを向いた。

「どういう意味だ？」

「教授に言われたばかりだろう。もっと頭を使え、蛮勇バカ」

「いきなりケンカを売るな！ つか、おまえだって相当無謀だろう！」

「実態はどうあれ、オレたち姉弟姉弟と貴様は（仲間）だと思われている」

「二か月後には、棄権していた連中も含めて、二十人以上の（手袋持ち）が一度に舞台上がるんだ。クロイツリッターの一件を忘れたのか？ 周りの連中は確実に徒党を組んでくる。それが一番効率的な選択だ」

なるほど、と思う。

雷真とロキは、夜会の舞台でも共闘したことがある。ロキとフレイに至っては、共闘を公言した。となると、当然、こちらは（チーム）と見なされているはずだ。

雷真たちに対抗するには、彼らも（チーム）を組むしかない。

そして、そうした工作をするだけの時間がある。何と二か月も――

この上もなく厄介だ。一方で、（中断期間）をありがたいと思う気持ちもある。

二か月。それだけの時間があれば。

鍛錬できる。傷を癒やすことも、できる。

このまま実戦を重ねたところで、おそらく、マグナスには勝てない。

今回のことで、よくわかった。マグナスはエヴァの（絶対王権）の中にあっても、自在

に自動人形を操ることができた。一方、雷真はと言えば、不完全な紅翼陣によって、あや

うく命を落とすところだった。

未熟だ。この上もなく。

仲間がいなければ、何もできない。

このままでは、駄目だ。

このままでは――

兄には、到底、追いつけない。

「雷真……？」

急に黙り込んだ雷真を心配したのか、夜々が心配そうに寄ってきた。

雷真は応えず、窓の外に視線を投げた。

うす曇りの空は燃えるような赤。普段なら、とつくに夜会が始まっている時刻だ。今宵、夜会が始まらない。

しかし、そう遠くない未来に。

血塗られた闘争の宴が、再び始まる――



## あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

おかげさまで、機巧少女も五冊目となりました。

実は前回の4を、「第一期完結！」くらいの気持ちで書きました。コミック・小説同時刊行し両方にドラマCD付き特装版を作っていただけということで、プロモーション的に大盛り上がりになるところですし——「これからひとつ、3巻までの内容を踏まえて、最初のヤマを作っておきたいぞ！」と思っただけです。

夜々の再ビックアップや、仲間たちがみんなで戦うオールスター(?)バトルも、そうした設計思想に基くものでした。しかし——

……アレ？ その理屈でいくと、今回の5も「第一期完結！」っぽくない？

ちなみに現在、6の構想を練っているところなのですが、そちらはストーリーの区切れるな盛り上げをしたいので、「第一期完結！」っぽいお話になる予定——

何このグダグダ感！　いつになったら第一期終わるの!?

ま、まあ、クライマックスが持続できるなら、それに越したことはありません。僕自身、そういうお話が大好きです！

ですが、この業界、「第二期」があるかどうかは人気しだいなので……そういった意味でも、何とぞ、よろしくお願いいたします……！

それにしても、今回は難産でした。

僕のプログをご覧になった方はご存知かと思いますが、一行も書けない日が続いて、かなり追い込まれました。ぶっちゃけいつものことなんですけどー

いつもよりキツかったのは、ギリギリまで手こたえが感じられなかったことで……ようやく「何とかなったか……な？」と思ったのは、つい昨日、著者校正をやっているときでした——とんだけギリギリだよ！

いやもう、ゲラは海冬レイジの細かい修正指示で埋め尽くされました。プロ作家としてどうなんだそれー　そんなわけなので、担当の庄司<sup>いさお</sup>さんには多大なるご迷惑をおかけ……することになりますこれからすみませんー

今回も、るろおさんには大変お世話になりました！

イオネラは予想外のコースに球がきて驚きました。アホっばい子をイメージしていたら、賢そうなお嬢さんになって、なるほど納得ー この理知的美少女が「は○てない」とかすごく……イカしてます……ー るろおさんありがとう！

そして、將軍を描いてただけて超ハッピーー 素敵よ、おじさま素敵ー  
イカロスの設定画を拝見したときは衝撃が走りました。むちゃくちゃカッコイイ。このあたりのラフ画も、いつか公開される日がこないかな……と夢見ています。

私事ですが、今月発売の月刊コミックアライブにて、海冬レイジ原作の連載まんがが始まります。描いてくださるのは飯田のぎさんです。正直、原作はちよつとアレなんです……のぎさんの超絶技巧で面白可愛くなっています！ 明るくおバカなラブコメを目指しましたので、よろしければぜひぜひ。

ではまた次回、機巧少女6でお会いできますように！

こんにちは、絵の人です。  
五巻ですよ。

今回は登場はしてたけど絵の無かったお嬢さん…  
小紫さんや火垂さんを描けました。

ひーほー。

何だか順調にキャラ増えて、忙しくなってますが  
次巻はどんなお嬢さんが出るのかな？ と  
楽しみだったりしています。





マシンドール  
**機巧少女は傷つかない5**  
Facing "King's Singer"

発行	2011年3月31日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
著行人	三坂卓二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒104-8602 東京都中央区銀座 6-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2011 Reiji Kaiho  
Printed in Japan ISBN 978-4-86011-384-3 C0975

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※乱下本・落丁本はお断りいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話 0570-002-001

受付時間 10:00～18:00(土日、祝日除く)

**【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】**

あて先 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー  
MF文庫J編集振付 『海冬レイジ先生』係 『るるお先生』係



左記より本書に  
関するアンケートに  
ご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料  
持ち受けプレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送  
信時にかかる通信費はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保  
護者の方の了承を得てから回答してください。

